e+FICTIONS

SEIKAISHA

本作品は、縦書き表示での閲覧を推奨いたします。横書き表示にした際には、表示が一部くずれる恐れがあります。

ご利用になるブラウザまたはビューワにより、表示が異なることがあります。

ダンガンロンパ霧切 1

北山猛邦

Illustration／小松崎類

星海社

1
ダンガンロンパ
DANGANRONPA
霧切
KIRIGIRI

Contents

第一章
シリウス天文台殺人事件
1

眠っている間に、涙をたくさん流したような気がする。

どうしてわたしは泣いているんだっけ。

哀しいことがあったから？

それとも、あの夢を見たから？

理由はよくわからない。

涙ですっかり頬が濡れちゃった。

顔を拭おうとして、妙な違和感を覚える。

右手が顔に届かない。

手首に痛みを感じる。

その刺激で、意識がかすかに覚醒した。

まだぼんやりとする頭をゆっくりと起こし、右手首を見る。

見慣れない腕輪がはめられていた。黒光りする頑丈そうな腕輪だ。かわいらしいとはとても云い難いチェーンまであしらわれている。

こんなのわたしの趣味じゃない。

何よりチェーンが問題だった。右腕を動かそうとすると、チェーンが張りつめて動かすことができない。わたしの右腕は、頭上に伸ばした状態で拘束されていた。

チェーンの先を目で追うと、もう一つの腕輪があって、ベッドの脚にはめられている。

もやがかかったような意識の中で、わたしは自分の置かれている状況をようやく理解し始めていた。

わたしはベッドの上ではなく、床に突っ伏している。どうやら手錠によって右腕をベッドの脚に繋がれ、その場から動けない。拘束されているのは右腕だけで、他は動かすことができるようだ。

わたしは這うようにしてベッドに近づき、ある程度右腕が自由になる場所で、両手を床につくと、ゆっくりと上半身を起こした。

めまいがする。

一体、何が起きた？

どうしてわたしはこんなところに倒れている？

思い出そうとすると、記憶にノイズがかかる。チューニングを合わせるようにして、わたしは直前の記憶を探った。

真っ先に思い出されるのは、あの忌(い)まわしい看板。
そこに書かれていた文字が一瞬、フラッシュバックする。

『ようこそ　絶景のシリウス天文台へ』

たそがれの薄闇(うすやみ)に浮かびあがって見えたその看板は、誰の悪戯(いたずら)か、『景』の字に赤いスプレーで×が書かれ、さらに『望』の字に変えられていた。

『ようこそ　絶望のシリウス天文台へ』

ようこそ 絶景の
望
シリウス天文台へ

そうだ、ここはシリウス天文台と呼ばれる建物だ。個人所有の天文台で、俯瞰（ふかん）すると建物全体が星型になっているという。五つの鋭角（えいかく）を頂点とする星の、それぞれ二等辺三角形が硝子（がらす）張りの客室。中心の正五角形はドーム状のホールで、かつてはここで銀河の観測も行なわれていたという。

どうやらわたしはその客室の一つで倒れている。

次第に記憶が鮮明になってきた。

大丈夫、思い出せる。

わたしの名前は……

五月雨（さみだれ）結（ゆい）、十六歳。

探偵だ。

重要人物からの依頼があるということで、わたしたち五人の探偵はシリウス天文台に招集された。探偵にとって依頼は存在理由そのもの。いかにも秘密めかした依頼となればなおさら、わたしたちはその魅力から目を背（そむ）けることはできない。

ところが依頼主など現れなかった。

今さら疑う必要もないだろう。わたしたちは騙（だま）されたのだ。犯罪を目論（もくろ）む何者かによってこんなところに集められ、わたしはこんな目に遭（あ）っているのだ。

状況がはっきりしてくるに従って、恐怖を覚え始める。誰の仕業かわからないけれど、わたしはこの異様な状況のなか、完全に自由を奪われている。何より、意識のないうちに弄（もてあそ）ばれたという事実に鳥肌が立つ。何かへんなことされていないだろうか。とりあえず痛みや外傷がないのが救いだ。

ずれた眼鏡（めがね）の位置を直しながら、わたしは周囲を見回した。

ベッドの上にわたしのリュックが置かれている。ということは、ここはわたしの部屋なのだろう。窓にカーテンが引かれたままになっている。外の様子は窺（うかが）えないが、けっして明るくはないようだ。夜なのか、それとも雪のせいなのか……

部屋の奥に天体望遠鏡が設置されている。わたしが持参したものではなく、元からここにあったものだ。しかし降（ふ）り出した雪のせいで、星空を観察することはできなかったのを覚えてる。

ふと振り返る。入り口のドアは閉じられているため、部屋のすぐ外にある五角形のホールの様子は窺えない。

静かすぎる……

他のみんなは？

この状況で誰も騒（さわ）いでいないのは何故（なぜ）？

もしかしたら他のみんなも、わたしと同じように拘束されていて動けないのかもしれない。あるいはまだ

意識を失っているのかも。

誰が何を企んでいるのか知らないけれど、このまま思い通りにさせるわけにはいかない。

立ち向かわなきゃ。

わたしは探偵なのだから。

それにはまずこの手錠をどうにかしないといけない。ベッドの脚に繋がれている以上、立ち上がることもままならない状態だ。チェーンの付け根のあたりに鍵穴があるけれど、鍵は見当たらない。

さすがにこのベッドを引きずって歩くわけにはいかないし……

ん？

ベッドの脚は円柱状で、それぞれ四隅（よすみ）を支えている。手錠はそのうちの一つにかけられている。

でもこれって……よく考えたら、ベッドを持ち上げることさえできれば、脚の下から手錠を抜くことができるのではないだろうか。

シングルサイズのなんてことない普通の木製ベッドだ。これならわたしの力でもなんとかなるはずだ。

わたしは早速（さっそく）、ベッドの端を掴（つか）んで持ち上げてみた。それほど腕力のないわたしでも、かろうじて持ち上がる。それで充分だ。脚にはめられている手錠を引き抜く分だけ、下に隙間（すきま）ができればいい。

せーの、で力を込めると、ベッドの脚が数センチ浮いた。

そこから手錠を抜く。

やった、意外と簡単に自由を取り戻すことができた。

わたしをこんな目に遭わせた人物は、女の力ではこのベッドを持ち上げることができないとでも思っていたのだろうか。もしそうだとしたら、その油断に感謝だ。

わたしはようやく立ち上がることができた。

立ちくらみを覚えたが、大丈夫。軽く屈伸（くっしん）運動してから、うんと伸びをする。問題ない。わたしはやれる。

わたしは右腕に手錠をぶらさげたまま、そっとドアを開け、中央の五角形ホールを覗（のぞ）いた。

誰もいない。

慎重（しんちょう）に周囲を確認しながら、ホールに出る。

ホールの中央には木製のそっけない円卓が置かれている。かつてここには、鉄製の丸い台座が設置され、巨大な天体望遠鏡があったらしいのだが、昔に取り払われてしまったようだ。現在ではがらんとして空虚な光景になっている。

ホールに人影はなく、ひっそりとしていた。壁のアナログ時計を見ると、十二時過ぎを示している。外の暗さから考えて、午前零時、日付が変わった頃だろう。

みんな何処に行ってしまったの？

そう叫び出そうとして、思い留まる。

あれは……？

円卓を回り込んだところに、幼い二本の足が覗いて見えた。

黒のローファーに黒のハイソックス。

その時点で、わたしにはそれが誰なのかわかる。

同行した探偵の一人——

霧切響子。

彼女は床に無造作に両足を投げ出していた。どうやらうつ伏せに倒れているみたいだ。

動く気配はない。

わたしは彼女の足を視線でたどるように、円卓を回り込んで近づいていく。

とても脆弱そうな足だ。ふくらはぎから青白い太ももに至る華奢な曲線に、少女の未熟さが窺える。スカートが清らかな折り目を保ったまま、彼女の腰周りから床へと広がっていた。

大丈夫……？

近づこうとしたところで、わたしは思わず足を止めた。

彼女は頭の右側を下にして、ちょうどこちらを向くようにして横たわっていた。三つ編みが頬にかかり、彼女の小さな口元を隠している。目は閉じられたまま。温もりを感じさせないような冷めた肌の色合いは、会った時からそうだったけれど、ますます際立って見えた。

まさか……死んでいる？

いや、小さな背中がかすかに上下している。

気を失っているだけ？

遠目からではわからないけれど、かといって彼女に近づいて生死を確認するのはためらわれた。

何故なら、彼女の右手のすぐ傍に血まみれの巨大なハサミが落ちていたからだ。

刈り込みバサミだろうか。両手を使うタイプのハサミだ。肉厚の刃はどんな太い枝も切断できそうに見える。普通は樹木の剪定などに用いるものだが、はたして何を切れば、血痕が付着するというのか——

はじめは彼女の血かとも思ったけれど、見たところ怪我は見られない。服や床にも流血の痕跡は窺えない。

ではハサミに付着しているのは誰の血なのか？

ハサミが彼女の手元に落ちているところから見て、それを凶器として使ったのはむしろ彼女の方ではなかったのか。

わたしが彼女に近づくのをためらったのは、この状況に恐怖を感じたからだ。

　はたして霧切響子（きりぎりきょうこ）に何が起きたのか？

　はたして誰の血なのか？

　確認しないと！

　わたしはひとまず彼女をその場に残したまま、ホールを移動する。

　一番近くにある客室を目指した。扉は薄く開いたままになっている。

　わたしはそっと扉を開けた。

　部屋の電気がついている。窓にはカーテンが引かれているため、やはり外の様子はわからない。

　ベッドの上の毛布が人の形にふくらんでいた。誰かが寝ている。同行した探偵の一人だろう。部屋の入り口から覗いて見る限り、彼はとても安らかに寝ているように見えた。

　――寝息一つ立てずに。

　わたしは恐る恐るベッドの近くに歩いていった。

　ベッドを覗き込む。

　うっすらと口を開けて天井（てんじょう）を見つめる男。名前は確か網野英吾（あみのえいご）といっただろうか。三十代半（なか）ばの現役探偵だ。彼はわたしに気づく様子もなく、目を開けっ放しで、完全に眠っていた。

「あの……お休みのところすみません」

　一応、声をかけてみる。返事はない。

　いくら呼びかけたところで無駄（むだ）だってことはわかりきっていた。そもそも部屋に入った時から、なんとなく絶望的なにおいが漂（ただよ）っていた。

　男は目を開けたまま動かない。

　叫び出したくなるのを必死にこらえながら、わたしはゆっくりと手を伸ばし、毛布を掴むと、そろりそろりとめくっていく……

　その時、男の頭がこちらを向いた。

　わたしは毛を逆立（さかだ）てて、その場から飛びのいた。男の頭はごろりと枕元に転がり、鼻先をマットに埋めて動きを止めた。通常、体勢を変えずにそんなふうに首を回すことは不可能だが、男は首から下を動かした様子もなかった。それどころか、明らかに男の頭はおかしな位置にあった。

　その理由は、毛布をはいだ今、一目瞭然（いちもくりょうぜん）だった。

　男の首は切断され、頭部が切り離されていた。

　毛布の下は血まみれで、その真っ赤（まっか）な色がわたしの網膜（もうまく）を焼くように刺激する。わたしは視界から色を取り除くように目を逸（そ）らし、すぐにその場を離れた。

身体が勝手に震えだす。わたしは急に寒さを感じていた。気温が下がったから？　それともおぞましい屍体を目の当たりにしたから？　とても寒いのに、嫌な汗が全身から噴き出してくる。

わたしはふらふらと隣の客室へ移動した。

さっきの部屋と同じように、扉はうっすらと開いている。その隙間から、室内の様子がわずかに見えた。やはり探偵の一人がベッドにいるらしく、毛布がふくらんでいる。

見たくない、何も知りたくない。

でも見なければならない、知らなければならない。

仮にも探偵を名乗るなら、現実と向き合わなければならない。

たとえどんな悲劇や絶望が待っていようとも——

わたしは部屋に踏み入ると、ベッドに近づいた。見たところ室内に荒らされたような形跡はない。むしろベッドで眠る男の寝相は、清く正しく美しいとさえいえた。

薄いグレーのサングラスをかけている。しかし顔に浮き出た死相は、隠しようがなかった。燕尾椎太。若々しい探偵だ。いや、探偵だった。

毛布をめくってみると、やはり彼の首も切断されていた。

しかもそれだけではない。

わたしはある奇妙な事実に気づいていた。

枕に仰向けにされているその頭部は、間違いなく燕尾という男に違いなかったが、しかし首から下、胴体は別人のものであるようだった。確か燕尾は筋肉質のたくましい身体つきをしていたはずだ。それなのに、毛布の中に横たわっている身体は、でっぷりと太った中年のものだった。

その身体つきには覚えがある。

同行した探偵の一人、犬塚甲という男だ。

ど、どういうこと？

何から何までおかしなことだらけだ。わたしの小さな頭の中では、許容しきれないほどの情報がぐるぐると巡っている。

わたしは部屋を飛び出すと、さらにもう一つ隣の部屋に移動した。そこに何があるのか、おおよそ見当はついている。

やはりベッドには、犬塚甲の屍体があった。

しかしこれを犬塚の屍体というべきかどうかは疑問だ。やはり胴体は別人のものらしい。見たところ燕尾の身体つきとも違う。ということは、胴体は最初に見た網野のもの……？

そうか、頭部と胴体が順繰りに挿げ替えられているのだ。

わたしは自らを抱くようにして、凍(こご)えた身体を温めながら、悄然(しょうぜん)とホールに戻った。
何もかもが狂ってる。
どうしてこんなことになったのだろう。
シリウス天文台を訪れた五人のうち、三人がいつの間にか死んでいる。しかも首を切断され、何故か頭部と胴体を挿(す)げ替えられて遺棄(いき)されている。
シリウス天文台にはわたしたちの他には誰もいない。またわたしたちが到着するのと前後して、外は吹雪(ふぶき)に見舞われ、建物は雪の中に孤立した状態にあった。第三者の介入はなかったと考えていい。
網野英吾。
燕尾椎太。
犬塚甲。
五月雨結。
霧切響子。
そのうち三人が殺され、二人が生きている。
当然ながらわたしは彼らを殺してはいないと断言できる。未だに記憶に不確かな部分があるものの、さすがに三人も殺しておいて、なんの実感もないなんてあり得ない。そもそも自分で自分を手錠で拘束なんてするだろうか？　誰かがわたしを拘束したに違いない。その人物は次にわたしを殺すつもりだったのかもしれない。
ではその人物とは誰なのか。
消去法でいえば、もう一人の生き残りが犯人だとしか考えられない。
まさか彼女が——
わたしは彼女のところに戻る。
霧切響子はまだホールの床に横たわったままだった。
彼女の首はちゃんと繋がっている。その細い首を切断することは、他の男たちの首を切断するよりも簡単に違いない。けれど彼女は被害に遭わなかった。ちょうどおあつらえ向きの凶器が、手元に転がっていながら……
見れば見るほど無垢(むく)な少女だ。
彼女が三人の男たちの首を次々にチョキンチョキンと切断して回ったとでもいうのだろうか。
そんな馬鹿(ばか)なことって……でも……
わたしは彼女から距離を置きながら、彼女を観察する。かわいらしい女の子だけれど、何処か神秘的で謎めいた印象を抱かせる容貌(ようぼう)だ。会話した感じからも、本心を見せない用心深さを窺わせる。あ

るいはそれは、彼女がこの歳にして探偵であることに理由があるのかもしれない。

　どうしたものかと思案していると、ふと彼女の左手の中で、何かが光った。

　……鍵？

　わたしは直感的にひらめく。

　手錠の鍵だ！

　もし『三人の探偵たちを殺害した人物』＝『わたしを手錠で拘束した人物』なら、手錠の鍵を持つ彼女こそ、殺人犯であるという証明になるのではないだろうか。

　あの鍵が本当に、この手錠の鍵なら……

　確かめる必要がある。いずれにしろ右腕の手錠を早くはずしてしまいたい。

　わたしは彼女に近づいた。気づかれないように、そっと手を伸ばす。鍵を奪うには、彼女の手の中からそれを抜き取らなければならない。

　彼女の指は、まるで小さな白い花のつぼみみたいに閉じられていた。その指を一つ一つ、ゆっくりと広げていく。

　慎重に鍵を抜き取り、彼女から離れる。

　彼女はまだ気づかない。

　早速わたしは、手首にはまっている方の鍵穴に鍵を差し込んだ。ぴったりだった。

　回す。

　すると鍵が開き、手錠がはずれた。

　解放感と同時に、絶望感がこみ上げてくる。本当に彼女が犯人だったのか。彼女の身に何が起きたのかわからないけれど、彼女は男たちを殺し、わたしを拘束したところで気を失って倒れたのだろう。体力の限界だったのか、それとも貧血だろうか。

　わたしは鍵が本物であることをもう一度確かめるように、もう一つの鍵穴に差し込んで回してみた。やはり手錠は音を立てて開いた。

　その時、鍵の音に反応するように、わたしの足元で霧切がわずかに動いた。

　彼女が目を覚ます！

　わたしはとっさに半歩下がる。

　彼女は横になったまま目を開けて床を見つめていた。やがて身体を起こすと、目を擦（こす）りながら、きょとんとした顔つきでわたしを見上げる。無防備な横座りの状態のままぼんやりしている。

　それからふと、彼女は床に落ちているハサミを見た。

　瞬間、あどけない少女の表情が、急に凍りついたように見えた。

彼女は右手を伸ばし、ハサミを手に取ろうとする。

「動かないで！」

　制止命令。

　しかし彼女の手は止まりそうになかった。

　仕方ない。

　わたしは床を蹴って、飛びつくように彼女に急接近すると、彼女の左手首に手錠をかけた。それから強引にチェーンを引いて、もう一方の手錠を、近くにある安楽椅子の肘掛けの支柱にはめる。

　彼女の身体が椅子に繋がれた。一人掛け用のそれほど大きくない安楽椅子だが、彼女の細腕では、それを引き寄せることもできないようだ。彼女の右手はもうハサミには届かない。

　彼女は手を止め、無表情でこちらを向いた。しかし目元に少しだけ、咎めるような感情が隠されていることにわたしは気づく。

「どうしてこんなことするの、お姉さま」

　霧切は声を荒らげることなく、落ち着いた口調で尋ねた。

　お姉さま——なんていうわりにしおらしさの欠片もない目つきだ。それもそうだろう。もともとわたしがそう呼ばせているだけ。それでもあどけない顔でそんなふうに云われたら、本当の妹かと勘違いしてしまいそうになる……

　ふと感傷的になりかけた自分を振り払うように、わたしは首を横に振った。

「どうしてだって？　こっちが訊きたい」わたしは床のハサミを蹴って、彼女から遠ざけた。「せっかくいい仲間ができたと思ったのに。君が三人を殺したの？」

「三人……？　殺した……？」

　彼女は一瞬、目を丸くしたあとで、考え込むように目を伏せた。

「そう……手遅れになってしまったのね……」

　彼女は座り込んだまま俯く。なんだかとてもしょんぼりとした様子だった。

「とぼけないで。どうして彼らを殺したの？　わたしをどうするつもりだったの？」

「落ち着いて。私は犯人ではないわ」

「犯人ではないって……君以外に犯人がいるわけがないでしょ！　五人のうち三人が殺されていて、残りはわたしと君。わたしが犯人でないとしたら、君こそが犯人なんだ」

「結お姉さまが犯人ではないという証拠は？」

「証拠？　証人ならここにいる」わたしは自分自身を指差す。「わたしはついさっきまで気を失って倒れていたんだ。気づいたら三人死んでる。わたしが彼らを殺してないってことは、わたしが十六歳の女子高

生で乙女座の処女だってことと同じくらい確かなことなの」
「それなら私も、自分を証人にして無実を訴えるわ」
「いや、君の場合はそうもいかない。君は凶器らしきハサミを持っていたし、わたしの腕にかかっていた手錠の鍵を持っていた。物証も揃っている。これらについてはどう反論する？」
　わたしは腕組みして彼女を見下ろす。
　彼女は足を投げ出したまま、椅子の横にぺたんと座り込んで、わたしを見上げる体勢だった。立場的にも、論理的にも、明らかにわたしの方が優位だ。
「ハサミはついさっき目についただけ。手錠の鍵についてはまったく身に覚えがないわ……」
「君がその手に鍵を握っていたんだぞ」
「誰かに握らされたのよ」霧切はゆるゆると首を横に振る。「気を失っている間に、誰かがこの状況をセッティングしたみたい」
「誰かって……？」
「さあ？　一緒にここに来た探偵の誰かかもしれないし、結お姉さまかもしれない」
「だからわたしは違うって云ってるでしょ。わたしは被害者なの」
「私から云わせてもらえば、いきなり私に襲いかかってきた結お姉さまこそ、犯人っぽいわ」
　彼女は左手の手錠を掲げて見せつける。
「襲いかかってなんかいない。自衛のために仕方なくやったんだ。だって君、ハサミを取ろうとしたでしょ」
「血の付いたハサミが落ちていたら、普通手に取って調べてみたくなるものでしょう？」
「普通じゃないっ、そんなことわたしはしない」
「探偵なのに？」
　彼女は首を傾げて、上目遣いで問いかける。
　わたしは返答に詰まり、唇を噛んだ。
「むぐぐ……」
「人が殺されているんでしょう？　それならなおさら、凶器を調べてみなければならないはずよ。被害者の傷口と、凶器の形状は一致しているのか。その凶器は誰でも扱うことができるのか。妙な癖はないか。重さは？　長さは？　他にもいろいろ……」
「わかってる、そんなこと」わたしは意地になって、彼女を遮る。「でも素手で触ろうとするのはよくないんじゃない、探偵のお嬢さん。余計な指紋が付くでしょ？」
「……そうね、うかつだった。少し寝ぼけていたの。ごめんなさい」
　彼女は素直に謝る。

「それとも、そのハサミにはすでに君の指紋がべったりと付いているんじゃないの。それをごまかそうとして、触れようとしたとも考えられる」

「そういうふうにもとれるかしら」彼女は目を細めてハサミを見つめる。「凶器はこのハサミで間違いないの？」

「たぶんね。手っ取り早く首を切断するのに向いてそうだし」

「首を切断……？」

「そう、三人とも頭と胴体が繋がってなかった……って、君がやったんだろ。君の細っちい腕でも、頑丈な刈り込みバサミなら、首をバッサリやることも可能だろう」

　わたしの言葉に彼女は反応を示さず、しばらくの間沈黙を続けた。

　自分に疑いが向けられていることに落胆して、悲嘆に暮れた表情でも見せるのかと思いきや、少女の目元は相変わらず涼しげだった。

　それどころか――

「とても不可解なことが起こっているみたいね」

　彼女の瞳は無邪気といっていいほど透明で、けがれなく輝いて見えた。

「ええ、まるで理解できない」わたしは刺々しく云い返す。「君みたいな子が、異常な殺人鬼だったなんて……」

「もう一度云うけど、私は犯人ではないわ。まだ理解できないの？　結お姉さま」

「それなら誰が犯人？　他の人たちは死んでいるんだよ。死んだふりとかあり得ない。みんな首を切断されているからね。それともやっぱり君はわたしのことを犯人だと考えているわけ？」

「いいえ」彼女は即答する。「さっきはああ云ったけど、結お姉さまは犯人ではないと思う」

　意外だった。

　この状況では、わたしを犯人として名指しすること以外に、効果的な反論などあるはずがない。それともあえてわたしを容疑者から除外しようとするのには、何か裏があるのだろうか。

「どうしてそう考える？」

「気を失う前のことを思い出して。時刻でいうと八時くらいだったと思う。このホールにみんなで集まって、夕食をどうしようかって話し合っていたでしょう」

　そうだ……

　わたしたちは嘘の依頼のせいで途方に暮れていた。外は暗く、吹雪で帰ることもできない。円卓を囲んでこれからのことを話し合っているところだった。

　その時、なんの前触れもなく、最初に誰かが倒れた。確か網野だ。彼は突然、崩れ落ちるようにして

その場に横たわった。
　すると何処からともなく、白い煙が噴出し始めた。誰かが「火事だ」って叫んでいた。でも火の気配はなく、熱も感じなかった。どうしようかとおろおろとしているうちに、気づいたらわたしも気を失っていた。何が起こったのか、まったくわからなかった。
「煙の正体はそれね」
　霧切が円卓の下を指差す。
　そこに小さなアルミ缶のようなものが転がっていた。
「何これ」わたしは円卓の下にもぐりこんで、それを引き寄せる。「ジュースの缶に見えるけど……飲み口がない」
「手製の発煙装置でしょう。誰かがそれを円卓の下に転がしたのよ。幸いなことに催涙性や催眠性のガスではなかったみたいね。けれどひどい白煙で、視界が完全に覆われてしまった」
　わたしは早々に気を失ってしまったので、そのあとの状況はよくわからない。
「一体何が起きたの？」
「さあ、よくわからない。でもみんなが次々に倒れ始めたから、私もとっさに、その場に倒れるふりをしたの」
　霧切は云う。
「ふり？　ふりってどういうこと？　君だけは何事もなかったっていうの？」
「ええ。スモーク自体に害はなかったから。みんなが倒れたのは、白煙のせいではなくて、何か他に原因があったのだと思う。事実、最初に人が倒れたのは、煙が出る前だったわ。いずれかの時点で、睡眠薬でも飲まされていたんじゃないかしら。心当たりはない？」
「うーん……睡眠薬ねえ」
　他の人たちはともかく、少なくともわたしはシリウス天文台を訪れてから何も口にしていない。薬を盛られるようなことはなかったはずだ。
　しかし思い返してみれば、気を失う前に、確かに酩酊感のようなものを感じていた。体調が悪いだけかとも思っていたのだけど……
「それにしても君だけが危険を回避できたというのはどういうこと？」
「いつも訓練しているおかげかしら」彼女はそっけなく云う。「私、危険を察知するのは得意なの。でも察知した時点では単なる『嫌な予感』とか、『虫の知らせ』でしかないことが多くて、振り返ってみてようやく論理的に説明できるパターンが多いのだけど……お祖父さまはこれを『死神の足音を聞く』って云い方をしていたわ」

優れた数学者は、途中の計算式を飛ばして定理を見出してしまうものらしい。あとからその証明に苦労するというエピソードはよく聞く。まさか彼女もその手の天才だというのだろうか。

　いや、今のところわたしたちがどのような理由で気を失ったのか判然（はんぜん）としていないので、彼女のたわごとでしかない可能性もある。あるいは彼女が犯人だとしたら、危険を回避できるのは当たり前で……

　というか、訓練って……？

「みんなが次々に倒れて、何か恐ろしい犯行計画が始まってしまったのは明らかだった」霧切は続ける。「私は倒れたふりをして、犯人が何をするつもりなのか見届けようとしたの。でもその時、私はまた死神の足音を聞いたのよ」

「何があったの？」

「その足音は、犯人の足音そのものだった。犯人はよほど用心深い性格だったみたい。私のところに近づいてきて、私に妙な薬品を嗅（か）がせたわ。クロロホルムやエーテルではなかった。たぶん麻酔とも違う……何かの合成麻薬ではないかしら。ハンカチを当てられて、しばらく吸い込まないように呼吸をがまんしたけれど、いつの間にか意識を失っていた……」

　結局、彼女も気絶させられたのか。

　ん、ちょっと待てよ？

　ハサミ、切断された屍体、気絶する薬……

　一連の要素に思い当たる節（ふし）がある。

　いや……わたしはこれらの要素を知っている。

　まさか……そんなことがあるはずはない。

　ともかく、今は霧切の話を最後まで聞く必要があるだろう。わたしの思い違いかもしれない。

「君が気絶したふりをしていたことを、犯人は知っていたのか？」

「いいえ、知らなかったと思う。おそらく全員にハンカチを当てて回ったんでしょうね。確実に気絶させるために」

「それで？」

「朦朧（もうろう）とした意識の中で、私はそれでも抵抗を試（こころ）みたわ」

　淡々と語る途中で、霧切はこの時だけ、わざとらしい沈黙を挟んだ。まるで自慢（じまん）げに成果を披露（ひろう）するかのように。

「……で？」

「私、犯人の手を摑んだの」

「摑んだ？」わたしは拍子抜けして云う。「それだけ？」

「ええ。残念ながら引っ掻いたり噛みついたりすることはできなかったけれど、犯人の手に触れることができた。白煙で視界が閉ざされているなか、その感触だけが、犯人に関する唯一の手がかりになったわ」
　霧切は云いながら、自分の指先を見つめる。
「どんな感触だったの？」
「男の人の手だった」
「本当に？　それは確かなの？」
「特徴のない手だったけど、男であることは間違いない。手や指先ほど男女の差が表れやすい箇所はないから」
「ふうん……実際のところどうなの？　君って、男の人の手、握ったことあるの？」
　わたしが尋ねると、彼女ははっとした様子で固まってしまった。
　長い静止――
　そのあとで、彼女は何事もなかったかのような顔つきで、説明を再開する。
「私は人を殺したことはないけれど、人を殺した時の感触については学んでいるわ。それと同じことよ。理解したわね？　それで話を続けるけど……」
「待って、その理屈はおかしい。あっ、もしかして君、男の子と手を繋いだこともなかったりして……」
　意地悪っぽく云うと、また彼女は黙ってしまった。
　さすがに今度は怒っただろうか。彼女は会話を拒絶するように、そっぽを向いてしまった。
　いじめすぎたかもしれない。言動が冷淡なくせに、意外と反応が素直なので、つい意地悪したくなってしまう。
「ごめんごめん、へんなところにツッコミ入れて」わたしは謝る。「君だって父親の手くらい握ったことはあるだろう。ロジックの条件としてはそれでオーケーということで、さあ、話を続けて」
「忘れたわ」
「え？」
「父の手の感触なんて忘れたって云ってるの」
　霧切は目を細めて、右手で前髪を払うようなしぐさをした。それは今まで彼女が見せた動作のなかで、もっとも感情的なものに見えた。
「そ、そう。わかった」
　わたしはいなすように云う。ややこしい。彼女も彼女なりに複雑な事情を抱えているようだが、かかずらっていると話が前に進まない。
「要するに君が云いたいのは……君を気絶させた人物が男だったから、五月雨結は犯人ではないとい

う論理が成り立つということだね？」
　霧切はそっぽを向いたまま肯(うなず)く。
　シリウス天文台を訪れた探偵のなかで、女はわたしと霧切響子だけだ。彼女の主張が正しいのであれば、わたしは犯人から除外される。
「でも最初に云ったでしょ」わたしはため息交じりに云う。「わたしが犯人ではないということは、わたしにとってはわかりきった真実なの。証明されるまでもなく、ね」
「いいえ、私にとってはまだ、完璧な証明とは云い切れないわ」
「何それ、実際にわたしの手に触れてみないと、証明できないとでもいうの？」
　尋ねると、霧切は言葉を探すように目を伏せてから、瞳だけをこちらに向けて、小さく肯いた。
「……手」
　彼女はためらいがちに云って、右手を求める。
　どうやら真剣だ。
　これは罠(わな)か？
　彼女こそ犯人であり、今までの証言はすべて、わたしを近づかせるための嘘かもしれない。彼女はなんらかの凶器を隠し持っていて、その攻撃範囲にわたしをおびき寄せようとしているのかもしれない。
　霧切響子——わたしは彼女のことをまだよく知らない。知り合って間もないし、このわずかな期間に知り得たことといえば、ミステリアスな印象と、背景に複雑な家庭環境がありそうだということくらい。たとえ彼女がわたしの無実を主張しているからといって、彼女を信用することはできない。
「わかった、仲直りの握手(あくしゅ)だ」しかしわたしはまだ彼女に近づかない。「ただし本当の握手は、すべてが解決して、お互いに無事だった時にしよう」
「どういうことかしら？」
「まず椅子に座って」
　わたしは彼女に命令する。
　彼女はずっと椅子の横に座り込んだままだったが、わたしの言葉に従って、安楽椅子に腰掛けた。
「じゃあ、右手を出して」
　彼女は云われた通り、手を差し出す。
　わたしは慎重に彼女に近づき、小さな手を取った。少し力を込めたら壊れてしまいそうな、その硝子細工(ざいく)のような手を、しっかりと離さないようにする。
　彼女の左手は手錠で拘束されている。こうして右手を掴んでしまえば、攻撃されるおそれはない。
　お互いに探るような握手をしたまま、視線を交わす。

「どう？　君に真実は見えた？　でもその話はあとにしよう。わたしも探偵として、わたしの真実を探してみる」

「どうするの？」

「まず、もう一度この建物内をよく調べる必要があると思う」わたしたちは手を繋いだ状態で話す。「わたしはまだ君を疑っている。君も探偵なら、わたしの主張を納得できなくはないでしょう？　でもまだ、あくまで疑っている段階……君を犯人として告発するには、一つ重要な条件を満たしていない。つまり外部犯の可能性を探ることだ。わたしたち五人の客の他に、ここを出入りした者がいるのではないか」

「まだ確認していなかったの？」

「……え、ええ、わたしもまだ寝起きだから」彼女のツッコミにわたしは慌てる。「六人目の招（まね）かれざる客の犯行……もしそれが証明されれば、君を解放してもいい」

「早急に調べる必要があるわ。雪が証拠を消してしまう前に。特に窓の外と、玄関の外。誰かが出入りした痕跡はないか」

「調べるよ」

「もし招かれざる客がいるとすれば、その人物は男に違いない。そしてこの建物内にまだ隠れているかもしれない」

　霧切は少しだけ不安そうな顔をした。

「うん、それを確かめてくる。わたし一人でね。悪いけど、君にはこのままでいてもらおう。あと右手の方も拘束させてもらう」

　もしも彼女が犯人なら、手錠を用意したのも彼女ということになる。その場合、スペアの鍵を隠し持っている可能性がある。わたしがこの場を離れたあとで手錠を開錠してしまうかもしれない。だから両手を拘束しておく必要がある。

「悪気はないんだ」

「わかっているわ。むしろそれくらい頭が回る人でなければ困る」

　霧切は冷めたような表情で云う。

　しかし……拘束するといっても、わたしは手錠やロープなど、彼女の手を縛（しば）れそうなものを持っていない。

「私のリボン」

「……いいの？」

「無実の証明のためなら」

　彼女は肯く。

わたしは彼女の左右の三つ編みを結んでいるリボンのうち、片方をほどいた。
　リボンを使って、彼女の右腕を安楽椅子の肘掛けに結びつける。
　これで彼女は両腕を椅子に固定されたことになる。
「これからわたしは部屋を一つ一つ調べて回る。もし招かれざる客が何処かにいるとしたら、そいつはわたしに見つからないように部屋を移動しながら別の場所に隠れるかもしれない。でも君が中央のホールにいる以上、そいつの行動は丸見えだ」
「私が監視役になるというわけね」
「そういうこと。でも両手を拘束されている君には、招かれざる客の存在はとても危険だろう。相手はおぞましい殺人鬼だからね。もしそいつが現れた場合には、力一杯叫んでくれ。すぐに助ける」
「助けてくれるの？」
「招かれざる客の存在が明らかになれば、君の無罪は証明される。全力で君を守るよ」
「そう……その時にはもう手遅れだと思うけど」霧切は相変わらず他人事のようなそぶりだ。「でもあえて云わせてもらうけど、招かれざる客がいたからといって、私の無罪が論理的に証明されるわけではないと思うわ。その人物が姿を隠している理由が、殺人事件と関係があるとは限らないし、あるいは……」
「そんなのどっちでもいいよ、もう」わたしは彼女を遮って云う。「この状況でこそこそしているやつがいたら、蹴っ飛ばした方がいいに決まってる」
「……そうね」
　彼女は素直に応じた。
「この吹雪の中、こんな人里離れた建物を夜中に出入りするようなやつがいるとは思えないけど……それじゃあ、調べてくる」
　わたしは霧切から離れ、近くの部屋から順に入って室内を調べた。カーテンを開けて、窓の鍵を調べ、外の雪の状態を調べる。
　手早くすべての部屋の窓を確認して回った。その結果、すべての部屋の、すべての窓が内側から施錠されていることがわかった。また窓の周辺の雪に異状はなかった。
　各部屋に空調用の排気口など、第三の窓は存在しない。つまり糸を通して、外から窓を施錠するということは不可能だ。
　次に玄関を調べた。玄関扉は施錠されたままになっており、さらに外の雪を確認しても、何者かが出入りした痕跡は見受けられなかった。
　結論からいうと、何者かが建物を出入りしたという証拠を見つけることはできなかった。また、わたしと霧切以外の生存者、すなわち招かれざる客の存在も発見するには至らなかった。

ホールでは霧切が椅子に拘束されたまま、わたしの帰りを待っていた。
「あいにくだけど、やはりここにはわたしと君の他には誰もいないようだ」
「外の雪に痕跡はなかった？」
「うん、この吹雪だと痕跡はすぐに雪で消されてしまうだろうけど、それでも人が歩いたりすれば、その部分には必ず窪みが残るはずだ。そういう不自然な箇所は、何処にもなかった」
　これで殺人事件はいっそう不可解なものになってしまった。
　いや、むしろ単純になったといえるだろうか。
　このシリウス天文台は密閉された瓶にたとえられるだろう。瓶が密閉されている以上、中の固体は増えないし減らない。つまり屍体が三つで生き残りが二人なら、生き残ったどちらかが犯人でしかない。
　ゆえに犯人は霧切響子ということだ。
　当の本人は、何かに期待するような目で、わたしを見上げている。
　かわいそうだが、彼女の拘束を解くことは、まだできない。
　理屈のうえでは、彼女が犯人であることは間違いない。しかしその答えに自分が納得していないのも事実だった。彼女のような少女に、成人男性を三人も殺してベッドに屍体を並べるなどということが、可能だろうか。
「もう何がなんだかわからない……この事件は一体なんなの？」わたしは思わず泣き言を漏らす。「このへんな建物といい、へんな依頼状といい……でもようやく一つ、わかったことがある。きっとあの黒い手紙に書かれていた事件は、わたしたちに依頼する予定の事件ではなく、わたしたち自身が巻き込まれる事件だったんだ」
「……結お姉さま」霧切はわたしを遮るようにして云う。「それ、なんのこと？」
「え？　依頼状だよ。依頼状と一緒に黒い手紙があっただろう？　あの文面に、ここの場所とか、凶器とか書かれていたじゃないか」
「……その黒い手紙というのを私に見せて」
「いいけど？」
　わたしは霧切を椅子に残したまま、一度自分の部屋に戻ってリュックを漁った。中から黒い手紙を抜き出し、ホールに戻る。
「広げて、私に見せて」
　霧切の切羽詰まったような要求に、わたしは思わず従う。黒い封筒から、折り畳まれた黒い和紙の便箋を取り出す。そこには白い筆文字で文面が記されていた。
　霧切はそれを見ると、いっそう血の気をなくしたように青ざめた。

「結お姉さま……これはただの殺人事件ではないわ」

「何、どういうこと？」

「これはおそらく……ゲームよ」

第二章

黒の挑戦

1

彼は激しい炎に焼かれる夢を見た。

　目覚めると、額（ひたい）から伝う汗で頬が濡れていた。

　それとも、それは涙だったのだろうか。

　さりげなく右手で頬を拭う。

　病院の待合室だった。穏（おだ）やかなインストゥルメンタルの流れるなか、看護師が消毒薬のにおいを振りまきながら、何処からか来て何処かへ消えていく。電光掲示板の表示は、いつまでも彼の番号にならない。

「一時間ほどかかるそうですよ」

　隣の椅子の老人が話しかけてきた。

　しかし彼は適当な返事でそれをやり過ごした。この手の老人を相手にするときりがない。彼は老人から視線を逸らして、携帯電話をいじっているふりをした。

「リハビリですか？　大変でしょう」

　老人はなおも話しかけてくる。

「いや、今日は足が痛むんで、薬を……」

　彼はケータイの画面を見ながらぼそぼそと喋（しゃべ）り、会話をする意思がないことをあからさまに示す。

「薬代も馬鹿にならないでしょう？　政府からの援助もたかが知れている。あなたが背負った傷の代償（だいしょう）としてはあまりにも安すぎる」

　老人は優しい声で云う。

　彼は顔を上げ、老人の方を向いた。

　フェルト帽を目深（まぶか）に被り、高級そうなスーツを着た老人だった。口の右端に、縦に古い切り傷の痕（あと）があり、老人が微笑すると、それが歪（ゆが）んで見えるのだった。

「あんた誰だ？」彼は攻撃的な口調で返す。「なんで俺のことを知っている？　マスコミか？」

「善意の第三者です」老人の傷痕が歪む。「あなたに同情し、共感する者です」

「なるほど、宗教か？　それなら他を当たれ。俺はうんざりしてるんだよ。お前らのような弱者にたかる連中のことがね」

「いいえ、我々はどの宗教とも関係ありません。もちろんマスコミでもありません」

「じゃあなんなんだよ！」

　彼はいよいよ声を荒らげ始めた。

「我々はこういう者です」

　老人は真っ黒な名刺を差し出した。

犯罪被害者救済委員会

第12地区代表

円藤　藤吉郎

tel xx-xxxx-xxxx

「犯罪被害者救済委員会……？」
「そうです。なお政府とは無関係であり、独立した非営利組織と考えていただきたい」
「やっぱり宗教みたいなもんなんだろ？　グループ・セラピーだとかケア・セミナーだとかいって、親身なそぶりで近づいて、受講料として法外な金を取ろうっていうんだろう。残念だったな、じいさん。そういうのはもっと軽い連中を相手にしな」
　彼は吐き捨てるように云うと、別の場所へ移動するために、椅子から立ち上がろうとした。
　その時――
「復讐したくはありませんか？」
　老人の囁き声が耳に届く。
「なんだって？」
　彼は思わず立ち止まって、振り返った。
「我々はあなたの闇の深さに興味があります。なるほど、確かに深くて濃い闇を抱えておいでだ」老人は帽子の位置を直すようにつばに触れたが、目元は隠れたままだった。「あなたは幸福とは云い難くも、平凡で不足のない人生を送ってきた。人に迷惑をかけることなく、まっとうな仕事をこなし、それなりに人々から愛されてきた。ところが五年前、犯罪があなたの人生からすべてを奪っていった。無遠慮に、理不尽に、徹底的に……あなたが一体、どんな悪いことをしたというのでしょう。いや、あなたは無実だ。少なくとも、一方的に人生を破滅させられるようなことなど、何もしていない」
　老人の声は、彼の心を揺さぶった。不思議なことに、その声はほとんど彼自身の声として聞こえるのだった。
「我々が提供するのはセラピーなどではありません。そういうものは軽い連中に任せておきましょう。我々は人生を取り戻すお手伝いをさせていただく者です。奪われたそれを、まるごと取り戻すことのできる組織です」
「人生を……取り戻す？」
「あなたにはその権利が……いや、義務があります。あの忌まわしい犯罪によって亡くなられた方々のためにも」
　老人の確信めいた口調は、諦めきった彼の精神を奮い立たせるほど、演技力に満ちていた。彼は老人の言葉によって、自分が『奪われた主人公』であることを認識した。
　スポットライトは消えちゃいない。
　ましてやそれは、他の誰かを照らすためにあるのではない。自分の未来を照らすためにある……
　しかし彼は苦笑して、そんな妄想を投げ捨てる。

「あれからというもの、いろんなやつが俺の前を通り過ぎていったよ。警察官、検事、弁護士、医者、保険屋……結局誰も俺を救ってはくれなかった。そしてとうとう善意の第三者か。やれやれだ。強いていえば、医者には感謝してる。少なくとも俺をもう一度、この世界に立たせてくれたからな。でもそれだけだ。俺はかろうじて生きているだけの屍体だ……何かを望む心はもう、あの日に死んだんだよ」

　彼は老人に背を向け、席を離れる。

「外の公園で待っています。我々の『救済』に興味があれば、お越しください」

　老人の声を背に受けながら、彼は売店へと消えていった。

　犯罪に巻き込まれたのは、単純に運が悪かったとしかいいようがないだろう。

　五年前、彼の家の周囲で、不審火が相次いだ。周辺の監視カメラに犯人の姿は映っておらず、住民たちは姿なき犯行に怯えた。

　放火は連日続いた。ある夜、それまでぼやで済んでいた火が、大火事に発展した。空気が乾燥していたせいもあるだろう。火は民家二棟を燃やし尽くした。そのうちの一軒に、彼の家族が住んでいた。彼と、彼の妻と、そして二歳になる息子だ。三人とも重度の火傷を負ったが、助かったのは彼だけだった。

　放火はそのあとも何件か続いたが、ある探偵によって事件は一気に解決へと導かれた。放火地点を線で結ぶと、奇妙な星型ができることに探偵は着目した。星の中心には占いを稼業とする占星術師が住んでいた。

　探偵は早速、占星術師の家を訪ねた。しかしその男はすでに焼け死んでいた。

　傍には遺書が残されており、『星の巡りを整えるために火を放った』というような意味不明なことが記されていた。事件は容疑者死亡という結末を迎え、収束した。

　その事実を聞かされた彼は混乱した。憎悪という砥石で研ぎ澄ました刃を、いずれ犯人に突きつけるつもりでいたのに、その相手はもう存在しないという。怒りを誰にぶつけたらいいのかわからなくなってしまった。死んだ妻と息子に向ける顔もなかった。

　あれから五年が過ぎて、身体の方はかなりましになっている。しかし心は死んだままだ。仕事も失い、国からの補償金でなんとか生きている。生きがいなどという言葉とは無縁の、消化試合みたいな人生がこれからも続くと思われた……

　さっきの老人の『復讐』という言葉を聞くまでは。

　それは闇に差す一筋の光だった。

　今まで誰もそんな光をもたらしてくれた者はいなかった。結局のところ、誰も彼の闇の深さを理解でき

なかったのだろう。彼が求めていたのは、闇を払うことではなく、闇の深淵（しんえん）を歩く道しるべだったのだ。

「いらっしゃると思っていました」
　口元の傷痕を歪めながら、老人は云った。
　昼間の公園では、ベビーカーを押す若い母親たちや、サッカーボールを蹴り合う男の子たちが、明るい声を上げていた。その風景の中、木漏（こも）れ日の降るベンチに座る老人の姿はよく溶け込んでいた。
「話を聞くだけなら損はないかと思ってね」
　彼は老人の横に腰掛けて云った。
「そうでしょう。我々は弁護士やセラピストとは違って、話をするだけで金銭を要求するようなことはありません」
「で、あんたら何者なんだ？」
「不幸にして犯罪に遭遇し、被害に遭われた方々を救済するための組織です」
「表向きの話はいい。実態はなんだ？　復讐代行業みたいなことをしてくれるのか？」
「ふむ、それは誤解です。さきほども云いましたように、我々はあなたを救済することが目的です。この理念に疑念がおありでしたら、今一度考え直すことをお勧めします」
「まだるっこしいじいさんだな。それで、俺に何をしてくれるんだよ」
「真犯人をお教えします。あなたをこんな目に遭わせた事件の――」
「はぁっ？　真犯人だと？」
　信じられないような単語が出てきた。
　今まで考えてもみなかった。あの放火事件は、頭のおかしな占星術師によるものではなかったのか？
「誰なんだよ！　その真犯人ってのは」
「お待ちください」老人は片手を挙げて、彼を制する。「お教えするのには条件があります」
　来た――
　彼は警戒する。
　この条件とやらで、金を取ろうっていうのか。
「なんだよ、条件って」
「真犯人に対し、復讐を実行してもらうということです」
「復讐――」
「ええ。必ず復讐し、真犯人を亡（な）き者にしてもらいます」
「つまり殺せってことか」

「はい」
　平和的な公園の片隅で、血なまぐさい会話がやりとりされる。彼らの会話に聞き耳を立てる者はいない。
「じいさん、きっとあんたらの組織とやらに、俺のことは充分調べられているんだろうな。だったらわかってるんだろう？　俺がその条件を断るはずがないって」
「頼もしいお言葉です」
　老人は深々と肯く。
「いいから早く教えろよ。その真犯人を」
「その前に、我々の意図（いと）するところを、あなたに把握（はあく）しておいてもらわねばなりません」
　まだるっこしい話はまだ続くようだ。
　――確かに、何の理由があって、謎の組織が復讐をそそのかすのか、彼には理解できなかった。
「復讐――我々はこれを『救済』と呼んでおります。すなわちあなたにとっての『救済』です――これを実行するのは他の誰でもなく、あなた自身でなければなりません。この点をお間違いなきよう。よろしいですかな？」
「俺の手で殺せってことだろ？　当然、最初からそのつもりだ」
「では話を進めましょう。『救済』には三つのものが必要です。おわかりですかな」
　老人の回りくどい話し方にじれったさを感じながらも、彼は辛抱（しんぼう）強く話を合わせる。
「さあな？　初心者なもんで、教えてくれると助かるんだが」
「もちろんですとも。まず一つに、『決意』です。これに関しては、もはやあなたはクリアしていると云えるでしょう。そうですよね？」
「ああ」
「次に必要なのは『金』です。世の中、何をするにしてもお金は必要です。特に大きなことを成すためには、多くの資金を必要とします。この点に関してはいかがですかな？」
「残念ながら、充分とはいえない」
「よろしい、我々は『救済』を求めるあなたのために、資金提供をさせていただく準備があります。金額については……特に上限を設けておりません」
　上限なしの資金提供？
　だんだんと話がきな臭（くさ）くなってきた。
「そして三つ目に必要なもの――それは『技術』です。人を殺すためには、それなりのテクニックが必要なのです。おわかりですかな？　その点に関しては、あなたも含め、多くの者が素人（しろうと）です。そこで！　我々

は、誰にもばれないように標的を殺すための『技術』をあなたに提供させていただきます。これらの『技術』を用いて、完全犯罪を遂行していただくことになります」
「いたれりつくせりじゃないか」
「ただし——」老人は重要なことを告げるかのように間を置く。「『技術』に関しては、有料です」
「はぁっ？」
「つまり我々から『技術』を買っていただくことになります」
「ほら見ろ！　結局そうやって弱者から金をむしりとろうって話だ」彼はうんざりした様子で、立ち上がりかけた。「手の込んだ話をしやがって……ただの詐欺じゃないか！」
「落ち着いてください。さきほども云いましたように、我々はあなたに無制限の資金提供をいたします。『技術』の購入には、その資金を利用していただいて構いません」
「……どういうことだ？」
「『救済』にあたっては、あなたが自腹を切る必要はまったくないということです」
「意味がわからないな。それじゃあ、なんのための資金で、なんのための技術提供なんだ？」
「それが『救済』のもっとも重要なポイントとなります。『救済』はあなたにとって人生をかけた逆転劇……それはそれはたいそうドラマチックなものになるでしょう。どんなフィクションよりも、どんなドキュメンタリーよりも」
「何が云いたい？」
「あなたの逆転劇を楽しみにしている方々がいらっしゃるということです。ところであなたは競馬はお好きですかな？　いや、資料にはギャンブルの趣味の記載はありませんでしたな。あなたには、競馬に熱狂する方々の気持ちは理解できないでしょう。しかし世の中には、馬が順位を競って走る姿に、胸を震わせ、大金を振る舞い、感動の涙を流す人たちが、少なからず存在しているのです。同様に——復讐を志す者が完全犯罪に挑む姿に、趣を見出す方々もいるということです」
「な……なんなんだよ、それ」
「つまり……この世のあらゆる趣味に飽いた好事家の方々が、最後に見出した楽しみこそ、あなたのような闇を抱えた人間の逆転劇——『救済』なのです」
　老人の言葉に、彼はただ呆然とする。
　踏み入ってはいけない世界に、片足を突っ込んでしまった気分だった。
　老人の云っていることはおおよそ理解できる。けれどそんなことが本当に行なわれているというのか……
「俺の復讐を——ゲームにするつもりなのか」

「簡潔にいえばそうなりますかな」老人は声を低めて笑った。「上質なコンテンツを提供することによりスポンサーがつく……スポンサーからの資金提供を受け、より完成されたコンテンツを提供する……そうして我々の『救済』は成り立っております」

「あんたらのバックに、金と暇を持て余してる連中がいるってことか」

「ご理解いただけましたか。その事実自体は、単に資金の出所を示しているにすぎません。あくまで我々の目的は、あなたに『救済』を提供することです。出資者とは利害関係が一致したというだけのこと。なお各界の大物が『救済』を楽しみにしておられます。それにより様々な業界に融通が利くという恩恵も得られております」

　本当だろうか？

　老人の云う『救済』などは建前で、実際のところは、復讐行為をショー・ビジネスにしているだけなのかもしれない。

　しかし彼にとってはどちらでもいいことだった。真犯人を殺すという目的も、過程にすぎない。彼にとってそれは、人生を取り戻すという最終目的への――挑戦だった。

「ドキュメンタリー番組みたいに、テレビカメラが俺のことを二十四時間つけ回すのか？」

「いえ、カメラマンの帯同はありません。そのあたりのルールについてはのちほど説明いたします」

「わかったよ、それじゃあ早く真犯人を教えてくれ」

「説明はまだ終わっておりません」

「まだ何かあるのか？」

　彼は思わず不満げに声を上げる。

「重要な点をお話ししておりません。あなたはこれから資金を得て、標的を殺害するという目的が課せられることになりますが、それだけではあまりにも虚しすぎる。たとえば夜道を歩いている標的の後ろから近づき鈍器で殴り殺す……これは確かに復讐ではありますが、『救済』ではない。断じて『救済』ではないのです」

「どういうことだよ」

「救いには、乗り越えるべき試練が課されるものです。困難な試練を乗り越えてこそ、その先に真の『救済』があるのです」

「は？」

「具体的にお話ししましょう」老人は居住まいを正し、彼の方を向く。「さきほども云いましたように、あなたにはこれから我々の提供する『技術』を購入してもらいます。仮にこれをカードに見立てましょう。我々は完全犯罪にうってつけのカードを何枚も所有しております。たとえば凶器のカード、犯罪に適し

た場所を示すカード、不可能犯罪を演出するためのカード……これらのカードは、効果や実用性により値段が設定されております。そしてあなたはカードを購入し、これからとりかかる『救済』のための『デッキ』を事前に構築してもらいます」
「意味がよくわからないんだが……」
「参考として、以前に行なわれた『救済』の例をとりあげましょう。そのケースでは復讐者は我々から、場所のカードとして『学校』を購入しました。また凶器として『金属バット』を、また容疑を免れるためのトリックとして『密室』というものを購入しました」
「『密室』？　そんなものまで買えるのか？」
「ええ、資金さえ投入していただければ、買えないものはないとお考えください。ちなみにこの例で云いますと、『学校』のコストは４０００万、『金属バット』は３００万、『密室』は１億、合計１億４３００万のコストとなります。いずれも通貨単位は円となります」
「ちょっと待て、値段がおかしいだろ。なんで『金属バット』に３００万もかかるんだよ。そんなもの、そのへんのスポーツショップで１万もかからずに買えるだろ？」
「我々の提供する凶器にはそれだけの価値があるとお考えください。いいですかな、そのへんのスポーツショップで買った凶器など、たちまち足がつきますよ。商品の形状、型番、販売店、そして店内の監視カメラ……あらゆる情報が、あなたをあぶりだします。しかし我々の用意する凶器には、そういった心配はありません」
「なるほど……理解したよ」
「さて、ここからが重要な点です。さきほど云いました試練についてなのですが……我々はあなたに復讐の機会を与えると同時に、あなたを追いかける探偵を一人、召喚いたします」
「探偵……？」
「さようです。探偵は『デッキ』の総コストに従って、一人選ばれます。あなたが『デッキ』に費やしたコストが高ければ高いほど、ランクの高い探偵が投入されます。逆にコストを抑えれば、探偵はランクの低い者になりますが、完全犯罪のためのカード不足になりかねません」
「なんだよそれ、俺は最初から追われることが前提なのか？」
「ええ、公正な行為のもとにのみ『救済』が訪れると我々は考えております。探偵という試練に立ち向かってこそ、清らかな『救済』と充足感を得られるというものです。この考えに同意していただけないのであれば、我々とは明らかに意見の相違があるとして、今回の話はなかったものと上に報告せざるをえません」
「あんたらの考えは知らないが……俺だって卑怯な手で目的を果たしたところで、救われるなんて思っ

ちゃいない」彼は肩を竦めて云った。「要するに正々堂々と復讐を果たしてこそ、価値があるっていうことだろ」
「いかにも。やはりあなたはこの円藤が見込んだだけのことはありますな。すなわち！　あなたが真に成すべきこととは、復讐を成功させることにあらず。探偵という試練に打ち勝つことです。よいですかな？」
「ああ」
「よろしい！　では一連の流れをおさらいしましょう。まずあなたは我々の資金を使い、我々の『技術』を購入します。そして購入したそれらを『デッキ』として計画に組み込み、いよいよ実行に移すことになります。なお、あなたの作成した『デッキ』は挑戦状として、選ばれた探偵のもとに届けられます」
「おい、待てよ。挑戦状？　これから行なう犯罪をわざわざ探偵に公表するのか？　そんなの不利に決まってるじゃないか」
「我々はあなたに、あくまでフェアな挑戦をしていただきたいのです。最初から駆け引きは始まっているのですよ。そのあたりのことも踏まえて、『デッキ』を構築することが肝心ですな」老人の傷痕が歪む。「事前に探偵に知らせる情報は、あなたが作成した『デッキ』のみです。当然ながら、あなたの名前や現住所などについては記載されません」
　それでもかなり不利ではないのか？
　なるべく『デッキ』にセットされる『技術』のコストを低くして、ランクの低い探偵になるようにした方がいいのではないか。
　それとも徹底的に資金を使って、完全犯罪のための『技術』を駆使した方がいいのか……
「さて、挑戦状の封筒には小さなチップが組み込まれており、開封された時刻が電波で送られます。探偵が封筒を開けた瞬間が、スタートの合図です。あなたの勝利条件は、標的を殺害し、探偵から告発されずに168時間経過すること。時間がきた時点で、あなたの『救済』が完了したことになります。その際にはなんと！　あなたが『デッキ』に使用したコストそのままの金額をあなたに返却します。またその後も犯罪者として追われないように、保護プログラムを適用させていただきます。希望すれば、これまでの過去を抹消し、新しい人間として一から人生を始めることも可能です」
「本当に……そんなことが可能なのか？」
　彼にとってはそれこそが重要だった。
　新しい人生をやり直す。
　そんなことがもしできるのなら……
「可能です」
　その言葉だけで充分だった。

「もし俺が負けた時はどうなる？」

「負けた時のことなど考えるべきではありませんよ。しかし――教えないわけにもいきますまい。フェアとは云えませんからな。とはいえ、おおよそあなたの想像通りです。まず敗北条件としては、探偵の封筒開封後１６８時間以内に、探偵から犯人であることを告発された場合です。この瞬間、あなたは敗北し、我々との関係もいっさい断絶されるものとお考えください。あなたはただの犯罪者として警察に捕まることになりますが、我々からの援助はありません。また我々のことをいくら警察に訴えようとしても無駄です。そうお心得ください」

「敗者に用はないってことか」

「我々は『救済』をもたらす者です。我々の『救済』は完璧なものですが、不幸にもそれを得られない方もいらっしゃいます。そういう方々は往々にして、『救済』を受け入れるための心構えが不足しているのです」

「他にペナルティは？」

「使用した『デッキ』のコスト分、我々に金銭を支払っていただくことになります」

「ははあ、そういうことか。しかしそいつは無理だな。何処を引っ繰り返しても俺には金がない」

「そういう場合には、事前に各種保険に加入していただきます。受取人は我々が用意した者になります」

「失敗したら警察に捕まる前に死ねってことか？」

「さようです。支払いが不可能な場合に限ってということになりますが」

「どうせ不可能だってわかってるくせに」

「いかなる手段をもっても、使用されたコスト分、回収させていただきます」老人の表情は変わらない。

「そうならないように、探偵に勝つことですな」

「他に気をつけなきゃいけないルールについて教えてくれ」

「これはもっとも重要なことですが……探偵を殺害することは許されません。標的とそれ以外の人間を何人殺害しようとあなたの自由ですが、我々が用意した探偵だけは必ず生かしてください。いかなる状況であろうと、規定の１６８時間以内に探偵が死亡するようなことがあれば、その時点であなたの敗北となります」

「偶発的な事故で死んだりしてもだめなのか？」

「さようです。基本的には探偵を傷つけることも禁止されています」

「厳しいんだな」

「相手のいない試合など、そもそも見る価値もないでしょう？」

邪魔者となる探偵を最初に排除するというやり方は通用しないらしい。組織はあくまで探偵との勝負を望んでいるようだ。
「その他の細かいルールについては、あなたの挑戦が決定され次第、お伝えしましょう」
　老人はあらためて、彼の方に向き直った。
「人生を取り戻す気高(けだか)い挑戦――我々はこれを『黒の挑戦(デュエル・ノワール)』と呼んでおります。探偵に勝つことさえできれば、あなたには新しい未来が開けるのです。さあ、いかがいたしますかな？」
　その問いの答えは、ほとんど決まっている。
　しかしすぐに返事できるはずもなかった。老人の話はあまりにも現実離れしていて、荒唐無稽(こうとうむけい)だ。なんとか委員会だの、完全犯罪だの、いかにもふざけた単語がちりばめられている。未だに詐欺ではないかと疑ってすらいる。それでも一笑(いっしょう)に付(ふ)すことができないのは、『真犯人を教える』という前置きがあったからだ。
　自分をこんな惨(みじ)めな姿にした人間が、のうのうと生きながらえているのだとしたら、それを許すことはできない。死をもって償(つぐな)わせるしかないだろう。
「俺が『やる』って云わなきゃ、五年前の放火事件の真相を教えてくれないのか？」
「さようです」
　餌(えさ)だ。
　それはゲームに自分を引き込むための餌なのだろう。しかし魅力的な餌だ。何もかも失って、空っぽになってしまった自分にとっては、それこそ救いといえるような餌だった。
　もしここで断ったら、一生後悔することになるだろう。どうしてあの時、挑戦しなかったのかと自分を責めながら、何も得ることのない人生を過ごすに決まっている。
　それならいっそ……
　闘うべきじゃないのか？
　死んだように生きるよりも。

「いい目をしておられる」老人が肩を震わせながら静かに笑った。「一つ……参考になるかどうかはわかりませんが、我々のデータをお教えしましょう。今までに行なわれてきた『黒の挑戦』において……探偵側の勝率は28パーセント。たった28パーセントなのです。つまり我々の『技術』を利用して復讐を行なった者たちのおよそ七割が、完全犯罪を成立させております」

「その数字は本当か？」

「探偵といえど、ピンからキリまでおりますからな。挑戦状が届けられてもなお、事件性に気づかずに寝て過ごした者もいるほどです。まあ、そのケースは特に幸運だった例ですが……」

　自分が三割の負けを引くか？

　あり得ないだろ？

　俺が引くのは、勝利だ。

「答えは決まったようですな。しかし我々は一晩待ちます。月夜で頭を冷やして、なお挑戦する気概が失われていないようでしたら、明日午前十時、ここに来てください。よろしいですかな？」

　老人の言葉に、彼は肯く。

「もちろんおわかりかと思いますが、このことは他言無用ですよ。警察だけではなく、知人などに話した場合、我々は二度とあなたの前に姿を現しません」

「わかってる」

「ではまた、お会いしましょう」

探偵に告ぐ
黒の叫び声を聞け

場所　シリウス天文台　3000万
凶器　大バサミ　500万
凶器　気絶薬　500万
トリック　バラバラ殺人　8000万
総コスト　1億2000万

以上のコストから、次の探偵を召喚する

五月雨結

第三章

シリウス天文台殺人事件 2

わたしの通う高校は、百五十年の歴史がある中高一貫の女子校だ。世間ではお嬢様学校として知られるミッションスクールだけど、昔に比べるとかなり宗教色は薄れているとか。今では煉瓦造りの旧校舎や教会に、宣教師たちの歴史が窺える程度だ。

　原則としてアルバイトは禁止。でも学校に申請を出せば、だいたい許可される。

　しかし探偵の許可を申請したのは、学校創立以来、わたしが初めてらしい。

　そもそも探偵というのは職業や職種ではなく、存在であるといえるかもしれない。あるいは才能というべきだろうか。だから学校に探偵の申請をする意味があったのかというと、ちょっとわからない。けれど学園長のシスターは喜んでくれた。シスターにとって探偵というのは、存在や才能ではなく、ボランティアみたいなイメージだったからかもしれない。

　ともかくわたしは、この高校において唯一の探偵だ。制服でのフォーマルな活動も許されており、活動性の点からスカートではなくキュロットを普段着用している。これが一部の上級生の反感を買っているようだけど、友だちの評判は悪くない。

　探偵活動を優先させるため、部活動には参加していない。もっとも、常に探偵の仕事があるわけではないので、いつもは帰宅部と大差ない放課後を過ごしている。まっすぐ寮に帰るだけだ。

　わたしはこの学校に入学してから寮で生活してきた。四畳半の部屋に、キッチン、バス、トイレつきの小さなワンルーム。お嬢様学校の現実がこれだ。寮生活をうらやましがるクラスメイトもいるけれど、規則だって一般家庭より厳しい。

　寮にあるわたしの個人用ポストに、黒い封筒が投函されていることに気づいたのは、高校一年の冬、十二月のことだった。

　Ｂ５サイズの真っ黒な封筒で、切手も宛先もなかった。けれどわたしの名前が白で印字されていたので、わたしに宛てられたものであることは間違いない。わたしはそれを手に持って、寮に入った。

「あっ、結、おかえり」寮の別の部屋に住む子と廊下ですれ違った。「何それ、またラブレター？」

「そんなわけないでしょ」

　わたしは苦笑して、黒い封筒を眺める。見た目からしてラブレターとはいえそうにない。もしそうだとしたら、なかなかエキセントリックな送り主だ。

　過去に二度、ラブレターをもらったことがある。一人はリスみたいに小さな子で、隣のクラスの手芸部員だった。もちろん断った。断るしかない。いまだにわたしのことを遠くから見つめている彼女を、時々校舎の陰に見かける。もう一人は、とても文学的な手紙をくれた子だけど、差出人の名前がなかったの

で、何者かわからない。探偵としてそれ以上調べることはしなかった。
　わたしは自分の部屋に入ると、コートを着たままベッドに身体を投げ出した。仰向けになって、封筒を蛍光灯に透かして見ながら、封を破る。
　中には一枚の便箋と、さらに一回り小さい黒の封筒が入っていた。
　とりあえず便箋を広げてみる。

『依頼状

五月雨結　殿

　歳末(さいまつ)ご多忙のおり、ますますご繁栄のこととお喜び申し上げます。
　私はある方の代理人をしております大江由園(おおえよしぞの)と申します。
　このたび、私のクライアントが直面している事案を解決していただきたく、当依頼状をお送りした次第です。
　なおクライアントの素性(すじょう)はここでは明かせないことをご容赦(ようしゃ)ください。
　当クライアントは、本人の所有しております『シリウス天文台』において、緊急を要する事態の訪れを予感しております。
　詳しい依頼内容については、下記の場所にて面接のうえ、クライアントの了承が確認でき次第、あらためてご報告させていただく予定です。

　集合場所　果崎(はてさき)駅
　集合日時　十二月十二日　午後三時

　なお報酬としまして、着手金百万円、成功時に百万円、その他必要経費を用意しております。
　それでは、当日はよろしくお願いいたします。

代理人　大江由園』

便箋には依頼状と書いてあるが、文面からは捉（とら）えどころのない奇妙な印象を受けた。依頼主の名や、依頼内容が伏せられているせいだろうか。何処かふざけたような嘘っぽさを感じる一方で、重要めかした大仰（おおぎょう）さに生々しさを感じなくもない。

　探偵になって三年ほど経つが、こういった依頼は初めてだった。考えれば考えるほど意味のわからない内容だ。それだけに、今までのどんな事件よりも好奇心をくすぐられる。

　便箋は普通の白い紙で、文字はすべてワープロソフトによるものだ。フォントを調べれば、なんのソフトによるものかは判明するだろう。プリンタのインクの種類や、メーカーまでわかるはずだ。しかしそれを特定することに意味はないと思われる。

　とりあえず便箋は置いておいて、私はもう一つの黒い封筒を開けてみた。

　中には黒い和紙の便箋が折り畳まれて入っていた。そこに筆で書いた白い文字が並んでいる。

『探偵に告ぐ

　黒の叫び声を聞け

場所　シリウス天文台　　3000万

凶器　大バサミ　　500万

凶器　気絶薬　　500万

トリック　バラバラ殺人　8000万

総コスト　1億2000万

以上のコストから、次の探偵を召喚する

五月雨結』

「なにこれ」

　わたしは独り言を呟（つぶや）きながら、黒い便箋を眺め回す。ますます意味不明だ。

　記載されている単語から推察するに、伏せられた依頼内容をほのめかすものかもしれない。連想

ゲームか何かだろうか。依頼をこれで察しろというのか？　それにしても、単語の下に書かれている数字は一体？

もしかすると、これはわたしの探偵能力を調べるための謎かけかもしれない。

依頼主がわたしを試そうとしているのは間違いない。わざわざ代理人が仲介していることから考えても、使えない探偵は依頼内容さえ教えられずに門前払(もんぜんばら)いされることになるだろう。

なんだか重大なことが起ころうとしているみたいだ。

問題は、集合日時まで日がないということ。

あさってが当日だ。

学校には申請を出せば授業を休めるからいいとして、はたしてそれまでにこの謎を解けるかどうか……

時間がない。

わたしはベッドから跳(は)ね起きると、部屋を飛び出し、急いで学校に引き返した。

学校には情報処理室というパソコンを自由に使える部屋がある。調べものをするには、そこでインターネットを利用するのが手っ取り早いだろう。ちなみにわたしはパソコンを持っていないし、ケータイはネット対応していない。

寮から校舎までは徒歩数分だ。校舎にはまだ、部活の途中の生徒たちや、これから帰宅する生徒たちが残っていた。わたしは小走りに彼女たちとすれ違いながら、情報処理室に急いだ。

情報処理室では、数名の生徒が黙々とキーボードを叩いていた。彼女たちを横目に、わたしはパソコンの一つを借りる。

わたしはまず、『シリウス天文台』を検索してみた。すると意外にも簡単に、その正体が判明した。

シリウス天文台とは、牙柳一郎(きばりゅういちろう)なる人物の所有する個人天文台らしい。牙氏は戦後の経済成長時に鉄工業で一財産築いた成金で、老後に経営から退(しりぞ)くと、私財をなげうって個人天文台を建て、そこで隠遁(いんとん)生活を送っているのだという。天文台といえば、大学や研究機関が所有している施設というイメージがあったが、天体観測や星に興味のある人が、個人レベルの天文台を建てることはよくあるらしい。シリウス天文台も、そうした趣味の産物であるようだ。

すると謎の依頼主とは、牙柳一郎なる人物ではないのだろうか。戦後に鉄工業に関わっていたとすれば、少なからず大人物として各界に認識されている可能性もある。依頼をおおやけにできない理由は、どうもそのあたりにありそうだ。

牙柳一郎についてそのあとも調べてみたが、特に気になる情報を手に入れることはできなかった。過去になんらかの事件に巻き込まれたというような記録も見当たらない。やはりネットから仕入れられる情報には限度がある。

その日はそれ以上得るものもなく、わたしは寮に帰った。

翌日、わたしは授業を受けながら、依頼について考えていた。期末試験が近いというのに、授業内容はほとんど頭に入ってこなかった。クラスメイトたちが並ぶ教室の中で、わたしだけが別世界にいるような孤独を感じた。

昼休みには、図書室で牙氏の情報を探した。この学校の図書室には、そのへんの図書館よりも古い蔵書が眠っている。けれど肝心の情報を見つけ出すのには、昼休みの短い時間だけでは足りそうにもなかった。わたしは放課後にまた戻ってくることにして、その場は一旦引きあげた。

午後の授業中、窓から眺める風景が、いつもより暗いことに気づいた。今にも雪が降り出しそうな空だった。冬の低気圧が東に留まり、北からはマイナス四十度の寒気が上空に押し寄せてきている。どうりで唇が乾くわけだ。わたしは休憩時間にリップクリームを塗りながら、手帳に書き込んだ明日の予定をぼんやり眺めた。本番は明日だ。

放課後、わたしは図書室でついに目的の情報を手に入れることができた。それは毎月刊行されている天文ファンのための雑誌で、十年前のバックナンバーに、シリウス天文台の文字を見つけたのだ。

個人天文台を訪問するという趣旨の記事だった。そこには四ページにわたって、写真つきでシリウス天文台について書かれていた。

わたしはその記事のコピーをとって、寮に持ち帰った。予習の資料としては、かなり価値のあるものを手に入れられたのではないか。依頼と関係あるかどうかはともかく、少なくとも面接をクリアできるだけの情報は得られたという手応えを感じていた。

その夜、わたしはノートや資料、万一の時のための着替えなどを詰め込んで、明日に備えた。予習も完璧なはずだった。一つ心配なことがあるとすれば、天候が思わしくないこと。

明日から吹雪になるところもあるという予報だった。

翌日、わたしは学校を休んで、果崎駅へ向かった。

駅に着くと、すでに雪がちらちらと舞っていた。周囲には冬の乾いた田んぼが広がっていて、雪のせいか、昼間だというのに薄暗く、人家のぼんやりとした明かりがぽつんぽつんと窺えた。

時刻は午後二時。予定より一時間早いけれど、電車が一時間に二本しかないので、余裕をもって寮を出たら、こんなに早く到着してしまった。

その無人駅で、わたしの他に降りたのは、二人だけだった。

わたしは待合室の中で待つことにした。ベンチが二つだけ並べられた小さな部屋の中央に、円筒型の

ストーブが焚かれている。わたしは早速ストーブの前に陣取って、冷えた手を温めた。

　すると、さっきわたしと同時にホームに降りた二人の男が、待合室に入ってきた。

　二人の男は無言でベンチに座ると、それぞれ時計を確認したり、周囲を見回したりし始めた。この世の果てのようにひと気の途絶えた駅に、手持ちぶさたな人間が三人も集まるというのは、明らかに不自然な状況といえるだろう。

「あの……」

　最初に口を開いたのはわたしだった。正直なところ、怖かった。わたしはその時、見知らぬ土地で、見知らぬ二人の男に囲まれた女子高生にすぎなかった。

「お二人のどちらかが、大江由園さんでしょうか？」

　びくびくしながら尋ねると、二人の男は同時に反応し、互いに探りあうような視線を交えてから、わたしを改めて眺め回した。

「ふうん、なるほど、お嬢さんも探偵なのか？」

　髪を七三にきっちりと分けた男が先に口を開いた。スーツにロングコートという服装で、つやつやとしたネクタイを固く結んでいる。いかにも有能そうなサラリーマンといった風体だが、その姿にいっさいの個性は感じられなかった。もしここがオフィス街なら、彼の姿は一瞬で背景に溶け込んでしまうだろう。それくらいありふれた外見だ。

「こう見えて私も探偵だ」彼は親指で自分を示す。「おそらく君もそうだろ？」

　彼は向かいに座るもう一人の男に尋ねる。

　その男はサングラスをかけていた。薄いグレーのレンズ越しに、かろうじて視線の動きが見て取れる。短髪で、精悍な身体つき。トレンチコートの下は黒いタンクトップで、首にはドッグタグを提げている。その姿からは、何かただものではない雰囲気が漂っている。

　サングラスの男は、黙ったまま肯いた。

「探偵が三人……そしてまだ代理人は現れない」

　スーツの男が腕組みして、芝居がかった調子で云った。

「ど、どういうことなんでしょう」緊張と恐怖から、わたしの声は震えていた。「依頼状が届いたのは、わたしだけじゃなかったんですか？」

「そういうことみたいだな」スーツの男が不敵な笑みを浮かべて云う。「指定時刻まではまだ時間がある。はたしてあと何人集まるやら」

　そうか……考えてみれば、呼び出された探偵が自分一人とは限らないのだ。依頼状も名前の部分を変えれば誰にでも適用できそうな文面だった。依頼者は探偵を試そうとしているのだから、複数人集

めて効率的に面接を行なった方がいいということなのだろう。
　二人の男たちは思い思いに暇潰しを始める。
　スーツの男はイヤホンで何かを聴きながら、英会話の本をぱらぱらと眺めていた。まさにサラリーマンの暇潰しといった様子だ。
　一方、サングラスの男は指先で外国のコインをもてあそんでいる。時々何かを思い出したように「ふっ」と笑うのが怖い。
　わたしはその空気に耐えられず、待合室から出て、外のベンチで待つことにした。
　冷たい空気に息が白く霞(かす)む。雪はだんだんと強くなっているみたいだ。髪や肩やキュロットにうっすらと積もる雪を、時々払ってやらないと、すぐにわたしは雪だるまになってしまうだろう。
　三十分ほど過ぎて、電車がホームに入ってきた。
　電車を降りて改札を抜けたのは、中年の男が一人だけだった。赤らんだ顔に、小太りの体型。よれよれのコートに、ぼさぼさの髪。見た目からいって、謎めいた代理人とは思えなかった。
　中年の男はやはり待合室に入っていった。硝子戸越しに、三人が会話しているのが見える。やがて中年の男が一人で出てきて、わたしのところに向かって歩いてきた。
「ふうむ、女子高生探偵か」中年の男はにやにや笑いながら云った。「人生においてもっとも大切な少女の時期を、探偵などという報(むく)われない仕事に費やすべきではないと思うがね」
　男は酒のにおいをふりまきながら、わたしの隣に腰かけた。まさか昼間から酔(よ)っぱらっているのだろうか。
　わたしはとっさに間隔を開けて座り直す。
「そう警戒しなさんな」
「あの……あなたも探偵なんですか？」
「一体、他の何に見えたというのだね？」
　男は両腕を広げて云う。
　少なくともわたしには、ただの酔っ払いのおじさんに見えた。
「まあ疑うのも無理もない。若気の至りは誰にでもある。しかし観察力が足りないのは、探偵としてはいかがなものかね」
「観察力……ですか」
「一つ手本を見せてやろう」男は舐(な)め回すようにわたしを眺める。「お前さんは去年のクリスマスに、一人寂しくミサに出席したね。しかしつまらない聖歌に嫌気がさして途中で抜け出し、ケーキを大量に買い込んで、寮の部屋で食べ散らかした。最初から最後まで、孤独なクリスマスだったようだな」
「ど、どうして知ってるんですかっ」

わたしは思わず咎めるような口調になっていた。

　驚くべきことに、彼の云っていることはおおむね正しい。当時はお金があまりなかったので、ケーキは大量には買えず、チョコレートケーキを一個しか食べられなかったという点だけが異なっている。

「まさか何処かでわたしのことを見ていたんですか？」

「いやいや、これが観察力というものだよ」男はしたり顔で云う。「まずお前さんの制服からみて、有名なミッションスクールの生徒だということはわかる。学校行事の一つとして、クリスマスのミサが行なわれていることは想像に難くない。しかし最近は校則もゆとり仕様だと聞くからな、おそらく強制参加ではなく、自由参加なのだろう」

「どうしてわたしが一人で参加したとわかるんですか？」

「その短パン、オリジナルだろう？　おそらく探偵活動のためだろう。それに今日は平日であるにもかかわらず、学校に行かずに、依頼を優先している。それだけ探偵活動に熱心だとすれば、普段から一緒に遊ぶような友だちも少なかろう。まして彼氏なんているはずもない。特にクリスマスのような特別な日は、より深い関係の人間と一緒にいることが多いからな。お前さんには、そこまでの間柄(あいだがら)となる人間はいない」

　──余計なお世話だ。

　当たってるけど。

「基本的に、聖歌など面白みも何もないものだ。お前さんにとっては、やはり我慢(がまん)ならないものだっただろう。半(なか)ばやけ気味にケーキを買いに走った。お前さんが甘いものが好きだということは、そのリュックから覗いているキャンディやチョコレートが教えてくれている」

　男はわたしの背中を指差して云う。驚いてリュックを下ろしてみると、少しだけファスナーが開いていて、そこに持参したお菓子が覗いていた。

　わたしは急に恥(は)ずかしくなって、それを急いで隠す。

「寮で暮らしていることは一目瞭然だな。もし家族と住んでいるとしたら、その襟(えり)の皺(しわ)や、裾(すそ)のほつれに母親の注意がいかないはずがない」

　わたしは指摘(してき)されるたびに、恥ずかしい気持ちになると同時に、不気味(ぶきみ)さを覚えた。こんなささいな情報から、これだけ行動を見透かされるのだとしたら、隠し事などできなくなってしまう。

　──これが探偵か。

　わたしは初めて出会う同業者の能力に圧倒されていた。こんな酔っ払いのおじさんにさえ、わたしは探偵として敵(かな)わない気がする。

「多少は尊敬する気になったかね？」男はコートのポケットから小さなウィスキーの瓶を取り出して、蓋(ふた)を

開けた。「ところで、こんなところで待っていたら寒いだろう。おじさんと中に入らないか？」
「あ……いいです。ここで待ちます」
　わたしはきっぱり断る。
　男は飲みかけのウィスキーを思わず吹き出しそうになる。
「ああ……そう。そうだな、もうすぐ時間だ、ここで待つのもよかろう。私は中に入るぞ。歳には勝てんな……」
　中年の男はふらふらと待合室に戻っていく。重そうなキャリーバッグを転がしながら……
　やがて集合時間の三時が近づいてきた。
　田んぼのあぜ道を、白いワゴン車がこちらに向かってくるのが見えた。灰色の雪景色を切り裂くように、性急な速度で近づいてくる。
　ワゴンは駅の前で止まった。
　運転席から紺色のスーツを着た男が降りる。男は真っ先にわたしに気づいて、こちらに向かってきた。
「大江さまをお待ちの方ですか？」
　彼は尋ねる。
「はい、あなたは？」
「タクシー会社の者です。大江さまから、みなさんを所定の場所までお送りするように承っております」
　まだ代理人にも会えないというわけか。
　なんだか先行きが不安になってくる。天気もどんどん悪くなっていくし、同行者はおじさんたちばかりだし……
「どうぞ、お乗りください」
　運転手に云われ、わたしはワゴンに乗り込んだ。一番うしろの席に座り、隣に人を寄せつけまいとするようにリュックを置いて占領した。
　駅の待合室にいた男たちも、ワゴンに気づいてぞろぞろとやってきた。スーツの男が最初に乗り込み、続いてサングラスの男が乗る。
　あとから酔っ払いのおじさんが乗り込んだ。彼は意外にも席は何処でもいいといった様子で、運転席のすぐうしろに座った。隣の席一つ分、キャリーバッグが占める。
　運転手が戻ってきて、運転席に乗り込んだ。
「すみません、出発までもう少しお待ちください。車内は寒くはありませんか？　温かい飲み物でもいかがでしょう」
　運転手は腕に抱えた缶コーヒーを配り始める。わたしはすっかり冷え切っていたので、ありがたくそれを

受け取り、手の中に包み込んだ。
「お待ちくださいとはどういうことだ？」スーツの男が尋ねる。「早く出発したまえ」
「まだ三時になっておりませんので」
「駅にはもう誰もいなかっただろ」
「二時五十八分着の電車がある」
　サングラスの男が呟くような小声で云う。
「もう誰も来るはずがないだろう。来たとしても遅刻だ」
「まあまあ、そう焦(あせ)りなさんな、お前さんも一杯やるか？」
　酔っ払いのおじさんが瓶を差し出す。
「酒は飲まないんでね」
　スーツの男は瓶を押しのけると、缶コーヒーを開けて飲み始めた。そして胸ポケットから煙草(たばこ)を取り出して、火をつけようとする。
「すみません、車内は禁煙です」
　運転手が云う。
「なんだと？」
　スーツの男は苛立(いらだ)ったように声を上げて、しぶしぶ煙草をしまった。わたしはうるさい大人たちを後ろの席から眺めながら、コーヒーを飲んで身体を温めていた。
　その時ちょうど、ホームに電車が入ってきた。
　しかし駅舎の外からでは、乗り降りする乗客の姿は見えない。たった二両の電車は、駅舎の陰にまるごと隠れてしまった。
　まもなく電車は再び姿を現し、雪の中へと走り去っていく。
　はたして誰か降りたのか。
　時計が三時ちょうどを示した時、改札口に女の子の姿が見えた。
　小さくてか細い少女だ。
　——彼女は何者だ？
　わたしには彼女が透き通って見えた。それは白く冷めた肌が、雪景色に溶け込んで見えたからかもしれない。まさか幽霊……ではないだろう。目の上で切り揃えられた前髪が、さらさらと風に揺れている。そのかすかな揺らぎこそ、彼女がそこに存在していることの証明に違いなかった。
　彼女はこのひと気のない殺風景な世界の片隅に立つぶんにはふさわしいかもしれないが、しかしわたしたちの前に現れる探偵としては、完全に場違いな存在に思えた。

彼女はワゴンを見つけると、足元の雪に気をつけるように、てとてととこちらに駆け寄ってくる。黒いバッグを両手に提げながら……

彼女は五人目の探偵なのか？

信じられない。

というのも、彼女の着ている服——フリルのついたブラウスと黒いブレザーは、わたしの通う学校の中等部の制服に他ならなかったからだ。胸のリボンの色は、一年生であることを示していた。

彼女はワゴンの横に立って、車内を覗き込むように、背を伸ばす。外からはこちらの様子があまり見えないようだ。

運転手がワゴンを降りた。

「大江さまをお待ちの方ですか？」

尋ねると、彼女はこくりと肯いた。

「どうぞ、お待ちしておりました」

運転手に促(うなが)され、彼女はワゴンに乗り込んできた。すでに数人の乗客がいることについて、彼女は特に驚いた様子は見せなかった。むしろ他の男たちの方が、幼い探偵の出現に絶句していた。

わたしは自分のリュックをどかして、彼女のために席を空けた。彼女は何も云わずにそこに座ると、バッグを膝(ひざ)の上に置いて抱えた。

「では時間になりましたので、出発いたします」

運転手が車を出す。

五人の探偵を乗せ、ワゴンはついに引き返せない道を進み始めた。

人の姿はおろか、建物の影もないような雪の山道をワゴンが上っていく。

「ねえ、ちょっと、君」わたしは小声で、隣の彼女に声をかける。「この車に乗っている意味、わかってる？」

彼女はこちらを向いて、ほんのわずかに首を傾げるようなしぐさをした。

「君、探偵なの？」

彼女は肯く。

「本当？　うちの学校に中学生の探偵がいるなんて、今まで聞いたことないんだけど……」

「今の学校には最近入ったから」

彼女は初めて口を開いた。

大きな瞳で、わたしを窺うように見つめる。白い肌に、寒さでほんのりと赤らんだ頬が、チークを入れて

いるみたいでかわいらしかった。
「あ、そう、転校生か……って、それにしたってまさか同じ学校の中学生探偵が同じ依頼を受けるなんて……へんな偶然ね」
「確かに奇妙な偶然だな」
　酔っ払いのおじさんがわたしたちの方に身を乗り出さんばかりに振り返って云う。
「酔って少女にちょっかい出すなよ、おじさん。探偵が警察の厄介になるなんて洒落にもならん。探偵の風上にも置けないぜ」スーツの男が割って入る。「まったく、やれやれだ。ガキに酔っ払いに根暗野郎……この人間観察ワゴンは一体なんなんだね。素人ドッキリ番組か？」
「云うじゃないか、若造」酔っ払いのおじさんは急に真面目くさった顔になった。「これでも私はキャリア二十五年の探偵、だてに酔っ払ってるわけではない」
「ほう、ではこれを見て酔いを醒ますといい」
　スーツの男はにやりと笑うと、上着の内ポケットから免許証のような写真入りのカードを提示した。

　網野英吾　DSCナンバー『３６７』

「私は網野英吾というものだ。探偵図書館の分類ナンバーは『３６７』——おじさん、あんたはどうなんだ？　まさか未登録ってわけじゃあるまい」
「ふん」
　酔っ払いのおじさんは鼻で笑う。そのあと、ごそごそと何かを探すように、あちこちのポケットに手を突っ込んだ。ようやく目当てのカードを探り当て、網野に見せつける。

　犬塚甲　DSCナンバー『９４３』

「な、ナンバー『９４３』って……あんた……いや、あなたはまさか……『９』ナンバーでクラス『３』？　ほ、本当ですか？」
「偽造などしとらんよ」
　そう云って、犬塚という男は酒を呷った。
「す、すみませんでした！　まさかそれほどの高クラスの方だとは……ご無礼の数々、どうかお許しください」
　網野は急に低姿勢になる。

なんだかみっともない大人の世界を垣間見た気がする。

それにしてもあの酔っ払いのおじさんがクラス『３』だなんて思いもしなかった。人は見た目によらないとはいえ……

「クラス『３』って何？」

わたしの隣の少女が尋ねた。

「知らないの？」

「ええ」彼女は目を細めて云う。「それって、偉いのかしら」

「わたしたち探偵にとってはね」

わたしは自分の探偵図書館登録カードを財布（さいふ）から抜き出して、彼女に見せた。

五月雨結　DSCナンバー『８８８』

「君もこういうカード持ってない？」

「この前、登録したわ」

彼女はバッグから手帳を取り出して、そこに挟んでいたカードを抜き取った。

霧切響子　DSCナンバー『９１９』

「わっ、君も『９』ナンバーなんだ。中学生で『９』ナンバーって……随分（ずいぶん）と過酷（かこく）な道を選んだものね」

わたしは驚いて云う。

探偵図書館に登録されている探偵は、みんなナンバー入りのカードを持っている。

探偵図書館——およそ六万五千五百人の探偵の情報ファイルが分類され、棚に並べられている場所だ。登録されている探偵の情報は一般に公開され、何人（なんぴと）も自由に閲覧（えつらん）することが可能とされる。もし何か困ったことがあれば、探偵図書館に足を運べばいい。そこにはあらゆる状況に対応できる探偵たちと、事件の記録が存在する。

探偵たちにとっては、とりあえず探偵図書館に登録しておけば依頼が舞い込んでくるというメリットがある。一種の派遣（はけん）登録みたいなものだ。

ただし『探偵図書館はデータベースであり思想を持たない』という理念のもとに、仕事の斡旋（あっせん）や紹介などの業務は行なっていない。

データがオープンにされることで、探偵の匿名（とくめい）性が失われることになるが、進行中の案件が公表され

ることはないので、大したデメリットとはいえないだろう。過去の記録も、個人情報に関わる部分は適切に伏せられる。

　これらのデータは、探偵図書館独自の分類法により、文書として特定の棚に割り振られることになる。

　これがＤＳＣ（ディテクティブ・シェルフ・クラシフィケーション＝探偵図書館分類）と呼ばれるもので、探偵の分類ナンバーとなる。

　ＤＳＣは三桁の数字で表わされる。

　頭の数字は一次区分とされ、その探偵の得意分野を示す。網野の『３６７』を例にとると、『３』がそれだ。これは経済犯――横領や背任などの事案を得意とするということ。

　犬塚と霧切の『９』ナンバーは殺人犯を得意とするもので、探偵にとって花形分野といえるだろう。ただし依頼をこなせずに脱落していく探偵も多いとか。殉職する探偵が多いのも、このナンバーだという。

　続いて真ん中の数字は二次区分。これは一次区分から派生する、さらに細かい得意分野を示す。網野の場合『６』なので、産業スパイなどを扱うのが得意なようだ。彼の見た目からすると、彼自身も産業スパイとして行動することを得意としているのかもしれない。

　それから――

「最後の数字が、その探偵のランクを示すの。最初はみんなランク『９』からスタートする。君も登録したばかりだから『９』だね。探偵として業績を認められることによって、この数字が少しずつ減っていく。ランク『３』というのはそうそうなれるものではないから、あのおじさんは、ああ見えてすごい探偵なの。ちなみに最高ランクは『０』。ゼロはその分野のマスターである証なの」

　分類ナンバーにゼロの数字を持つ探偵は、同業者から尊敬される存在となる。彼らはゼロ持ちとか、ゼロクラスなどと呼ばれる。

　さらに『０』ランクから業績を重ねていくと、真ん中の数字が『総合』ジャンルを示す『０』となる。これはダブルゼロクラスと呼ばれ、探偵としてはもはやトップの地位にあると云える。いわゆる名探偵クラスだ。

　ここからさらに、一次区分、頭の数字においても『総合』を示す『０』となれば、トリプルゼロクラスと呼ばれ、伝説的な存在として語られるようになるだろう。

　探偵図書館の歴史は十五年ほどだが、過去に『０００』というナンバーを手に入れた探偵は、四人だけと云われている。

「つまりゼロクラスになれば探偵として認められるということ？」

　霧切響子が尋ねる。

まるで宝物の在り処を見つけた子供のような――純粋な目をしている。
「まあ、そうだけど……云っておくけど簡単なことじゃないよ。実はわたしも君と同じくらいの歳から探偵をやってるんだけど、三年目でやっとこれだもの」
「ちょっとそのカードを見せたまえ」網野が強引にわたしのカードを取り上げる。「何っ……こ、高校生でランク『８』だと……ま、まあ私には及ばないがな。残念だったな、女子高生探偵よ」
　網野は動揺しているようだった。
「グラサンのあんちゃんは？　カード持ってるんだろう？」
　犬塚がサングラスの男に尋ねる。
　彼は無言のまま、ポケットからそれを取り出して示した。

　燕尾椎太　DSCナンバー『２４５』

「な、なんだと……ランク『５』……私よりランクが上……」
　網野は震えている。
　ランクの数字は確かに探偵の能力を測る指標ではあるけれど、彼のように振り回されるのもどうかと思う。
「全員、カード持ちというわけか」
　燕尾はぼそりと云った。
「依頼するにあたって、探偵図書館に登録されている探偵を選んだのだとしても、何も不思議なことじゃない」犬塚がろれつの回らない喋り方で云う。「ただ、私が依頼する側だったら、なるべくゼロクラスを揃えるがね……」
「確かにその通りですね。しかしあえて、いろんなクラスを揃えてみようと思ったのかもしれません」
　網野が云う。犬塚に対しすっかり下手に出ているようだ。産業スパイと渡り合うくらいだから、順応力は高いのかもしれない。
「うむ……その可能性はあるな。それぞれ得意分野も違うしな。それにこれから会う御仁（ごじん）は、相当風変わりなようだから」
「えっ、依頼者が何者かご存じなのですか？」
「ああ、私ほどの探偵ともなれば、匿名の依頼者などすぐに判明してしまうのだよ」
「一体、何者です？」
「牙柳一郎。裏の社会ではそれなりに名の通った大物だ。我々がこれから向かうのは御仁の建てた個

人天文台。そうだろう？　運転手さん」
　犬塚は運転席に向かって声をかける。
　しかし運転手は何も返さなかった。質問には答えるなと釘を刺されているのだろうか。
「依頼状にはシリウス天文台と書かれていました」網野が云う。「一体どんなところなのでしょう。もしかして犬塚さんならご存じなのでは……」
「そんなことも調べずに来たのか、若造。しょうがないな、私が教えてやろう」
　犬塚はまんざらでもない様子で喋る。すっかり網野に乗せられているようでもある。
「シリウス天文台というのは、上空から見ると五芒星(ごぼうせい)の形をしている。その中心となる正五角形の部分が、天体望遠鏡の格納された観測ドームとなっているらしい」
　犬塚が得意げに語り始めた内容については、わたしもすでに調査済みだった。わたしでさえ簡単に天文雑誌の記事にたどり着いたのだから、他の探偵たちもあえて知らないふりをして聞いているだけかもしれない。
「そもそもシリウスとは、おおいぬ座の一等星で、冬の大三角の一つとして知られる、きわめて明るい星だ。この星、実は——」
「実は？」
　網野は調子を合わせる。
「一つに見えて二つ——双子星として知られる星なのだ」
「な、なんだって！」
「とくに明るい方がシリウスA、小さい方がシリウスBと呼ばれている。シリウスBは、シリウスAの光に邪魔されて、天体望遠鏡が発達するまで発見されなかったんだ」
「天文台にシリウスの名がついているということは……まさか建物も双子構造になっているのでは？」
「よく気づいたな、網野君。その通り、シリウス天文台はその星にならって、大小二つの星型の建物からなる。大きなシリウスAが本館、そして小さなシリウスBがエントランスとして独立した建物になっているそうだ。このおかしな構造の建物一つとっても、主は相当変わった人間だということがわかる」
「さすがクラス『３』！　まさか事前にここまで調べ尽くしているとは思いませんでした」
「そうだろう、そうだろう」
　犬塚は満足そうに笑う。
　彼のありがたい話はそのあとも続いた。ほとんどが天文雑誌に書かれていた内容だったので、わたしは車窓の真っ白な風景を眺めて聞き流した。
　ワゴンが出発してから一時間以上過ぎただろうか。外の雪はかなり勢いを増していて、森は白く染

まっていた。細い山道の中で、雪の枝のアーチが頭上を覆っている。
　突然、ワゴンが何もないところで止まった。
「おい、運転手、どうした？」
「到着しました」
　運転手は振り返って云った。
　わたしは窓の外を窺う。木々に囲まれた道の周辺には、建物一つ見当たらない。
「どういうことだ？　冗談はやめたまえ！」
　網野が声を上げた。
「ここから歩けというのか？」
　燕尾が低い声で云う。
「はい、大江さまからそのように伺（うかが）っております。私はここでみなさんを降ろしたら、引き返す手はずになっております」
「こんなところで降ろされる道理はない。犬塚先生も困ってらっしゃるじゃないか」網野は声を荒らげる。
「わかった、それなら私が金を払うから、シリウス天文台まで連れていきたまえ。ほら、メーター入れ直せ」
「そのような注文は承りかねます」
「乗車拒否というわけか？　ほほう、お前、何処のタクシー会社だ。犬塚先生、どうしてやりましょうか、この輩（やから）。探偵を侮辱（ぶじょく）したらどうなるか、教えてやってもいいのですが……」
「まあ落ち着きなさい、若造。依頼人は探偵以外の人間を近づけたくないと見える。そういう相手の意を酌（く）むのも、探偵の仕事だ」
　犬塚は自己満足めいた笑みを浮かべながら、荷物を手に取って、ワゴンのドアを開けた。そして真っ白な雪の上に、最初の足跡をつける。
「命拾いしたな」
　網野は運転手に吐き捨てるように云いながらワゴンを降りる。
　続いて燕尾が無言のままワゴンを降りた。ずれたサングラスの位置を直しながら、小さなボストンバッグを肩に掛ける。
「さ、わたしたちも降りよう」
　わたしは霧切を促す。
　霧切はバッグを持って立ち上がった。
　ステップを降りる際に、霧切は運転席を覗き込んで、尋ねた。
「大江由園からどのように指示を受けたの？」

「どのように……と云いますと？」
　運転手が聞き返す。
「直接会ったの？」
「いいえ、電話で指示を伺っただけです。直接は会っておりません。ワゴンも指定のものを用意いたしました」
「どんな声だった？」
「どんな……と云われましても……普通の男性の声だと判断しましたが」
「そう」
　霧切はそっけなく云って、何事もなかったかのようにワゴンを降りた。
　今のやり取りはなんだったのだろう。代理人の正体を知りたかったのだろうか。いずれにしろ、運転手はただ雇われて命令されているだけのようだ。
　わたしが最後にワゴンを降りる。
　そうして五人の探偵を降ろし、ワゴンは無情にも雪道を引き返していった。タイヤの跡だけを残して、たちまち雪の中に消えていく。わたしたちはすっかり山の中に置き去りにされてしまった。
「日が暮れるまでにシリウス天文台にたどり着かなければ、大変なことになるぞ」
　犬塚が両手を広げて、雪を受け止めるようなしぐさをしながら云った。
　燕尾が最初に歩き出す。彼は一瞬、雪に足を取られたように体勢を崩したが、すぐに持ち直した。
「けっこう深い、気をつけろ」
　振り返って、忠告するように云う。
　体格や人柄などからみて、彼が一番頼りになりそうな気がする。彼の分類ナンバー『245』は、『国家犯・テロ・ランク5』を示す。つまりテロリストと渡り合う武闘（ぶとう）派の探偵というわけだ。無口なのも、陰気（いんき）なのも、彼の経歴に由来するのかもしれない。足を引きずるようにして歩いているのも、修羅場（しゅらば）の古傷がそうさせるのではないだろうか。
「とにかく……一本道だし、このまま先に歩いていきましょうか」
　わたしが云うと、犬塚と網野はわかっていると云いたげにわたしを一瞥（いちべつ）してから、燕尾のあとを追った。
「行こう、霧切ちゃん」
　雪の中で立ち尽くしている彼女の背中を押すように、わたしは云った。
　霧切は振り返って、眉間（みけん）に幼い皺を寄せる。
「ここで引き返すべきかもしれない」
「は？　ここまで来て引き返すの？　歩いて？」

「足音が聞こえるの」
「足音？」
　雪のせいか、周囲はひっそりとしている。しかし何者の足音も聞こえてこない。わたしは首を傾げて、彼女を見返した。
　彼女は意思が通じないことに焦(じ)れたように、いっそう難しい顔をして、すでに歩き出した男たちの背中を見やった。
「見捨てるわけにもいかないわね……」
　霧切はそう呟いて、歩き始めた。
「あ、ちょっと待ってよ」
　わたしは慌てて彼女のあとを追う。
　彼女から少し目を離したら、雪の中で見失ってしまいそうだ。わたしはすぐに彼女を追い越して、彼女の方を振り返った。
「さっきから何云ってるの、君」
「あなたは気にならないの？」
　霧切は前を向いたまま云う。
「何が？」
「おかしな依頼状のこと」
「それは……気になることばかりだけど……」
「そもそも大江由園なんて人、存在するのかしら」
「え？」
　わたしは首を傾げる。
「大江由園……読み方を少し変えると……オーエ・U・N」
「まさか……U・N・オーエン？　いや、さすがにそれは気のせいじゃない？」
　その名は、かの有名なミステリ『そして誰もいなくなった』に登場する。ある孤島を舞台に十人の人間が次々に殺されていく物語だが、彼らは皆、U・N・オーエンなる人物から招待状を受け取っていた。それは『unknown』（正体不明）のもじりでもある。
「仮に代理人がU・N・オーエンだったとして、一体何をするつもり？　まさか『そして誰もいなくなった』を再現するっていうの？　わざわざそんなヒントみたいな名前を依頼状に書いて、何かする前にうっかりばれちゃったらどうするの」
「まだ誰にもばれてないみたい」

霧切は道の先を行く男たちを指差す。
「いや……やっぱりただの思い過ごしじゃない？」
「そうだといいけど」
　霧切は首を竦めるようなしぐさをして云った。
　彼女は何か勘付いているのだろうか？
　この奇妙な依頼の正体に。
「とりあえずここは、あの人たちについていきましょ。こんな雪山の中で取り残されたら、依頼を受ける前に凍死しちゃうよ」
　わたしが云うと、霧切は肯いて、わたしのあとをついてきた。小さな歩幅で、わたしに追いつくのに必死だ。わたしは彼女がついてこられるよう、ゆっくり歩いた。
「ねえ、ところで君さ」わたしは霧切に話しかける。「どうして探偵になろうと思ったの？　中学生で探偵なんて、それなりの理由があるんでしょ？」
「……なろうと思ったことなんてない」
「え？」
「生まれつきの探偵なの」
「ふふっ、何それ、ハードボイルドのつもり？」
　わたしは冗談めかして云う。彼女の場合、ハードボイルドというより、キュートボイルドといったところだろうか。
　しかし彼女は真剣な顔つきでくすりとも笑わない。どうやら本気らしい。
「もしかして家業（かぎょう）が探偵とか？」
「そう」
　霧切は短く答えて、頭に積もる雪を払うようなしぐさをする。
「へえ、じゃあ君が探偵を継ぐんだ」
「そうよ」
　今度は声に自慢げな響きが隠されていた。
「いやじゃなかった？」
　何が？
　という顔で彼女はわたしを見上げる。
「いくら家業だからって、よりによって探偵なんてさ。世の中には他にも選択肢がたくさんあるでしょ？　アイドルとか、看護師さんとか、パン屋さんとか……探偵なんて、女には向かない職業だって昔から云わ

れているくらいだし」
「好き嫌いで考えたことはないわ」霧切は無表情で答える。「私にとって探偵であるということは、生きているということと同じなの」
「なんだかすごい重圧のように聞こえるけど……それって、そういうふうに教えられてきたってこと？」
「そうよ」
　霧切はあっさりと肯定する。そのことに疑問を感じたことさえないといった様子だ。
　あまりにもけがれのない瞳に、わたしはかえって脆(もろ)さを見たような気がした。きっとわたしの想像も及ばないような家柄の子なのだろう。
　霧切は何かを聞きたそうにちらちらとこちらを見ている。
「なあに？」
　わたしが促すと、彼女はさっと目を逸らしてから、口を開いた。
「……あなたはどうなの？」
「ん？　どうして探偵になったのかってこと？　それはもちろん……正義の味方になりたかったから……かな。救いを求めている人を助け出す！　やっぱ、それこそ探偵ってもんでしょ」
　わたしの熱のこもった口調にも、彼女は特別な反応を示すことはなかった。むしろ不思議な生き物を見るような目でわたしを見るのだった。
「何その顔。わたしは本気なのよ」
「ふうん……そう」
「自分から聞いといて無関心ってどういうこと？　というか君さ、仮にもわたしと同じ学校の後輩なんだから、もうちょっと後輩っぽく振る舞ったらどう？　敬語を使えとまでは云わないけど、先輩に対してもっとこう……」
「たとえば？」
「そうね……」わたしはふと思いつく。「学年が三つも離れていたら、先輩っていうよりお姉ちゃんかな。じゃあ……わたしを呼ぶ時はお姉ちゃんって呼ぶこと。どう？」
「お姉さま？」
「い、いや、上品にしなくていいから。『さま』じゃなくて『ちゃん』ね。お姉さまじゃ、なんか恥ずかしいでしょ」
「結お姉さま」
「や、やめて、恥ずかしい！　やっぱ違うのにしよう」
「呼び方なんてどうでもいいわ」霧切はため息交じりに云う。「それより早く行きましょう。置いていかれる

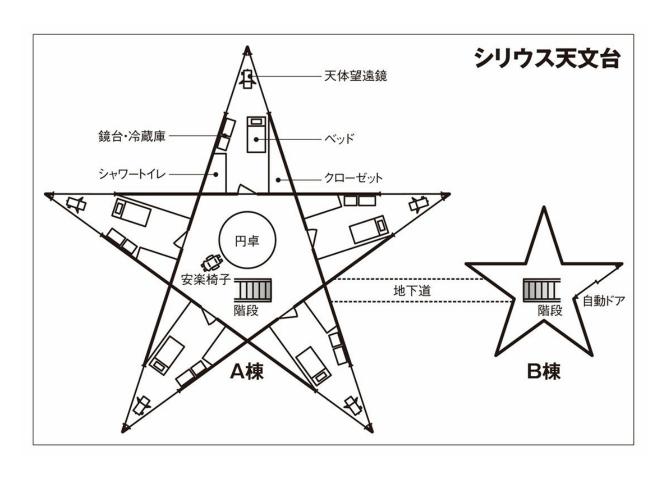
わ。結お姉さま」
「君わざとやってるでしょ！」
　わたしは思わず顔を覆って身悶える。このままだと将来的に黒歴史になりかねない。世間的にも勘違いされそうだ。
　霧切は一人先に歩きだす。
　わたしは抗議の声を上げながら、彼女のあとに急いで続いた。
　ふと道の先を見ると、男たちが立ち止まって、何やら思案していた。
　わたしと霧切は小走りで彼らに追いついた。
　彼らの目の前には、大きな看板が立てられていた。

『ようこそ　絶望のシリウス天文台へ』

　誰の悪戯か知らないけれど、赤いスプレーで『絶景』が『絶望』に書き換えられていた。その不気味な暗示に、その時のわたしたちは不思議と無関心だった。というのも、わたしたちにとって重要なのは、シリウス天文台が近くにあるという事実の方だったからだ。
　看板には矢印が示されており、その方向に細い道が確かに存在していた。
「この矢印まで悪戯ってことはないだろうな」
　網野が腕組みして云う。
「我々を遭難させることが目的とは思えない」犬塚はさすがに冷静だった。「たとえこれが罠だとしても、暖をとるのには困らんぞ。酒ならいくらでもある！」
　そう云って彼は、キャリーバッグを叩いた。
「未成年はどうするんですか？」
「人肌で暖をとればよかろう」
　犬塚は下品な笑みを浮かべる。
　わたしはクラス『３』の数字を持つ犬塚を完全には尊敬できずにいた。名探偵は清廉潔白な紳士であるべき……という固定観念のせいかもしれない。いずれにしても彼はあくまでクラス『３』だ。『２』や『１』の数字を持つ探偵はもっとすばらしい人たちに違いない。ましてゼロクラスともなれば、別世界の人間に見えるのではないだろうか……
　燕尾を先頭に、男たちは道を進み始める。
　本当にこのまま日暮れを迎えてしまったら、わたしたちは全滅するかもしれない。森の雪道はますます

暗くなり、風が勢いを増している。とぼとぼと歩みを進めるわたしたちの他に、動くものの気配はない。
　男たちはわたしと霧切に歩調を合わせてくれることなどなく、どんどん先へ行ってしまう。わたしたちは薄闇の中、彼らの影と、彼らの足跡を追うように歩かなければならなかった。
　霧切がふと、道の先を指差した。
「見て、結お姉さま。明かり」
　見ると、吹雪のヴェールの向こうに、ぼんやりと灯（とも）る建物の明かりが見えた。
　というか今……
「君、その呼び方……」
　霧切はわたしを無視して先へ行ってしまう。
　――まあいいや。
　その建物はやや小高く開けた場所にあり、周囲の白い風景を暖色（だんしょく）の明かりで赤く染め上げていた。硝子張りの屋内から照明が溢（あふ）れ出ているのだろう。まさに地上の星と呼ぶにふさわしく、一等星の輝きを闇の狭間（はざま）に放（はな）っている。しかし吹きつける雪風に紛（まぎ）れて見えるせいだろうか、まるで蜃気楼（しんきろう）か幻影のように全景が歪んでいた。
　わたしたちはとうとうシリウス天文台にたどり着くことができた。

　シリウス天文台は犬塚が説明していたように――というかわたしの集めた資料によると――星型で双子の建物になっていた。ただしわたしたちの視点からでは、星型であるかどうかはわからない。ただの平べったい建物だ。

シリウス天文台
天体望遠鏡
鏡台・冷蔵庫
ベッド
シャワートイレ
クローゼット
円卓
安楽椅子
階段
地下道
階段
自動ドア
A棟
B棟

まず小さい建物がわたしたちを出迎える。これがシリウスBに倣(なら)ったＢ棟だ。独立した一戸のエントランスというべきだろうか。全面硝子張りで、中の様子が丸見えになっている。このＢ棟より奥に、本館となるＡ棟が輝いているのが見える。
　わたしたちは雪から逃れるように、Ｂ棟に駆け込んだ。入り口の自動扉はわたしたちを迎えるように開いた。
　ようやく吹雪をしのげる場所に入ることができたようだ。わたしはすっかり冷えた胸を撫(な)で下ろす。
　入ってすぐ正面に、地下へ下りていく階段がある。この先の扉が実際の玄関扉だ。
「しかし面倒な構造になっているな」網野が乱れた七三を撫でつけながら毒づく。「本館に行くには、一度この地下道をくぐらないといけないのだろう？」
「全方向に展望客室のある建物を作るために、本館に玄関を設けなかったそうですよ」
　わたしは資料を思い出しながら云った。
「それにしても……誰も出てこないな」
　犬塚が地下への階段を下りて、両開きの大きな玄関扉の前に立つ。横の壁にインターホンがあった。
　犬塚は乱暴にボタンを押す。
　しかし反応がない。
「電気がついたままになっているから、誰もいないということはないと思うのだが……」
　犬塚は首を傾げる。
「急用で留守にしているとか？」
「玄関周りに足跡などなかっただろう？　ここ数時間は、誰も出入りしておらん」
「あっ、確かにその通りですね」
　網野は感心したように云った。
「牙氏はともかく、代理人もおらんとはどういうことだ」
　犬塚は扉に手をかけた。
「ん？　開いている」
　扉は音もなく開いた。
「気配はない」燕尾が用心深く扉の向こうを覗いて云った。「お前らはここで待て」
　燕尾は素早く扉の向こうに忍び込むと、「クリア」と声を上げた。その大げさな合図に従って、わたしたちは中に入る。
「出迎えもなしか。つくづくわけのわからない依頼人だな」

網野は苛立った様子で云う。

そこから二十メートルほど地下道になっている。地下道という言葉から想像するようなじめじめとした印象はなく、数メートルおきに配置された埋込灯(うめこみとう)が、映画館の通路を想像させた。

通路の終わりに、さっきと同じような両開きの扉がある。その扉に鍵穴はなく、引くと簡単に開いた。

いよいよ本館だ。

今度は地上に上がる階段に出る。階段の上から、妙に明るい光が降り注(そそ)いできている。わたしたちは警戒するように、揃って階段を上った。

「ほほう、これがシリウス天文台か」

犬塚が感嘆(かんたん)の声を上げる。

わたしたちがまず目をひかれたのは、ドーム型になっている天井だった。

内側がすべて鏡張りになっている。

つまり半球状の凹面鏡(おうめんきょう)が、わたしたちの頭上を覆っているような状態だ。この鏡によって、照明の明かりが増幅されている。

「なんだこれは。おかしな実験器具の中に放り込まれた気分だ」

網野が呟く。

「乱歩(らんぽ)の『鏡地獄(かがみじごく)』を思い出すな。あれは球体の内部全面が鏡という状況だったが……」犬塚はにやにや笑いを浮かべている。「凹面鏡といえば、天体観測には欠かせない道具の一つだということを知っておるかね？　大口径の望遠鏡のほとんどに凹面鏡が用いられているのだよ」

ぐにゃぐにゃに引き伸ばされたわたしたちの姿が天井に映し出されている。凹面鏡に映る世界は、左右だけではなく、上下もさかさまにひっくり返っている。そうして歪んだ鏡の世界から、不気味な顔のわたしがこちらを見下ろしていた。あまり居心地のいいものではない。

「鏡というものは実に不思議だ。我々の知る世界とは似て非なる世界が、すぐそこに口を開けて待っている。いやはや、天井にまで鏡を設置するなんて、牙柳一郎氏はなかなか偏執(へんしつ)的で、ロマンチックじゃないか」

犬塚はたいそう感動しているみたいだ。

しかし資料によると、天井の凹面鏡は保温と照明効果を高めるためにドームの内側にアルミのパネルを張っただけのものらしい。構造上、中央のホールには窓が存在しない。そのため照明増幅装置が必要だったというわけだ。この建物の主に、鏡に対する憧憬(どうけい)があったかどうかは定かではない。

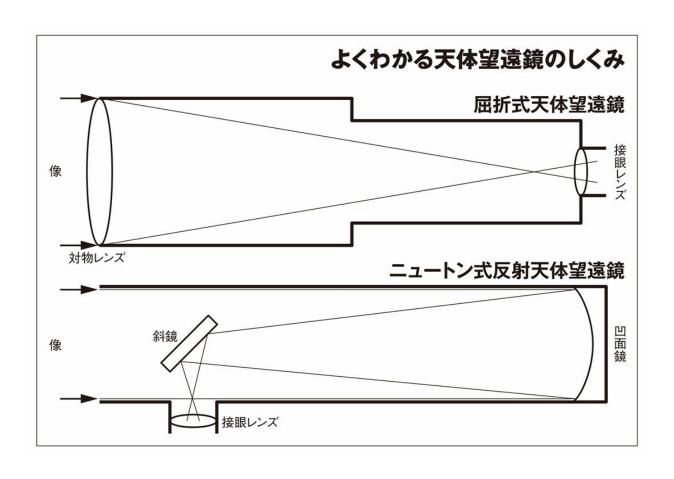
階段を上りきると、ようやくホール全体を見渡すことができた。

ホールは正五角形になっている。それぞれの辺の中心に設けられた扉は、客室へ通じるものだ。扉は

全部で五つ、つまり星の鋭角を描く三角形は五つに区切られ、五つの客室となっている。
　ホールの中央には、大きな円卓が一つ。その傍らに、小さな安楽椅子。
　安楽椅子とは、主に一人用の肘掛け椅子のことだ。現場に直接行かずに、その場で事件を解決してしまうような探偵のことを安楽椅子探偵と呼んだりする。目の前の椅子もまた、名探偵がゆったりと思考を巡らせるのに充分なほど、背もたれと座面に分厚いクッションマットがあしらってあり、それを木製の脚が支えている。
　ホールにあるのは、それですべてだった。
　肝心の天体望遠鏡は見当たらない。
「あれ……？　写真ではここに大きな望遠鏡が設置されていたんだけど……」
　わたしは腕組みして云った。
「一年と三ヵ月前、牙柳一郎は脱税により追加徴税を受けている……」燕尾が突然、口を開いた。「未納分の差し押さえにより天体望遠鏡一体が徴収された。ここにあったものだけが綺麗に取り除かれたのだろう。お役所仕事というやつだ。いつだって役人どもはそうだ。現場のことを気にかけやしない……」
「ど、どうしてそんなこと知ってるんですか？」
　わたしは驚いて尋ねる。
「調べたらわかることだ」彼は平然と答えた。「ちなみにその二ヵ月後、この建物すべてが売りに出されている。購入したのはあるITベンチャー企業。ただしその会社は、なんらかの企業のペーパー会社らしい。裏に何が隠れているのか、暴くことはできなかった」
「なんで今まで黙っていたんだ？」
　網野が突っかかる。
「情報は商品だろ？　商品をただで配る馬鹿がいるか？」
　燕尾のドスの利いた声に、網野は沈黙するしかないようだった。
「燕尾君の云うことが正しいとすれば、すでに牙柳一郎氏はこの建物を手放しているということになるな」
　犬塚の顔が曇る。
「牙とかいうやつは無関係だというのか……じゃ、じゃあ一体……依頼人は誰なんだ？」
　網野は狼狽した様子で云った。
　その問いに答えられる者はいない。
「と、とりあえず大江とかいう代理人が現れるのを待つしかないな。ここまでもったいぶるということは、よほ

どの大物からの依頼かもしれない」
　網野が云う。
　わたしたちはお互いに顔を見合って、それから何処へともなく視線をさまよわせた。胸の中に抱えた小さな疑念や不安が、いまや音を立てて軋み始めているようだった……
「主が不在というのなら、失礼を承知で探険させてもらおうかね」
　犬塚はまだめげていないようだ。さすがはクラス『３』といったところだろうか。近くの扉を開けて、室内を覗き込んでいる。
「わたしたちも周りを調べてみようか。ねえ、霧切ちゃん」
　わたしは霧切に声をかける。
「手分けして調べた方が早いわ」
　彼女は冷静に返し、一人でホールの奥に移動していってしまった。仲間意識を持ち始めていたのだけど、彼女の方はそうでもなかったらしい。なんだか年下の子に戒められたような気分だった。
　わたしはしょんぼりとしたまま、適当な部屋を覗いてみた。
　取材記事に載っていた客室そのままだ。部屋自体は三角形だけど、右手にクローゼット、左手にトイレとシャワールームが設置されているため、実際は奥に向かって長いホームベース形といえる。ベッドはクローゼットの横にあり、その向かいに鏡台と小さな冷蔵庫がある。
　三角形の二等辺は半分近くが硝子張りになっており、展望窓として設計されているようだった。しかしカーテンを開けて外を覗いても、暗い森に白い雪が舞っている様子しか見えない。たとえ昼間でも、あるいは雪が降っていなかったとしても、眺望自体はよくないだろう。この窓はおそらく、地上を見るためのものではない。星空を見るためのものだ。
　部屋の一番奥、二等辺の先端にほど近い場所に、天体望遠鏡が設置されていた。徴収されたという巨大なものとは違って、個人でも所有できるレベルの望遠鏡だ。といっても、一般的に想像する天体望遠鏡よりも大きくて太い。大口径というのだろう。値段もそれなりのはずだ。
　わたしはカーテンを開けてから、試しに接眼レンズを覗いてみた。けれどぼんやりとした暗闇が映るだけで、もちろん星なんて見えない。
　少し強引に天体望遠鏡の向きを変えて、先端を室内に合わせる。覗くと、開いたままになっている扉から、さらに向こうのホールの様子が、極端にぼかしたような像となって見えた。
「早速悪戯しているのかね」
　レンズの中に巨大な怪物が姿を現す。
　わたしは短い悲鳴を上げて、天体望遠鏡から目を離した。

部屋の入り口に犬塚が立っていた。
「そんな悲鳴を上げるでない、勘違いされるだろう」
　犬塚は慌てた様子で云う。案の定（あんのじょう）、あとからすぐに網野が部屋に駆け込んできた。
「何かあったのか？」
「いや、残念ながらなんもありはせん」犬塚は額に手を当てながら、弱ったようなしぐさをしてみせた。「部屋の構造は全部同じようだな。天体観測するにはよい場所だ」
「まったく、こんな天気でなければ、新しい星の一つでも発見してやるのですが」
　網野は舌打ちしながら云う。
「それにしてもいい天体望遠鏡だ。ドイツ製の口径２００ミリ。ニュートン式反射望遠鏡だな。ほら、見てみな、筒の先端にレンズがないだろう。中は筒抜けになっていて、奥に凹面鏡が見える」
「普通の天体望遠鏡と違って、筒の横に覗き穴がありますね。私もさっき、違う部屋で覗いてみましたが、Ｂ棟がかろうじて映って見えました」
　網野が嬉々（きき）として犬塚の話に乗る。
「そうそう、お前さんの云う普通の天体望遠鏡というのは、一般的によく見る屈折（くっせつ）式望遠鏡のことだな。レンズを利用して鏡筒内に像を結ばせるタイプのものだ。初心者はそちらの方が断然扱いやすい。星の位置と、レンズを覗く方向が直線になるからだ」

よくわかる天体望遠鏡のしくみ
屈折式天体望遠鏡
像
接眼レンズ
対物レンズ
ニュートン式反射天体望遠鏡
像
斜鏡
凹面鏡
接眼レンズ

犬塚は酔っ払ったような口調で、べらべらと望遠鏡の蘊蓄を語り始めた。

　わたしは天体望遠鏡に興味をなくし、クローゼットやシャワールームを覗く。特に気になるようなものは何もない。

「一方、この反射望遠鏡タイプは、安価で大口径のものを用意できる。レンズではなく凹面鏡を使っているからな。鏡に映った像を、内部の射鏡によって横方向に反射させるため、接眼レンズは鏡筒の横についている。あのニュートンが発明したものだ」

「しかし犬塚先生は天体観測にもお詳しいのですね……」

「学生時代に天文部だったからな。ははは」

　二十年以上前の知識ということか。

　わたしは彼らの会話を聞き流しながら、冷蔵庫を開けた。中はよく冷やされており、ミネラルウォーターとコーラのペットボトル、他に缶ビールが二本入れられていた。

　ミネラルウォーターの消費期限を確認する。まだまだ先だ。比較的最近、入れ替えられたものとみていい。

　わたしは犬塚たちを残して、部屋を出る。

　ホールでは燕尾が腕組みしながら円卓に腰を預けるようにして立っていた。

「何かありました？」

　わたしは尋ねる。

「いや……何も」

「わたしもそっちの部屋を調べましたけど、なんにもありませんでした。謎めいた暗号文とか、ページの欠けた本とか……そんなものは何処にも」

「宝探しのために俺たちは呼ばれたわけじゃあるまい……」

　燕尾は嘆息しながら云う。

　そこに犬塚と網野が戻ってきた。

「すべてのシーツをひっぺがし、望遠鏡を覗き、シャワーを流してみたが、なんらおかしな点はなかったぞ。もちろん謎の依頼人の姿は何処にもないようだ」

　そのあと、別の部屋から霧切が出てきた。彼女はただ首を横に振るだけだった。

「ふうむ、何もなしか……」

「どうします？　犬塚先生。さすがにこの雪の中を歩いて帰るわけにはいかないでしょう。ケータイは……案の定圏外ですし、ここには電話もないようです。応援も呼べませんね」

「いやいや、ここから出ると判断するにはまだ早い。代理人が来るかもしれないだろう？」

犬塚は相変わらずのんきそうな顔つきで云う。
「はたして代理人は現れるのでしょうか……」
網野はいよいよ疑い始めているようだ。
わたしたちがこの場所に集められたことには、何か犯罪めいた企みがあるのではないか。
なんらかの罠なのではないか……
「そろそろ依頼状のことは忘れた方がいいんじゃねえのか？」
燕尾がぼそりと呟く。
「そうだな、燕尾君の意見に賛成だ」犬塚が云う。「しかしそう思わせることこそ、依頼人の思惑かもしれんぞ。もしかしたらもう面接は始まっているのかもしれん。我慢比べだよ。試験にパスするためには、依頼状に忠実に行動しなけりゃならんのじゃないか？」
「それならよいのですが……」
網野は深刻そうに呟く。
「いずれにしろもう引き返すことなどできんのだ。ここで夜を明かす覚悟も必要だろう。ちょうどおあつらえ向きに部屋が五つあるじゃないか」
「こんなわけのわからないところで寝るつもりですか？」
「ではお前さんだけ帰るかね、網野君。ライバルが減ることに異を唱える者はいないだろうな」犬塚は余裕の笑みを浮かべながらホールを横切る。「私はこっちの部屋を借りることにしよう」
犬塚は自分の部屋を勝手に決めると、中に入って扉を閉じてしまった。
それを見た燕尾は、黙ったまま近くの部屋に入り扉を閉じた。
「どうかしてる」網野はテーブルの上に薄い書類鞄をドンと置く。「こんなことになるんだったら、もっといろいろと準備してくるべきだった。私の荷物はこれだけだ。着替えもない」
わたしと霧切は気の毒な目で彼を見ることしかできなかった。
「まさかお前たちもここに残るつもりか？」
「仕方ありませんよ……少なくとも夜が明けないと、とても歩いて帰れそうにありませんし」
わたしは云う。
「なあ、私たち三人で協力して、近くの民家を探しに行かないか？　この依頼、何か嫌な予感がする。三人で出れば、誰かに助けを求めることができるかもしれない。一刻も早くここを立ち去るべきだとは思わないかね？」
「嫌な予感は確かにありますけど、外に出ることに比べたらましです。こんな吹雪の夜に出歩いたら、確実に死んでしまいますよ」

「後悔するぞ。どっちがましかなんて……結果が出るまでわからないのだからな」
　網野はやけ気味に云うと、鞄をひっつかんで空いている部屋に入っていった。乱暴に扉を閉める音が、ホール内に響き渡る。
「大変なことになってきたね」
　わたしは霧切に話しかける。
　彼女は相変わらず血の気の失せたような顔と、何を考えているのかわからない目で、ホールの壁を見つめていた。
「大丈夫？」
「ええ」
「着替えとかある？」
「同じ服でも一週間は問題ないから」
「いや、問題にした方がいいと思うけど……」
　わたしはこんなこともあろうかと、着替えをひと揃い持ってきている。雑誌の記事でシリウス天文台の写真を見た時に、もしかしたら面接の過程でここに宿泊することになるかもしれないと考えたのだ。今のところ、その通りになっている。
　犬塚の云っていたように、我慢比べをすることが面接の内容なのだろうか。
「君、どっちの部屋使う？　怖かったらわたしと一緒でもいいよ」
　尋ねると、霧切は迷ったように二つの扉を見比べて、片方を指差した。
「わあ、偶然、わたしもそっちにしようと思ってたの。じゃあ一緒に使うしかないね」
　わたしが云うと、霧切は眉をひそめて、わたしを見返した。
「うそうそ、冗談。わたしは残った方にするから」
　霧切は無言でわたしに背を向けて、部屋に入っていってしまった。怒ったのだろうか？
　わたしは残された五つ目の部屋に入る。
　ベッドのシーツが引きはがされ、バスルームの扉も開きっ放しになっていた。おそらく犬塚か網野が部屋を調べた際に、そのままにして去ったのだろう。わたしはため息をこぼしてから、ベッドを直し、その上にリュックを放り出した。
　窓の外を確認してみるが、やはり白い暗闇がそこにあるだけだった。
　一体、いつになったら雪がやむのだろう。まさか……朝になってさらに猛吹雪になったとしたら、一泊や二泊では済まないことになるかもしれない。
　わたしはふと気になって、冷蔵庫を調べた。

中にはやはりジュースやビールが並べられている。
食料品はない。
その事実が、とてつもない大問題に思えてきた。
おそらくこの建物の何処にも食料品は備蓄されていない。もし吹雪によって、連日ここで足止めをくらったとしたら、わたしたちはたちまち餓(う)えてしまうのではないか。
わたしはリュックの中を確認する。チョコレート菓子と、キャンディが一袋入っている。おやつとして持ってきたものだ。
水とこれだけで、はたして何日もつのだろう……
ひょっとしてわたしたちは、自分たちが考えているよりもかなりまずい状況にいるのではないだろうか。
わたしはベッドに腰掛けて、しばらくの間、頭を抱えた。雪の中を傘もささずに歩いてきたせいだろうか、少し意識がぼんやりする。この状況で熱なんて、しゃれにならない。
わたしはベッドに横たわり、天井を見つめた。
ポケットからケータイを取り出して確認する。
圏外。
わたしはその文字をごく自然に受け止める。探偵たちが雪に閉ざされた建物に集まっていながら、ケータイが通じるなんてありえないのだ。
謎の依頼状……あれは一体なんなのか。
はたして誰がなんの目的で、わたしたちをここに呼び寄せたのだろう。
考えれば考えるほど……意識がもうろうとしてくる。
わたしは気分を晴らそうと、ホールに移動した。
ホールでは霧切が一人、壁に向かって立ちつくしていた。
「あら、何やってるの」
尋ねると、彼女は振り返って何か云いたげな顔をした。正面の壁には埋設式のキャビネットがあり、蓋が開いていた。
「おや、何か見つけた？」
キャビネットの内側には、奇妙なスイッチ類が並んでいる。パネルに書かれている操作説明と思われる文章は、すべて外国語だった。ドイツ語だろうか。その中でも一つだけ目立つボタン式のスイッチがある。注意を促すように、黒と黄色の警告線がスイッチを四角く囲っている。
「ま、まさかこれ……自爆ボタン……？」
「天井のドームを開閉するスイッチよ」霧切は呆(あき)れた様子で云った。「天体望遠鏡の動かし方も書いて

あるわ」
「君、ドイツ語が読めるの？」
「いいえ、少しわかる程度。ドイツには何度か行ったことがあるから」
　たいしたものだ。わたしは英語の試験さえ苦労しているというのに。
「押してみよっか」
「あっ」
　わたしは霧切の同意を得る前に、スイッチを押した。
　すると何処からともなくモーターが駆動するような音が聞こえてきた。天井を見上げると、凹面鏡の一部に隙間が生じている。まるで鏡のひび割れのようだ。その隙間に見えたのは、けっして鏡の世界などではなく……濃厚な灰色の夜空だった。
　たちまち雪が吹き込んでくる。屋根に積もっていた雪もどさどさと音を立てて落ちてきた。
　凍えるような空気がわたしたちを包む。
「わっ、寒いっ」
　わたしは慌ててスイッチを押した。しかしドームの稼働は止まらない。
「ちょ、ちょっと、どうやって戻すの？」
「そこのレバースイッチを上げてから、もう一度スイッチを押すのよ」
　云われた通りにすると、ドームがゆっくりと閉じていった。閉まりきるまでに一分もかからなかった。最後にはらはらと降る雪を残して、ドームは完全に閉まった。
「おい、今の音はなんだ？」
　網野が怯えた様子で扉の隙間から顔を覗かせた。
「天井が開いたんです」
「天井？」
　網野は部屋から出てきて、天井を見上げる。何を馬鹿なことを云っているんだという顔でわたしを一瞥する。
「おや、諸君（しょくん）、揃ってるな」
　そこへ犬塚も出てくる。
「犬塚先生、何かありましたか？」
「いや、やはりじっとしているのは性（しょう）に合わなくてね。もう少し詳しくこの建物を調べてみてはどうかと思っているのだが……」
「さっきも充分に調べたじゃないですか」

「今度は隠し扉や隠し通路があるのではないかということを想定して調べてみよう」
「そんなものあるとは思えませんよ」
「たった今、この子たちが天井を稼働させるスイッチを見つけたばかりではないか。それに考えてもみたまえ。誰も出入りした形跡がないにもかかわらず、建物の明かりはついたまま、玄関の扉さえ開いていたのだ。やはり内部に何者かの存在を感じずにはいられない」
　確かに犬塚の話には一理ある。わたしは同調するように肯く。
「今度は全員で念入りに調べるとしよう。ただし二つのチームに分かれる。全員一緒だと、隙が生まれるからな」
　部屋で休んでいた燕尾もホールに呼ばれた。彼は部屋を出る際に、何故だかよろけて転びそうになった。頭を抱えるようにして、円卓に身体を預ける。
「大丈夫ですか？」
　わたしが尋ねると、彼は無言で肯いた。
　早速チーム分けが行なわれる。
　わたしは霧切とチームを組むことを宣言した。彼女はわたしの後輩だし、かわいいし、探偵としても一目置いているし、何より放っておけない危うさがある。霧切もわたしと組むことに反対しなかった。
「じゃあ我々おじさん組は三人で……」
　犬塚が云いかけたところで、網野が慌てて口を開く。
「私は彼女たちと行動します。ほら、大人がついていた方がいいだろうし」
　網野はわたしにすり寄ってくる。
「そうだな、じゃあそっちはお前さんに任せよう。こっちは私と燕尾君で行動する」
　わたしたちはホールで別れ、それぞれ探索を始めた。
「さ、行くぞ、お前ら」
　網野がリーダーを気取って先頭に立つ。
　わたしたちは地下道を渡って、Ｂ棟へ移動した。
　エントランスとなるＢ棟には、地下道へ繋がる階段があるだけで、装飾品などはいっさい存在しない。ほぼ全面が硝子張りなので、壁の中にスイッチ類を設置することもできないだろう。
「やれやれ、調査はお前らに任せるから、終わったら云いたまえ」
　網野は階段の手すりに腰を預けると、スーツのポケットから煙草とライターを出して一服し始めた。
　なるほど、サボるためにわたしたちと組んだというわけだ。大人ってずるい。
　いろいろ云いたいことはあるけれど、わたしは彼のことを放っておいて、入り口の自動扉を改めて調べ

てみた。

　外の雪には、わたしたちの出入りした痕跡が残されている。それもすでに雪に覆われつつあるようだ。あとから何者かが侵入したような新しい形跡はなかった。

　Ｂ棟には他に調べる場所もないので、わたしたちはすぐに地下道を引き返すことにした。

「玄関扉の鍵、かけておきましょうか」

　わたしは一応、リーダーにお伺いを立てる。けれど網野はどうでもよさそうだったので、わたしは独断で鍵をかけることにした。

　霧切は壁や床をノックするように叩きながら、少しずつ移動する。わたしも彼女に倣って、地下道の調査を始めた。

　なんの手応えもないまま、Ａ棟入り口の扉の前までたどり着く。

　霧切は床から立ち上がって、スカートの裾を払いながら、虚しそうに首を振った。

「隠し部屋なんてあるわけない」網野は携帯灰皿に煙草を押しつけながら云った。「私が感じてる危機というのはそんなものではない……なんというかもっとこう……」

　網野はぶつぶつと云いながら本館へ繋がる階段を上っていく。

　彼はふと、階段の途中で立ち止まると、困惑したように天井を見上げた。

「くそっ、なんだか眩暈がする……」

　わたしたちがホールに戻ると、犬塚と燕尾の二人はまだ客室を探索しているところだった。しかも調べているのはわたしの部屋だ。

「わーっ、勝手に入って何やってるんですか！」

　慌てて咎めるも、二人は我関せずといった顔つきで、ベッドの下やシャワールームを調べている。

「誰もお前さんの荷物など漁っとらんから安心しろ」

　二人はしばらく室内を捜索したあとで、部屋を出てくる。

「やはり何もないな。構造上、抜け道があるとすれば床下しかないが、怪しい箇所は何処にもなかった」

　犬塚が結論づける。

　わたしたちは円卓を囲むようにして、それぞれ疲れた表情を浮かべながら、何から切り出すべきか迷っていた。口をついて出そうになるのは質問ばかりだったが、答えられる人間がここにはいないことを、みんなわかっている。

「やはり……依頼なんて最初からなかったんじゃないのか」燕尾が口を開く。「まんまと敵の罠にはめられたんだ。探偵図書館で適当な探偵を選び出し、それっぽい依頼状を書いて空き家に集める。そういう

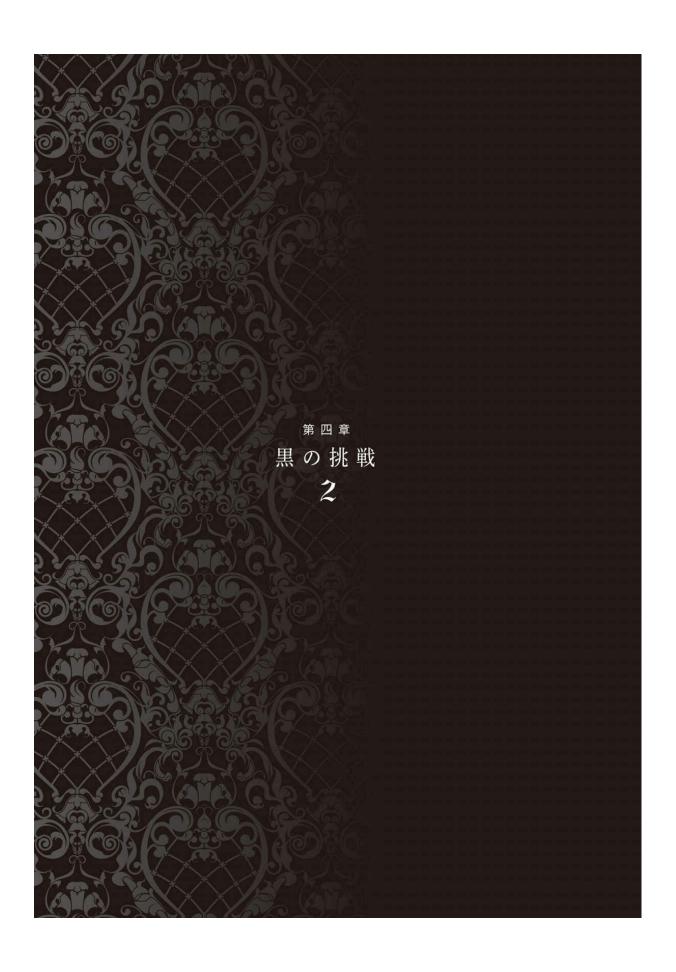
愉快犯（ゆかいはん）がいるんだ」

「罠ねえ……」

犬塚は難しそうな顔をして云う。彼は妙に青ざめている。
「夜が明けるまでに代理人が現れなければ、私は帰る」
　燕尾は片手を広げて云った。
「そうだな……しかしこの吹雪が何日続くかわからんぞ。もしかしたら一週間このままかもしれない。その場合、食料はどうする？　我々の調べた限りでは、ここには食料の備蓄はない」
「今夜の食事もままならない……か……」
　燕尾が両手を円卓について、身体を支えるようにする。
　アナログ時計を見ると、八時過ぎを差していた。いつもなら寮で夕食をとったあとごろごろしている時間だ。
「とりあえず今日はもう身体を休めるべきかもしれないな……」
　犬塚がふらふらと円卓から離れる。
　次の瞬間、何かが倒れるような音がした。
　振り向くと、さっきまでそこにいた網野がいなくなっていた。
　円卓を回り込んでみると、網野がうつ伏せに倒れている。
　一体何が……？
　何かとんでもないことが起きている。
　緊急事態にもかかわらず、わたしは身体を動かすことができなかった。自分が何をすべきなのか考えられない。思考が分厚い膜（まく）のようなもので覆われてしまったかのようだ。
　そうしているうちに、視界まで膜に覆われ始めた。
　いや――それは煙だった。
「火事だ！」
　誰かが叫んでいる。
　火事？
　逃げなきゃ、逃げなきゃ。
　けれど身体は重く、意識が途切れる。わたしは白い煙に呑まれて、そのまま身体まで白く溶けていくのを感じていた……

第四章

黒の挑戦

2

DSC　探偵図書館分類

0　総合　総合
1　宗教犯　洗脳、不法教義など
2　国家犯　テロ、内乱、破壊活動など
3　経済犯　偽造通貨、横領、背任など
4　自然犯　自然破壊、密猟、不法投棄など
5　技術犯　不正アクセス、ネット利用詐欺など
6　風俗犯　売春、賭博など
7　芸術犯　絵画窃盗、贋作詐欺など
8　自由犯　脅迫、監禁、誘拐（自由を奪う行為）など
9　殺人犯　強盗殺人、密室殺人など

網野英吾(35)　DSC『367』――経済犯・産業スパイ・ランク7

燕尾椎太(28)　DSC『245』――国家犯・テロ・ランク5

犬塚　甲(41)　DSC『943』――殺人犯・密室・ランク3

霧切響子(13)　DSC『919』――殺人犯・不可能犯・ランク9

五月雨結(16)　DSC『888』――自由犯・誘拐・ランク8

第五章

シリウス天文台殺人事件 3

「ゲーム？　この殺人がゲームって、一体どういうこと？」
　安楽椅子に座る霧切響子にわたしは尋ねる。
「いくつか確認しなければならないことがあるわ」彼女は質問には答えずに話を進める。「私自身で調べに行った方が早いのだけれど……拘束を解いてもらうわけにはいかないかしら」
「それはできない」
　わたしは断固として云う。
　気持ちのうえでは、彼女のことを犯人だとは考えていない。より正確にいえば、彼女を犯人だとは思いたくない。
　けれどどう考えても、論理的にいって、犯人は彼女しかあり得ないのだ。
　探偵として、論理に背くわけにはいかない。
「何か調べる必要があるのなら、わたしが代わりに君の目と手足になる。それでいいだろう？」
「……いいわ」
「まず何を調べたらいい？」
「殺された人たちの荷物を調べて。もし可能なら、網野さんと犬塚さんのバッグを持ってきて」
「バッグね……」
　わたしは云われた通り、網野と犬塚の部屋を回った。なるべく屍体を見ないようにしながら……
　網野の書類鞄と、犬塚のキャリーバッグを霧切の前に並べる。キャリーバッグは異様に重たくて、うっすらと額に汗をかいてしまった。
「これでいい？」
「網野さんの鞄の中を調べて」
　わたしは網野の書類鞄を開けて、中を探る。何が書いてあるのかよくわからないファイルが二冊、英会話のテキストが一冊、あとはハンカチや煙草、ライター、財布など。それからサイドポケットに黒い封筒が入れられていた。
「封筒の中身は？」
　霧切が尋ねる。
「依頼状だね」わたしは中身を確認して云う。「文面はわたしのところに届いたものと一緒だ。宛名だけが違う」
「他には？」

「何もない」
「そう……」霧切は考え込むように口を閉ざす。「他の人の荷物も調べた方がいいけど、とりあえず結論を出すわ」
「ん？　何かわかったの？」
「結お姉さまがさっき見せてくれた、もう一つの依頼状――いえ、挑戦状は結お姉さまだけに送られたものみたいね」
「挑戦状って……これ？」
『探偵に告ぐ』から始まる方の手紙。
　これは全員に送られたものではなかったのか。
「網野さんの荷物の中にはないでしょう？　私のところにも届けられていないわ」霧切が云う。「結お姉さまは、この事件における探偵役として選ばれたのだと思う」
「わたしが探偵役――？」
「そう」霧切は大人びた表情でそっけなく云う。「文面にある通りよ。今ここで起きている事件は、挑戦状において予告されていたものだったの。結お姉さまはその事件を解決する探偵」
「ちょ、ちょっと待ってよ。わたしがもっと早く挑戦状に気づいていたら、事件を未然に防ぐこともできたっていうの？」
「そういうことになるかしら」
「う……嘘だっ、そんなの……」
　わたしは犯人からの挑発に気づかず、みすみす殺人事件を発生させてしまったというのか？
　わたしがもっと鋭ければ……わたしがもっと用心深ければ……わたしがもっと探偵として優れていれば……事件を防ぐことができたかもしれない。三人も死なずに済んだかもしれない。
　三人――わたしとはほとんど無関係な人とはいえ、三人の命を、わたしは見殺しにしてしまった……しかも三人とも探偵だ。この世の不正を正すために働いている人たちを三人も……
　手が震える。
　わたしが殺したようなものだ。
「そう考えると、今この不可解な状況も納得できるわ。さっき私が目覚めて、真っ先に考えたことは――何故私は殺されなかったのか、ということだった」
　彼女のその言葉は、霧切響子という幼い少女のいびつな人間性を端的に表しているように思えた。
　死がけっして特別なものではないということを、彼女はごく当たり前のこととして受け入れている。死はすぐ傍にあるものとして生きている。中学生の少女が、その境地に至った経緯を考えると、薄ら寒い気

持ちにさえなる。

「殺すチャンスはいくらでもあったのに、犯人はどうして私を生かしたのか。その理由は——私が犯人役だから」

「やっぱり君が——」

「勘違いしないで。あくまで割り振られた役割のことよ。結お姉さまは犯人を告発する役、そして私は告発される役。そういうふうに仕組まれているの」

「つまり……君は真犯人によって仕立てられたダミーの犯人ということ？」

「そう」

「そんなのおかしいよ。そもそも挑戦状の存在がおかしい。だって犯行を予見させるような手紙を事前に送ることにどんなメリットがあるというの？　それに探偵役って？　犯人の立場からすれば普通、探偵役なんていらないんだ」

「だからこれはゲームだと思うの」

「意味がわからない。人を殺すことがゲームだっていうの？」

「というより……犯人が探偵に挑戦する殺人ゲーム」

「そんな……」

「挑戦状の存在や、私たち二人が生かされた理由を考えると、そうとしか思えないわ」

「一種の愉快犯ということ？」

「そういうことになるのかしら」

「つまり君はこう云いたいわけだ。今、この状況は、犯人がわたしに対する挑戦として用意したリアルタイムの推理ゲーム」

「そう」

「信じられるわけないでしょ！　そんなこと！」わたしは否定する。「どうしてわたしなの？　六万五千五百人いる探偵の中から、わたしを標的にする理由は何？」

「もしかしたら、探偵全体への——あるいは探偵という存在そのものへの挑戦なのかもしれないわ」

　霧切は目を細めると、首を振るようにして、頬にかかった髪を払う。

　今まさに犯人からの挑戦を受け、覚悟を決めたかのような表情だった。

「わかった……仮にここで今起きていることが、犯人にとってゲームだったとして……事件の謎はどう解決する？　依然として、君が唯一の容疑者であるということにはかわりがないんだよ」

「ここではとりあえず、私の視点だけで話を進めるけど……私は犯人ではないし、結お姉さまも犯人ではない。さっきの手の感触は、明らかに犯人の手とは違ったから」

「それで？」
「犯人は他にいる」
「それについてはさんざん調べた。わたしたちの他には誰もいない」
「いいえ、結お姉さまはまだ完全には調べていないわ」
　まだ調べていない場所があっただろうか……
　隠し部屋や秘密の通路などがないことは、気を失う前にみんなで確認している。また建物の周囲の雪に人が出入りした痕跡はない。玄関扉も、すべての窓も内側から施錠されていた。仮に玄関の合鍵を持っていたとしても、自動扉の外には人が出入りした痕跡はなかったので、何人も出入りしていないといえる。
　仮に――霧切以外の人間が犯人だったとして、その人物は何処からきて、何処に消えた？　まさか気球に乗って、自動扉から飛び立った？　それともペットボトルサイズになって、冷蔵庫に隠れている？
　どれもありえない。
「最初に確認しておきたいことがあるの」霧切が口を開く。「結お姉さまは屍体の状況について、首が切断されていると説明したわ。でも挑戦状には『バラバラ殺人』と書かれている」
「まさか……」
「屍体について、もう一度よく調べるべきではないかしら」
　首だけではなく、身体も切断されているというのだろうか。
「手錠を外してくれれば、私が調べに行くわ」
　霧切が云う。
「いいえ、君はそこに座ってて。わたしが調べてくる」
「よく調べて。どんなふうに切断されているか。きっと屍体はすべてを語ってくれるわ」
「……わかった」
　とはいったものの……まともな精神でバラバラ屍体なんか調べられるわけがない。そんなことができるのは頭に『９』ナンバーを持つ探偵たちだけだろう。
　けれどわたしがやらなければならない。
　挑戦状を叩きつけられたというのが事実なら、わたしは受けて立たなければならないのだ。
　わたしは最初に見つけた屍体――頭部は網野――を調べることにした。いまや血のにおいは部屋じゅうに漂っていて、わたしは吐き気を覚えた。袖（そで）で自分の鼻を覆いながら、屍体に近づく。
　毛布がめくられたままになっていて、頭部と胴体の切断面が露出している。
　わたしはさらに毛布を引きはがしてみた。

その屍体の胴体は燕尾のものであるらしかった。黒のタンクトップには見覚えがある。身体つきもたくましく、単に屍体の衣服を交換しただけではないと思われる。

また腕は肩口で切断されていた。

一見すると胴体と繋がっているように見えるが、切断面を密着させるように置かれているだけのようだ。

しかもそれだけではなく——両腕とも、それぞれ三分割にされていた。肩から肘までの上腕、肘から手首までの下腕、そして手首から先の手。

本当にバラバラにされている……

わたしはその場からあとずさり、尻餅(しりもち)をつくようにして座りこんでしまった。

こんなものを目の当たりにして正気でいられるはずがない。

わたしは叫び出したくなるのをこらえながら、気力を振り絞り、立ち上がる。もしもこんな凶悪犯罪が、探偵への挑戦として行なわれているのだとしたら……わたしは絶対に勝たなければならない。

探偵は正義のために闘わなければならないのだ。

わたしは奥歯を噛みしめ、あらためて屍体を観察する。

どうやら三分割された腕も、それぞれパーツごとに他人のものと挿げ替えられているようだ。まとっている服の袖や、地肌の色など、不気味なちぐはぐさはごまかしようがない。衣服ごと切断されたようなので、かろうじてどれが誰のパーツなのか判断できる。おそらく上腕が網野、下腕が燕尾、そして消去法的に考えて手が犬塚。両腕とも、まるでパズルのように並べ替えられている。

また恐ろしいことに……両足も同じように三つに切断され、並べ替えられていた。その順番も、腕とそっくり同じようだ。

屍体は合計十四個のパーツに細切れされている。

わたしは口元を押さえたまま、よろよろとホールに戻った。

安楽椅子に座る霧切は、わたしの反応など最初から予想していたかのように涼しい顔をしていた。

「君の云う通りだった……」わたしは嗚咽(おえつ)するように云う。「なんでこんなこと……本当にこれがゲームなのだとしたら、完全に狂ってる……」

「屍体はどういう状態だった？」

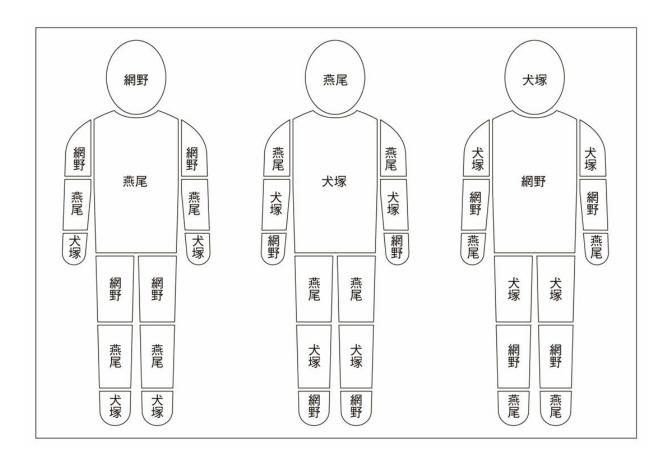
霧切はわたしのことなどお構いなしで、興味は屍体にあるようだった。

わたしはホールの床にへたりこんで、たった今見てきた屍体について説明した。

「そう……思っていたよりも残酷な事件みたいね」

「本当にそう思ってる？」わたしは霧切の顔を覗き込みながら云う。「一体これはなんなの……どうして

こんなに人をバラバラにする必要があるの……」
「結お姉さまのもとに届けられた挑戦状を参考にすれば、バラバラ屍体はトリックと関係があるみたいね」
「トリック……？」
「何か特別な理由があって、屍体を切断したと考えられるわ」
「屍体をバラバラにする理由って……」
「いろいろあるけど、ほとんどの場合、持ち運びしやすくするためね」
「持ち運び……？」
　屍体をベッドに運びやすくしたということだろうか。確かに、六十キロ以上ある成人男性の屍体を運ぶのは、かなり大変な作業になる。けれどそれが細かく分割されていれば、運搬が楽になるだろう。
「他の部屋の屍体も調べてみて」
　霧切はわたしに指示する。
　わたしはよっぽど「君がやって」と云いたかったが、自分で調べると約束してしまった以上、やるしかなかった。
　隣の部屋に入り、屍体を調べる。頭部は燕尾で、胴体は犬塚のものらしい。
　屍体はやはり十四個のパーツに細切れにされていて、両腕両足はそれぞれ、上から燕尾、犬塚、網野の順に並べられていた。なお燕尾が首に提げていたドッグタグは、この屍体の傍に落ちていた。拾い上げて確認する。ローマ字で燕尾の名前が記されているだけだった。
　二体のバラバラ屍体を確認した以上、三体目の屍体の惨状は調べるまでもなかった。けれど一応、この目で確認するしかない。
　わたしは壁にすがるようにして、隣の部屋に移動する。
　わたしはその部屋で、三つ目の屍体を調べた。
　頭部は犬塚で、胴体は網野。両腕両足は上から、犬塚、網野、燕尾のもののようだ。

網野
網野
燕尾
網野
燕尾
燕尾
犬塚
犬塚
網野
網野
燕尾
燕尾
犬塚
犬塚
燕尾
燕尾
犬塚
燕尾
犬塚
犬塚
網野
網野
燕尾
燕尾
犬塚
犬塚
網野
網野
犬塚
犬塚
網野
犬塚
網野
網野
燕尾
燕尾
犬塚
犬塚
網野
網野
燕尾
燕尾

そうして一通り三つの屍体を調べたが、バラバラであるということ以外に新しい発見はなかった。それぞれ死因はわからない。死亡推定時刻も、わたしの検視能力では判断できない。しかし派手（はで）に出血した様子はなく、血だまりがシーツを赤黒く濡らしている程度なので、死後に切断されたと考えていいのではないだろうか。
　切断に用いられた凶器は、あの刈り込みバサミと考えていいだろう。切断作業はいずれもベッドの上で行なわれたとみられる。その証拠に、シーツが破れているところが数ヵ所見つかった。
　わたしはホールに戻り、霧切に報告する。
　もはやわたしは探偵役どころか、安楽椅子探偵に仕える助手といった役回りだった。
「状況は把握できたわ」
　霧切は落ち着いた声で云う。わたしよりも三つも歳下の子が、こんなに冷静でいられることに、わたしは少なからず戦慄を覚えていた。
「あと一つだけ、確認したいことがあるの」
　霧切は催促（さいそく）するように云う。
「今度はなんでしょう、探偵のお嬢さん」
「あのスイッチを押して」
　霧切は壁の一点に視線を向ける。
　そこにはドームを開閉するためのスイッチがあった。
「あっ！　そうか、調べるのを忘れてた！」
　屋根だ。
　もし招かれざる客として、六人目の登場人物がいるとしたら、そいつは三人の探偵を殺したあとで、ドームを開けて建物の屋根に逃げたかもしれない。そして今も、屋根の上にひそんでいるのだ。
　わたしは壁に設置されているキャビネットを開けて、スイッチを押した。
　モーター音とともに、凹面鏡の屋根が開いていく。
　たちまち風と雪が吹き込んできた。深夜を迎えてなお深さを増した闇が、その隙間に覗いて見える。
　ある程度開いたところで、スイッチを止める。
「屋根の上を調べることはできる？」
　霧切は頭に降りかかった雪をぶるぶるとふるい落とすようにしながら云った。
「うーん、ちょっと高いね」
　わたしは腕組みして云う。
　でもわたしなら登れるかも。

わたしはホールの中央に置かれている円卓を引きずって、壁際に寄せた。それから円卓に土足で飛び乗ると、ドームの開いた場所――そこはもともと天井と壁の境目だった――めがけてジャンプした。

届く！

ぎりぎりで届いた指を、壁面のてっぺんに引っ掛ける。ドームはこの縁を左右にスライドして開閉するようになっている。

そのまま身体を持ち上げて、どうにか縁へと這い上がる。

「驚いた」霧切の感嘆する声が聞こえてくる。「すごいジャンプ力ね」

「ふふ……足のバネに関しては自慢なんだ。わたしは垂直飛びの女子高校生記録を塗り替えた女なんだ」わたしは苦心しながら、ようやく屋根の開いた縁に乗ることができた。「でも残念ながら体力がないから、自慢の足をスポーツには活かせなかった。もし何か競技をやっていたら、希望ヶ峰学園に行くことができていたかも……なんてね」

わたしは探偵としての道を選んだ。自慢の足も探偵の能力としてはほとんど関係ない。

でも今日、初めてこの足が役に立った。

わたしは雪の降る闇に眼を凝らし、ぐるりと周囲を見回す。しかし残念ながら、犯人の姿は見当たらなかった。そもそも人が屋根を這い上がったような痕跡すら見受けられない。雪の積もった白い屋根が、闇に星型を描いているだけだ。

わたしは闇夜に白いため息を残して、その場から室内に飛び降りた。

スイッチを押して、ドームを閉じる。

「やっぱりわたしたち以外に誰もいないんだ」

わたしは制服についた雪を払いながら云った。

「そうね」霧切は肯く。「屋根には誰もいない、ということがわかっただけでも、結お姉さまの行動には意味があったわ」

「そう、それはよかった」わたしは皮肉っぽく云う。「誰もいないってことは、ますます君が怪しいってことだよ」

「まだそんなことを云っているの」

霧切は目を細めて云う。

「もう充分確認しただろ。ここの建物にはわたしたち以外誰も出入りしていない。五人のうち三人死んだ。殺したのはわたしか、君」

「いいえ、確認できたのは状況だけ。結お姉さまはまだ充分に推理していないわ」

霧切はわたしをまっすぐに見上げて云う。それはいたいけな中学生の顔であり、紛れもなく探偵の顔

だった。
「初めから一つずつ整理しましょう、お姉さま。そうすればきっと、真犯人が見えてくるはずだから」
　霧切は安楽椅子の背もたれにゆったりと背中を預けて云った。
「ちょっと待ってよ——君は真犯人とやらが誰なのか、わかっているの？」
「どうかしら」霧切はとっておきのミステリアスな笑みを浮かべて云った。「さあ、話を続けましょう。事件の初めから思い出すの」
「初めから？」
「そう、まずは結お姉さまたちがいつ、睡眠薬(すいみんやく)を飲まされたのかということから」
「ああ、そういえば！　挑戦状に気絶薬と書かれているね」
「いいえ、睡眠薬と気絶薬は別。気絶薬というのは私がハンカチで嗅がされたものだと思う。それとは別に、結お姉さまたちは気づかないうちに睡眠薬を飲んでいたのよ」
「一体、いつの間に？　これでもわたしは用心して、冷蔵庫のものにはいっさい手をつけなかったのに」
「ワゴンの中で、缶コーヒーを飲んでいなかった？」
「あ！」わたしは思わず声を上げる。「駅を出発する前に配られた缶コーヒー！　まさかあの中に遅効性の睡眠薬が入れられていたの？」
「ええ。それ以外に考えられないわ」
「やっぱりそうか……ということは、犯人はあの運転手？」
「いいえ、運転手は山道を引き返した。彼がこっそりと戻ってきて、この建物に出入りしたとは考えにくい。第三者の出入りがないことを確認したのは、結お姉さま自身でしょう？」
「そ、そうだね」
「運転手は大江由園に指示されるままに行動していた。缶コーヒーを配ったのも、指示の中に含まれていたのよ」
「あの時からもう犯罪計画はスタートしていたのか……うかつだった」
　あの時点で気づいていれば、犯行を阻止することができたかもしれないのに！
　わたしは唇を噛む。
「睡眠薬はこの建物に到着してから効果が出るように分量を調整されていたと思うわ。挑戦状に睡眠薬のことが明記されていない理由はわからないけど……」
「睡眠薬もひっくるめて、気絶薬ってことなんじゃないの？」
「どうかしら」霧切は考え込むように目を伏せる。「ともかく私たちは全員、一時的に気を失うことになった。バラバラ殺人はその間に行なわれたと考えられるわね」

さぞ殺人は捗(はかど)ったことだろう。
そんな状況でも、わたしと霧切の二人が殺されなかったことには、やはり意味があるとしか思えない。霧切の話では、わたしが探偵役で、彼女が犯人役として生かされたということらしいのだけど……

「ここに到着してから、私たちは屋内を念入りに調べたわね」霧切が室内を見回しながら云う。「その結果、ここには牙柳一郎も大江由園も、その他の人間もいっさい存在しないことがわかった」

「うん」

「そして私たちが気絶状態から目覚めたあとで、建物内を調べてもやはり、第三者の存在はなかった。何者かが出入りした痕跡もない。これは結お姉さまが自信をもって証明するわね？」

「もちろん、念入りに調べたうえで、そう結論づけたんだ」

「この建物内に存在したのは、私たち五人だけ」

「そう、間違いない」

わたしは力強く肯く。

「犯人がこの状況を作ったのは、結お姉さまに間違った推理をさせるため。そう考えて間違いないわ。だって結お姉さまは、必然的に私を犯人として告発するでしょう？」

「君以外……考えられない」

「そう、それなら反論させてもらうわ」霧切は大人ぶった口調で云う。「犯人は私ではない。私と、結お姉さま以外の人間が犯人よ」

「わたしたち以外が犯人って……ここにはわたしたち五人しかいなかったって、君も認めるんでしょう？」

「ええ」

「それなのにわたしたち以外に犯人がいるというの？」

「ええ」

「まさか――死んだ三人の中に犯人がいるの？」

「そう」

「か、考えられない！　どう考えても無理だ。三人ともバラバラにされているんだよ？　死んだふりが可能なレベルじゃない。それとも三人のうち一人が自殺だったとでも？　どの屍体も、切断されたパーツが挿げ替えられている時点で、その可能性は消える。死んだ三人以外の誰かが、パズルで遊ぶみたいにパーツを並べ替えたのは間違いないんだ」

「そうね、問題はそれが誰なのかということ」

「わ、わたしじゃないよっ」

「わかっているわ。まずはバラバラ屍体の謎について考えるべきね。どうして屍体は十四個ものパーツに

切断されていたのか。そして何故、パーツごとに挿げ替えられていたのか」
「そんなの理解できるはずがない。どう考えても異常者の猟奇（りょうき）趣味でしょう？　それともバラバラにして並べ替えることに、合理的な理由でもあるというの？」
「ええ、あるわ」
「嘘でしょ、あるはずがない」
「いいえ、冷静になって考えてみれば、すぐにわかることよ」
「冷静に……冷静に……」
　霧切は確か、屍体をバラバラにするのは持ち運びやすくするためだと云っていた。今回のケースでもそれがあてはまるのだろうか。
　……持ち運ぶ？
　一体、何処から何処へ？
　ふと、わたしは思いつく。
「すべての謎を解決するたった一つのシンプルな答えがあるでしょう？」
　霧切が云う。
　死んだ人間の中に犯人がいるのだとしたら――
　死んだふりでもなく、自殺でもないとしたら――
　身代わりとなる屍体を用意する！
　身代わりの屍体をどうする？
　外部から運び入れるしかない。
　どうやって？
　もちろんバラバラにして。
「誰かがこの建物に、身代わりとなる六人目をバラバラにして持ち運んだというの？」
「そうとしか考えられないわ」
「でも……まさかそんなこと……だって、わたしは屍体の顔を確認しているんだよ？　死んでいたのは三人とも、間違いなく、わたしが今日出会った三人の探偵だった。死んでいたのは網野さんだったし、燕尾さんだったし、犬塚さんだった……」
「その中の一人がニセモノだったということね。犯人はあらかじめ探偵を殺してバラバラにしていた。そして自分は、その探偵そっくりの格好で私たちの目の前に現れた……」
「ニセモノだなんて……！　いくらなんでも無理があるでしょ？　だってみんな写真つきのカードを見せていたじゃない。他人そっくりに化けるなんて、それこそ変装名人の探偵でもなければ無理よ。それとも、

犯人も実は探偵だったとか？　しかも変装上手だったなんて、都合のいいロジックだ」
「ううん、違うの。化けるのはもっと簡単よ。探偵図書館に行って、自分にそっくりな探偵を選び出せばいいだけだから」
「あ……そっか！　もともと自分に似ている探偵なら、ニセモノとして化けることができる！」
　探偵図書館には六万五千人以上の探偵が登録されている。自分に容姿が似通（にかよ）っている探偵を一人、見つけ出すことは難しくないかもしれない。
　犯人は事前にその探偵を殺害していた。そして探偵図書館の登録カードを奪い、わたしたちの前でその人物のように振る舞った……
　しかも犯人はバラバラにした屍体を、わたしたちに気づかれないようにこの場所まで運んだ。招かれざる六人目の客は常に、わたしたちと一緒に行動していたのだ。
「でも……バラバラにして持ち運ぶのはいいとして……何故犯人は屍体のパーツを並べ替えたんだろう。まるで意味があるようには思えない」
「いいえ、犯人にとって切実な理由があったの」
「切実な理由……？」
「それは——第一に、バラバラにすればコンパクトに収まるという理由。これはなんとなく想像つくでしょう？」
「……そうね」
「第二に、死斑（しはん）の問題。人は死ぬと、体内の血液が循環（じゅんかん）せずに、重力に従って伏せている面に沈殿（ちんでん）する。それが溜まってくると、斑点（はんてん）状に、あるいは網目状に皮膚（ひふ）表面に浮かびあがって見えるようになる。特に時間が経過すればするほど、死斑は目立つようになってくるわ」
「うん、それくらいはわたしも知ってる」
　けれどまさか中学生から詳細な説明を受けるとは思いもしなかった。さすが『９』ナンバーの探偵だ。吐き気を催（もよお）しそうな話も、平然とした顔のまま続ける。
「犯人はあらかじめ一人、自分の身代わりとなる探偵を殺している。それは当然、私たちがここに集まるより前のこと。つまりその屍体は、他の屍体よりも死後、時間が経過していることになる。もしもこの屍体を、考えなしに自分の身代わりとして置いた場合、死斑の状態から他の屍体と死亡推定時刻に隔（へだ）たりがあることがばれてしまうかもしれない。そこで犯人は、屍体から血液を抜いておくことにした。バラバラの状態なら、比較的簡単な作業かもしれないわね」
「屍体に血が残っていなければ、死斑は発生しない？」
「ええ。そうして死斑が発生しにくい状態にしたのはいいけれど、今度はそのせいで別の問題が発生す

るわ。それは殺害現場の血痕。その屍体が、その場で殺されたように見せかけるためには、血液が足りなすぎる」
「それなら輸血用の血液パックを用意しておくというのはどう？」わたしは思いついて云う。「それとも抜いた血を貯めておいて、あとで使うとか……」
　自分で云っていて気分が悪くなってきた。
　わたしは眩暈を起こしそうになるのを、歯を食いしばって耐える。
「いいえ、その必要はないわ。必要な血液は、現地で調達できるから」
「調達って……」
　他の被害者のことか。
「犯人はいずれにしても、三人分の屍体を用意するつもりだった。あらかじめ一人、そしてこの建物内で二人。この建物内で殺す相手も、もちろんバラバラにしなければならない。自分の身代わりとなる屍体だけがバラバラだったらおかしいものね」
「なるほど……身代わりが露見しないように、他の被害者もバラバラにする……そこまではいいとして、何故パーツを並べ替える必要があったの？」
「身代わりの屍体を並べ替えずにベッドに置いておくと、不自然な状況が発生するわ。それがさっき云った、血液の問題ね。身代わりの屍体だけが、明らかに出血が少ない。シーツも汚れていない。その場で殺害された屍体のようには全然見えない」
「ああっ……だから、実際にその場で殺害した屍体のパーツを交ぜることによって、三人全員がベッドの上で切断されたように見せかけたということね！」
「そう。そうすることで、切断面からの出血や、シーツの血痕に不自然さがなくなる。実際に犯人は、三つのベッドで、均等に切断作業を行なったと思うわ。切断場所はまさにここであるというリアリティを演出するためにね」
「確かに……シーツに傷が残されていた。疑いもしなかったよ」
　屍体の切断面をそれぞれ密着させるように配置していたのも、出血のないパーツが交じっていることをごまかすためだったのかもしれない。
「どう？　結お姉さまにもバラバラ屍体のトリックがどういうものだったのか、把握できたかしら」
「うん……なんとか……」わたしは曖昧(あいまい)に肯く。「まとめてみるから、君も聞いててね……まず犯人は自分の身代わりとなる屍体を持ち運ぶために、バラバラにした。さらに事前に殺害した屍体だとばれないように、血を抜いて、死斑が出ないようにした。そしてこのシリウス天文台でわたしたちを気絶させたあと、二人の探偵を殺害し、バラバラにする。その際に、身代わりの屍体が交じっていることが発覚しないよう

に、切断したパーツを入れ替え、不自然さを解消した」
　これでいい？　と尋ねるように霧切の顔を覗き込むと、彼女は小さく肯いた。
「でも肝心の犯人は何処にいるの？」
　わたしは周囲を見回す。犯人は今も固唾(かたず)をのんでわたしたちの推理に耳を傾けているのだろうか。
「建物を出入りした痕跡はない――ということは、犯人はまだこの中にいるわ」
　霧切は背もたれから身体を起こして、少し警戒するように身構えた。
「建物の中はさんざん探したじゃない。犯人は何処にもいなかった。それこそ屋根の上まで探したのに……」
「犯人が屍体を何処に隠していたか考えればおのずと答えは見えてくるわ。犯人がそこから屍体を取り出したことで、中身は空っぽになったはず。そして今度は犯人自身がそこに隠れればいい。ね？　ここまで云えばわかるでしょう？　結お姉さま」
　犯人が屍体を何処に隠していたか――
　犯人はどうやって屍体をこのシリウス天文台に運び入れたか……
　そう、犯人は身代わりとなる屍体を細切れにしてバッグに収納し、ここまで運んだ。誰がどんなバッグを持っていたか思い出せばいい。
　網野はサラリーマンが持っていそうな書類鞄。
　燕尾は小さなボストンバッグ。
　そして犬塚は……大きなキャリーバッグ。
　それはさっき、霧切に命令されて、わたしが犬塚の部屋からホールまで運んできた。やけに重かったのを覚えている。
　もしもそのキャリーバッグに、もともと屍体が入れられていたとしたら……
　そのバッグを持っていた人間が犯人。
　犯人は犬塚甲！
　いや、正確には『犬塚に化けていた誰か』ということになるだろうか。
　彼は身代わりとなる屍体をキャリーバッグに詰めて、彼自身は犬塚のふりをして、何食わぬ顔でわたしたちと一緒にシリウス天文台までやってきたのだ。考えてみれば、わたしに披露してみせた観察眼とやらも、もともとわたしのことを調べ上げていただけのことだったのかもしれない。
　そして彼は、屍体を並べ終わったあとで、自らキャリーバッグの中に隠れた。
「わかったよ、霧切ちゃん。さんざん疑ってごめん」
「ようやく疑いが晴れたかしら」

「うん——犯人はここにいる」
　わたしは助走をつけるために、その場から少し後ろに下がる。
「犯人はお前だ！　犬塚！」
　わたしはキャリーバッグに飛び蹴りをかまして、見事にそれを吹っ飛ばしてやった。
　すぐに追い打ちをかけるように、横転したバッグを踏みつける。
　そして閉じられているファスナーに手をかけ——
　開けた。
　すると中から犬塚が——
　出てこない。
　バッグの中には、ウイスキーやら、ウォッカの瓶やら、様々な酒が詰め込まれていた。
「……え？」
　どういうこと？
　ここには犯人がひそんでいるはず……
「何やっているの？　お姉さま」
　霧切は呆れたような目でわたしを見ていた。
「いや、だって……犯人は身代わりとなる屍体をバラバラにして、ここまで運んだんでしょ？　だったらどう考えても、一番大きなバッグを持っていた犬塚が犯人でしょ。だって他の二人のは、とても屍体を運べるようなバッグではないし……」
　あれ？
　どういうこと？
　どう考えても書類鞄やボストンバッグには、屍体を詰め込むことはできない。けれど本命と思われたキャリーバッグには、酒瓶が詰められているだけだった。思い返せば、犬塚自身、その中身について酒だと云っていたような気がする。
　ということは……誰も屍体を運んでいない？
　わたしは思わず霧切響子に疑いの目を向ける。
　今までの推理は、わたしを欺くための嘘だったのではないだろうか？
「まさかまだ私が犯人だって思っているのかしら」
　霧切はわたしの心を見透かしたように云った。
「だって……君の推理はでたらめだったじゃないか！　屍体をバラバラにして運んだって？　一体誰がどうやって？　屍体を一体ぶん運ぶには、最低でもこのキャリーバッグくらいの大きさが必要でしょ？　でも

実際にここに入れられていたのは酒瓶だけだった。誰も屍体を運んでないんだ」
「私の推理はでたらめではないわ」霧切は顔色一つ変えない。「そもそも考えてもみて。バラバラにした屍体をキャリーバッグに詰めることはできたとしても、犬塚さんのような身体の大きな人が、このバッグに入れると思う？」
「……う、確かに無理だ」
「バッグの酒瓶は、確かに犬塚さんが持参したものだと思う」
「じゃあ誰がどうやって、身代わりの屍体をここに運んだっていうの？」
「犯人が普通に車で運んだのだと思うわ」
「は？」
「まだ雪の積もっていない午前中にでも、先にここまで車を走らせればいいでしょう」
「あ……盲点（もうてん）だった」
「身代わりとなる被害者を、私たちより先に呼びつけておいたのではないかしら。そして殺害し、バラバラにする。ただし殺害現場はここではなかったと思う。だって、もしここで事前に殺害が行なわれていたとしたら、痕跡を残してしまう可能性があるから。その場合、探偵である私たちの誰かが気づくかもしれないもの」
「そうか……でも犯人がわたしたちより先に、ここに屍体を運び込んでいたという推理には無理があるんじゃない？　わたしたちはここを訪れてすぐ、念入りに室内を調べて回った。その時には屍体なんて何処にもなかったんだよ？」
「屍体は巧妙（こうみょう）に隠されていたのよ」
「隠されていた……って、何処に？　だからさんざん調べても屍体なんてなかったし……外の雪の中にでも埋めておく？　それだと痕跡が残るよね」
「答えは簡単よ」霧切は短く云って、続ける。「でも——真実を話す前に一つ、お願いがあるの」
　霧切はわたしを見上げて云う。
「何？」
「私が犯人ではないということを信じてほしい」
　霧切の表情はいつになく真剣だった。
　そして初めて見せる、懇願（こんがん）するような顔つきをしていた。
　そりゃあ……信じたいけど……
　すべて彼女の嘘だったら？
　彼女の犯行は、最後にわたしを殺すことで完成するのだとしたら？

同情だけでは彼女を信じることはできない。

　けれど彼女がこの混沌を切り払うだけの論理的な推理力を持っていることを、わたしは半ば信じ始めている。

　彼女には探偵としての才能がある。

「もし私を信じてくれるなら、この右手のリボンをほどいて。右手だけでいいわ」

　一体何をするつもりだろう。

　わからない。

　けれどわたしは彼女を信じよう。

　探偵として。

　――わたしは彼女の右手の拘束を解いた。

「ありがとう」

　その時初めて、霧切はわたしにかわいげのある笑顔を見せた――ような気がする。表情の変化に乏しいから、気のせいだったのかもしれないけれど。

「それじゃあ、網野さんの鞄を取って」

　霧切は要求する。わたしは云われるまま、床に置いてあった書類鞄を霧切に手渡した。彼女はそれを膝の上に載せた。

「それから犬塚さんのキャリーバッグをここまで持ってきて」

「わかった」

　蹴っ飛ばしたキャリーバッグを安楽椅子の前まで運ぶ。

「これでオーケー？　探偵のお嬢さん」

「ええ、完璧だわ」

　霧切はわずかに頬を紅潮させているようだった。

「で、わたしたちがここを訪れた時点で、本当に何処かに屍体が隠されていたの？」

「ええ。思い返せば、誰も調べなかった場所があるの。無理もないわね。その時点で、まさかバラバラ屍体があるなんて考えもしなかったのだから」

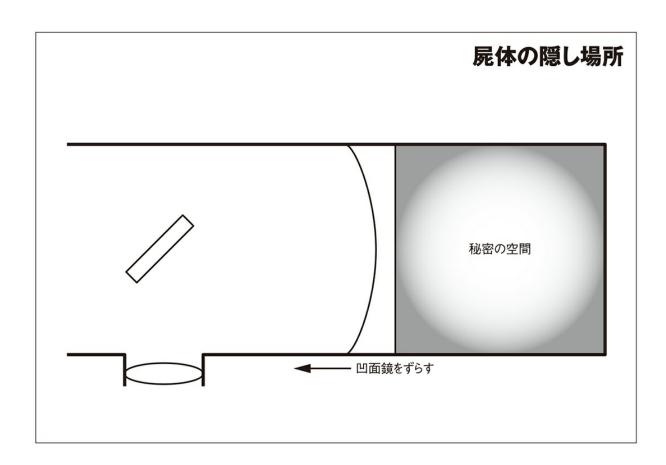
　いや――挑戦状を受け取っていたわたしなら、予測することは可能だった。わたしがそのことに気づいていたらと思うと悔やまれる。

「一体、それは何処なの？」

「天体望遠鏡の中よ」

「えっ……望遠鏡の……中？」

「五つの部屋にそれぞれ一つずつ設置された口径２００ミリのニュートン式反射望遠鏡。その構造を理解すれば、屍体の隠し場所が見えてくるはず」
「無理だよ、無理。天体望遠鏡の中に屍体なんか入るはずがない。入ったとしても、すぐに見つかっちゃう。ただでさえ、中身が筒抜けの構造だったし……」
　わたしはふと、犬塚が反射望遠鏡について講釈していたのを思い出す。大きな筒の奥には凹面鏡があって、これが反射鏡を経て対物レンズへと像を結ぶ。
「ああっ、まさか！」
　もし奥の凹面鏡が、手前にずらされていたら？
　天体望遠鏡の筒の中に、秘密の空洞ができるのではないだろうか？

屍体の隠し場所
秘密の空間
凹面鏡をずらす

「わかったかしら。直径２００ミリの筒なら人の頭も入るわ。男性の頭部の幅は、せいぜい十六センチ程度。それぞれ三分割した四肢も、それほど幅をとらずに収納できたのではないかしら。犯人は頭部、左腕、右腕、左足、右足の五つのパーツを、五つの天体望遠鏡の中に分割して隠していたのね」
「あの中に……屍体が入っていたなんて……でも確かわたし、レンズを覗いている」
「まともに像は映らなかったはずよ。凹面鏡の位置がずらされたことで、焦点がずれているはずだから」
「うん、ほとんど何も見えなかった」
「天体望遠鏡に詳しい人なら、筒の中を覗いた時に、凹面鏡の位置がおかしいことに気づいたかもしれない。でも私たちの中に、それに気づく人はいなかったわね」
　犬塚はある程度詳しいようだったけれど、その事実に気づくことはなかった。記憶が古すぎたせいだろうか、あるいは事件のことなど頭になかったのだろうか。
「霧切ちゃんは気づかなかったの？」
「ええ、最初に部屋に入った時は、ちらっとレンズを覗いただけだったから。調節されていないレンズはこんなものだろうと思ったくらい」
「君の――例の能力は効かなかったのか？」
「死神の足音が聞こえるのは、危機が迫っている時だけだから」
「すでに屍体になっている相手じゃ仕方ないか」わたしは深いため息を零(こぼ)す。「あれ？　でも胴体は？　六つ目の一番大きなパーツは何処に隠されていたの？　天体望遠鏡はもうないし……」
「胴体はある場所に隠されていた――そして今、そこには犯人がひそんでいるわ」
「えっ、犯人？」
「そう」
「でもいよいよ隠れる場所なんて何処にもないと思うんだけど……」
「いいえ、実はまだあるの」霧切は何処か楽しげな口調で云う。「けれど考えてみて。その場所は胴体がかろうじて入るくらいの小さな空間。たとえ屍体をどかしたとして、そこに隠れることができるのは、とても小柄な人……」
「そうだね。でもここを訪れた人間たちの中に、小柄な人なんていなかった。一番小さいのは君だろ」
「ううん、実際には私よりも小さい人がいたのよ」
「いなかったよ、そんな人」
「私の目には確かに、その人はいたけれど」
「君は一体、誰を見ていたんだ？　というか、そいつは今何処に隠れているんだ。ここに引っ張り出してくればはっきりする。早く教えてくれ」

「そうね……わかったわ」
　霧切はそう云うと、右腕を伸ばして、犬塚のバッグから瓶を一本取り出した。そして蓋を開けると、何を思ったのか、自分のスカートの太ももあたりに、酒をぶちまけはじめた。
　たちまち辺りに、きついアルコールのにおいが漂い始める。
「ちょ、ちょっと、何やってるの！」
　彼女の腰から下は酒でびしょびしょだ。
　次に霧切は網野の鞄から、ライターを取り出した。
「霧切ちゃん！」
「アルコール度数九十六度のウォッカね。これだけ布に浸み込ませれば簡単に火がつくと思うわ」
　霧切は無表情で右手にライターを持つ。
　その行動が、わたしには狂気じみているように見えた。
「何考えてるのっ」
「火をつけるのよ」
「やめなさい！　なんの意味があってそんなこと……」
　もし彼女がライターのヤスリを回したら、その瞬間に気化したアルコールに引火してしまうかもしれない。そうなればアルコールの浸みた彼女の服はたちまち燃え上がるだろう。火傷で済む話ではない。もしかしたら焼死することだって……
　彼女がどうしてそんなことをするのか、わたしにはまるで意味がわからなかった。
「私は本気よ。犯人を告発する時には命を懸ける。そうお祖父さまから教わっているから」
「何云ってるの、霧切ちゃん、やめて！」
「そして私は真実のためなら命を投げ出す覚悟がある」
　ぞっとするような冷たい声で彼女は云った。
　その時の彼女の瞳は——もはや死を見据えて灰色に染まっていた。
　霧切の親指が、ライターのやすりにかかる。
「やめて！」
「五秒後に火をつけるわ」
　五……
　四……
　わたしは彼女に近づく。
　彼女の右腕を蹴って、ライターを弾き飛ばすしかない。

三……

「お姉さまは黙って見ていて」

牽制(けんせい)された。

二……

わたしは思わず足を止める。

一……

「降参だ」

突然、男の人の声が何処からともなく聞こえてきた。

わたしはきょろきょろと周囲を見回す。

誰もいない。

「お前の推理は正解だ。俺の負けだ。どうせもう云い逃れはできないだろう」

一体誰の声だ？

「それじゃあ、そこから出てきて。燕尾さん」

霧切は左腕を手錠で繋がれたまま、椅子から立ち上がると、振り返って云った。

まさか……この小さな安楽椅子の中に？

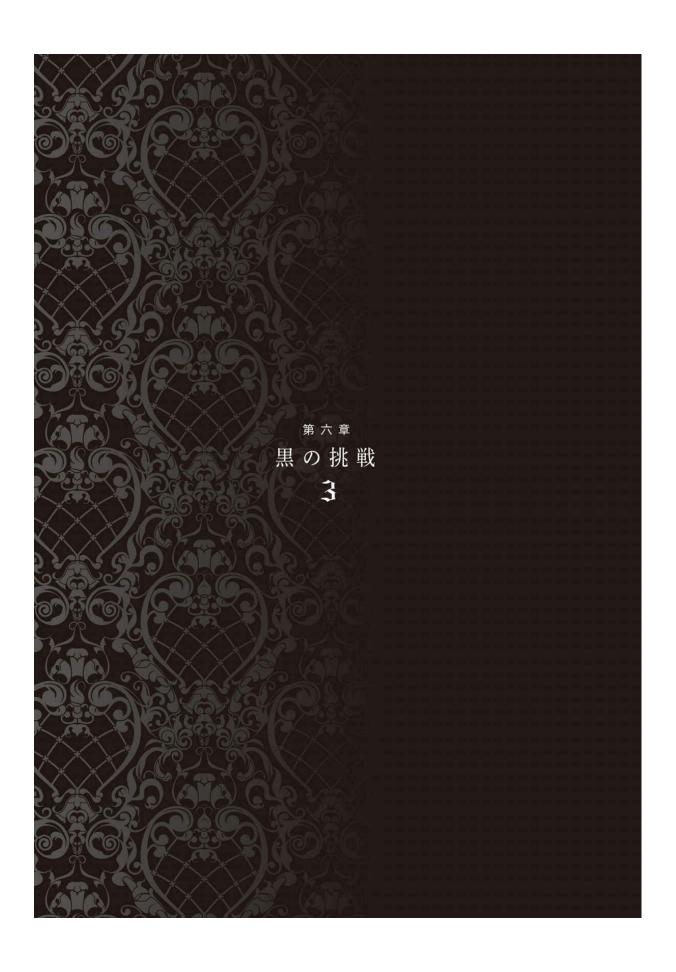
やがてもぞもぞと椅子が動きだし……クッションマットの背面のファスナーが開いて、タンクトップ姿の燕尾――のニセモノ――が姿を現した。

いくらなんでも大人の男の身体が、そんな小さな椅子の中に収まるはずがない……クッションマットの中は異次元に繋がっているのか？　そう疑いながら、燕尾をよく見ると……彼の両足は太ももの途中から先が存在しなかった。

「昔、火傷で両足を失ってね。今でも痛むんだ」

第六章

黒の挑戦

3

目の前の出来事を把握するのに、わたしは多くの時間を必要とした。
床に這いつくばっている男が、あの燕尾？
わたしにとって燕尾はバラバラにされて死んだ男という認識だけれど、外見的にはどう見ても目の前の男こそ、燕尾なのだった。
「どういうことなの？」
「見ての通りよ、お姉さま。この人が真犯人なの」
霧切はライターを構えたまま云う。
床に這っている男は、右手に小さなナイフを握っていた。しかし彼がそれを凶器として振り回すことは難しいだろう。彼には両足がないからだ。
「いつから気づいていた？」
男は顔を上げて、霧切に尋ねる。
「義足のこと？」霧切は首を傾げるようにして訊き返す。「あなたが最初にワゴンを降りた時から気づいていたわ。でもそれが事件と結びつくまで、時間がかかったの」
「義足だった……んですか？」
わたしは恐る恐る床の男に尋ねる。
男は肯いた。
思い返せば、確かに燕尾は足を引きずっていた。わたしは古傷のせいだと思い込んでいた。
「取り外した義足は、そっちの部屋の天体望遠鏡の中に隠してある。もってきてもらえると助かるが……そうはいかないよな」
男は苦笑した。
「あなた……一体誰なんですか？」
「朝倉 忠（あさくらただし）。世にも不幸な負け犬さ」
知らない名前が出てきた。
けれど見た目は燕尾椎太だ。サングラスをかけてはいないが、間違いなく同じ顔だ。
「あの……朝倉さんが三人を殺したんですか？」
「そういうことだ。しかし……まったくの完敗だよ」
朝倉の顔には、すがすがしい笑みが浮かんでいた。何もかも諦めきった時、人間はそんな表情になれるのかもしれない。

「事件のストーリーは、その子が推理した通りだ。俺は大江由園を名乗り、五人の探偵に依頼状を送りつけた。依頼状はお前らを誘い出すのと同時に、挑戦状の存在をぼかすためのカムフラージュだった。ちなみに五人の中には本物の燕尾椎太も含まれる。ただし燕尾宛ての依頼状には、集合時間を少しだけ早めに書いておいた」
「燕尾さんを先に呼びつけて、殺害し、バラバラにしたんですね？」
　わたしは尋ねる。
「その通りだ。俺は燕尾の屍体を天体望遠鏡と、この椅子の中に隠しておいた。ま、ばれる可能性は常につきまとっていたが、なるべくそうならないように俺も気を配っていた。たとえば犬塚と一緒に部屋を調べて回る際には、なるべくあいつに天体望遠鏡を触らせないようにしてな。俺が燕尾として、お前らの中に交じっていたからこそ、ある程度お前らの目を屍体から逸らすこともできたというわけだ。なかなかよくできたトリックだと思ったんだがな」
　事実、わたしたちは誰ひとりとして、この建物に五人の他にもう一人、屍体となった男がいたことに気づかなかった。
「ああ……新しい人生と1億2000万は夢と消えたか」
　朝倉は天を仰ぐようにして云う。
　――彼は何を云っているのだろう？
「まさか中学生の新人探偵にやり込められるなんて思いもしなかったぜ。役に立ちそうにない探偵を犯人役に選んだはずだったのに……まさかそいつに真相を暴かれるなんてな」
　霧切響子――彼女が本当にすべてを暴いてしまった。
「君は一体いつ頃から、自分の座る椅子の中に犯人がひそんでいるって、気づいていたの？」
　わたしは尋ねる。
「最初から候補の一つだったわ」
「最初から？」驚いたのは朝倉の方だった。「俺は身じろぎ一つしなかったし、呼吸さえ気取（けど）らせなかったはずだぜ」
「ええ、それについては完璧だった。気配一つ感じられなかったわ。でも論理的に考えて、この椅子の中に犯人がひそんでいる確率は高かった」
「何処にそんな論理のきっかけがあったのか、わたしにはさっぱり……」
「たとえば結お姉さまの手錠の件があるわ」
「手錠？」
「簡単に外すことのできる手錠を、犯人がわざわざ結お姉さまの腕にかけたのは何故か。そして犯人が

その鍵を私の手に握らせたのは何故か」

「それは当然、君に疑いを向けさせるためだろう？」

「もちろんそれもあるけど、もう一つ重要な理由があったのよ。それは、その手錠によって、私を椅子に拘束させること。私を犯人だと思いこんだ結お姉さまは、まず安全を確保するために、私を拘束することを思いつくでしょう？　その際に、どんなふうに手錠を使うか。自分がベッドに拘束されていたという刷り込みから、何処かに手錠を繋いで拘束することを思いつく。手近なところにあるのは、円卓と椅子。円卓の脚に手錠をかけても、円卓を持ち上げたらすっぽ抜けてしまう。それなら椅子しかない」

「そうか……君を椅子に座らせることで、わたしの意識から、犯人の隠れ場所としては除外される――」

「そういうことよ」

「最初からわかっていたなら、もっと早くわたしに主張してくれればよかったのに！」

「さっきも云ったように、最初は候補の一つでしかなかったの。だから結お姉さまに、他の可能性を潰して回ってもらったのよ」

「そっか……でも最初に椅子の中を調べていたら終わっていたことじゃない？」

「その場合、最悪の結果になっていたかもしれないわね」

　霧切は冷めたような目つきで、朝倉を横目に見る。

　わたしはあらためて、朝倉の握っているナイフに気づいて青ざめた。

　まさか……朝倉はそのナイフをずっと霧切の背中に当てていたのではないだろうか。もちろん彼女にはわからないように。もし自分に不利な状況になれば、そのナイフを突き出す覚悟をもって――

　しかし霧切はそのことに勘付いていた。いや、彼女流に云うなら、『論理的にわかっていた』というべきだろうか。あるいは『死神の足音が聞こえていた』のかもしれない。

　彼女が最後に、椅子に座ったまま自らに酒を浴びせかけたのは、ナイフを当てられていて動けなかったせいだろうか。それとも彼女なりの覚悟をみせようとしたのか。

　おそらくその両方だろう。

　わたしの知らないところで心理戦は行なわれていた。

　わたしは知らず知らずのうちに、霧切にとても残酷なことを強いていたのだ。

「あの……なんていうか……本当にごめん、霧切ちゃん」

「そういうのはあとにしましょう、お姉さま。それより、手錠を外してもらえるかしら」

「あ、そうだね」

　わたしは急いで霧切の左手と安楽椅子を繋いでいる手錠の鍵を外した。霧切は解放された手首を気づかいながら、椅子から離れる。

「一体どうしてこんなことしたんですか？」わたしは震える声で、朝倉に尋ねた。「本当に推理ゲームをわたしに挑むためだけに、こんなことを……」
「違う」朝倉はわたしの言葉を遮るように云った。「ゲーム自体は俺が望んだことじゃない」
　まくしたてるように云って、朝倉は突然沈黙した。
　それは云いたいことをぐっと呑み込んでこらえるような沈黙だった。
「やはりそうなのね」
　霧切は何かに気づいたように呟くと、頬にかかった髪を払った。
「何？　どういうこと？」
「朝倉さんはゲームのマスターではなく、プレイヤーでしかない……ということね」
「え？　このゲームを仕組んだやつが他にいるの？　一体誰？　真犯人の真犯人？　死んだ人たちの中にいるの？」
　まさかまだ入れ替わりが？
　朝倉はゆるゆると首を横に振ると、語り始めた。
「ゲームを仕組んでいる連中が何者なのか、俺にもわからない。俺は連中のゲームに乗せられただけだ。たまたま連中の用意したものが、俺にとって人生をなげうってでも手に入れたいものだったというだけのこと……」
「あなたには説明する義務があるわ」霧切が果敢（かかん）にも朝倉に詰め寄る。「きっと今までにも、このゲームは様々な場所で密（ひそ）かに行なわれてきたんでしょう。そしてこれからも続く。あなたのような被害者をこれ以上出さないためにも、あなたの協力が必要になるわ」
　被害者？
　協力？
　わたしには何がなんだかわからない。
「結お姉さまに宛てられた挑戦状には、それぞれの項目に数字が書かれていたでしょう」霧切がわたしの方を向いて説明する。「あれはきっと、そのまま値段を示しているのね」
「値段？」
「わかりやすく云えば——トリックの値段。朝倉さんはこの事件に必要な場所、凶器、トリックをゲームマスターから、あの値段で購入したの」
「ど、ど、どういうこと？」
「もともと何も持たない俺にとっちゃ、それは探偵と戦うための武器みたいなもんだった」朝倉が口を開いた。「ロールプレイングゲームに登場する勇者は、魔王を倒すために武器屋で武器や防具を購入して

強くなっていくだろう？　俺は連中から、現実の金で、探偵を倒すための不可能犯罪を買ったというわけだ」

　このシリウス天文台で起きたバラバラ殺人は、何者かが販売したものだったのか？

　そんなことが行なわれているなんて——

　そもそも何の理由があって、朝倉はそのゲームに乗ったというのだろう。もし探偵に勝利すれば、賞金みたいなものが出るのだろうか。

「ふっ……」朝倉は床を見つめて、小さく鼻で笑ってから、顔を上げた。「どうせ俺はもう終わりだ。そうだな、洗いざらい喋ってやるよ。これを見て笑ってる連中の顔を、青ざめさせてやるのも悪くない。俺の人生を弄びやがって……震えてろ！　クソどもが！」

　朝倉はナイフを持った方の手で、中指を立てると、何もない宙に向けて威嚇（いかく）した。彼の視線をたどってみたが、その先にはもちろん誰もいなかった。

「最初に……そうだな、俺の足がこんなことになった出来事から話そう。あまり時間はない。手短に話すぞ。よく聞くんだ。お前らには連中にとっての脅威になってもらわなきゃならない。いや——俺みたいな被害者にとっての希望か……」

　朝倉は自身の過去に起きた連続放火事件について語り始めた。彼は事件の被害者であり、両足は火傷の影響で切断を余儀なくされたものらしい。

　事件は容疑者の自殺ということで片付いた。しかしある日、彼の前に謎の老人が現れる。老人は事件の真犯人を教えるとささやいてきた。

「俺の家族を奪い、俺をこんなみじめな姿にしたやつが、罪に問われることなくのうのうと生きている。そんな現実を許すことができるか？　できるはずがないね。誰にもできるはずがない」

　老人は真犯人を教える代わりに、朝倉にある条件を提示してきた。

　それがこの殺人事件だ。

「連中はおそらく、俺のように復讐の火種を抱えている人間を見つけては、殺人をそそのかしているんだろう。その一部始終をショウとして、金持ちどもに提供しているんだ」

「そんなことって……本当にあるんですか？」

「お前さんが昨日から今日にかけて体験したことが何よりの事実さ」

「あなたの云う『連中』というのは、何者なの？」

　霧切が尋ねた。

「老人は『犯罪被害者救済委員会』と名乗っていた。やつは救済だなんだとスローガンを何遍（なんべん）も口にしていたが、結局は虫唾（むしず）が走るような連中に提供するための娯楽なんだ。もちろん……俺はそんなこと

はわかっていて、このゲームを始めた。確かゲームそのものを連中は『黒の挑戦』と呼んでいたな。同様のゲームは今までに何度も行なわれてきたらしい」
「どうしてそこまでわかっていて……犯罪に手を染めたんですか。他にもっと何か方法が……」
　わたしは動揺しながら云う。
「綺麗ごとはよせ。少なくとも俺には、連中の言葉が確かに救済であるかのように聞こえたんだ。人生をやり直すための……」
　朝倉は『黒の挑戦』の概要を、わたしたちに包み隠さずすべて話した。
　挑戦状が開封されてから１６８時間経過するまで、犯人として告発されなければ、彼はトリックなどの購入費用として提示した金額をそのまま受け取ることができ、なおかつ別人として新しい人生を歩む権利を得られるはずだったという。
　その試みが失敗したのは気の毒だけど……彼は今や殺人者だ。彼は結局、自分が憎み続けた相手と同じところに落ちていった。
　あまりにも虚しい結末だ。
「終わったぞ！」
　突然、朝倉は宙に向かって声を上げる。
　さっきから彼は誰に話しかけているのだろう？
「もうゲームオーバーだ。とっとと警察をここに呼べ！　見てるんだろう？」
「一体、誰に話しかけているんですか？」
「これを見ている連中だよ」
「見ている……？」
「さっき云っただろう。『黒の挑戦』はショウとして放送されている。録画かライブかは知らないが、少なからずモニタ越しに俺たちを眺めている連中がいるはずだ」
「まさか……監視カメラが何処かにあるんですか？」
　わたしは愕然（がくぜん）として周囲を見回す。
　カメラらしきものは何処にも見当たらない。
「ああ、きっと極小レンズのカメラが何処かにたくさん仕込まれているんだろう。俺もさんざん探し回ったが、一つも見つけられなかった」
　今この瞬間も見られている……
　わたしは急に寒気を覚えて、身体を抱いた。
「ところで……」霧切はいつもと変わらない冷めたような表情で話を続ける。「あなたの復讐すべき相手

は誰だったのかしら」
「犬塚だ」
「い、犬塚さん？」
　わたしは尋ね返す。
「あいつが……あのクソ野郎が連続放火事件の真犯人だったんだ」
「でも……犬塚さんは探偵ですよ？」
　しかもクラス『３』まで到達している探偵だ。そこまでクラスを上げられるのは、並の探偵ではない。それこそ積極的に事件を解決し、犯罪と闘ってきた証拠ではないか。
　そんな探偵が罪を犯(おか)すはずが……
「探偵は罪を犯さないとでも思っているのか？　探偵は全員が英雄や聖人だとでも思っているのか？　それならその考えは、今日で最後にするんだな。あいつはとんでもないゲス野郎だ。あいつは……自分で事件を起こし、それを自分で解決するということを繰り返して、探偵として名を上げてきたんだ。要するに自作自演探偵だったのさ」
「嘘……」
　わたしは今まで信じてきたものがすべて崩れ去っていくような気がした。
　探偵は弱きを助ける存在ではなかったのか。
　わたしのアイデンティティが揺らぐ。
　探偵は……ヒーローではないのか？
「探偵図書館ができてからは、ランク上げのためにかなり無茶をやってきたみたいだな。ま、それでもランク『３』が限界だったなんて、ざまあないな。世界は俺に拍手を送ってもいいぜ。この世の害悪を俺が葬(ほうむ)ってやったんだからな。犬塚は……生きてちゃいけない人間だ」
「でも……でも……」
　わたしはそれ以上、言葉を続けられなかった。
「網野さんと燕尾さんを殺したのは何故？」
　霧切が尋ねる。
「お前さんが推理した通り、燕尾は俺に似ていたから身代わりとして採用した。網野は……まあバラバラ殺人のトリックにはもう一人ぶん屍体があった方がいいってことだから、適当に選んだ。ちなみにお嬢さん、お前さんを選んだのは、一番の新人だったからだ。右も左もわからない新人なら、計画通り気の毒な犯人役になってくれると思っていた」
「ふうん、わかったわ」

そう云うと、霧切は腕を組んで、わたしたちに背を向けるようにして壁の近くまで移動した。

「結局……俺は負けたが、復讐を果たすことはできた。そういう意味じゃ、委員会に感謝するぜ。少なくともこの数日間、俺は救われていたのかもしれない。復讐という生きる意味ができたからな。すがすがしい最後だった。だが——それももう終わりだ」

　その時、外からサイレンの音が聞こえてきた。

　事件の幕引きを伝える合図だ。

「モニタの向こうにいる人たちが警察を呼んだのでしょうか」

　わたしは音のする方向を探るように、首を巡らせる。

「いよいよ最後だな」朝倉は手に持っていたナイフを放り捨てた。「しかし火をつけられそうになった時には本当に焦ったぜ。俺はいつでも彼女の口を封じられるように、椅子の中でナイフを構えていたんだ。もしばれた時には死なばもろとも、たとえゲームオーバーでも殺してやろうと思ってた。しかしまさかあんな方法で安全地帯から追い出されるとはな。俺が火に対して恐怖心を抱いているなんてことは知らなかったと思うが……無茶してくれるぜ……」

　朝倉は苦笑して、霧切の背中を見遣る。

　彼女の決意が、朝倉の心を折ったのだろう。

　朝倉の想定としては、わたしが霧切を犯人として告発して終わりだったに違いない。事実、わたしは彼女を疑っていた。一歩間違えば、彼女を手にかけてさえいたかもしれない。その場合、わたしは真犯人である燕尾＝朝倉を告発できず、１６８時間が経過して、彼の勝利となっていただろう。あるいは——最悪のケースを考えると、わたしと霧切は刺し違えて、本当に『そして誰もいなくなった』かもしれない。

　そう考えると——わたしは霧切響子に救われたのだ。

　小さな探偵がこの事件を解決した。

　もはや彼女の才能を疑う余地はないだろう。

　彼女は犯罪と戦う力を持っている。彼女こそ、英雄になれる探偵だ。

　わたしの中で、霧切響子に対する好奇心は、ますます大きくなっていくのだった。

　やがて建物の近くでサイレンが止まり、警察官がわらわらとホールに雪崩れ込んできた。すでに彼らにはかなり詳細な情報が届いているらしく、朝倉はあっという間に警察官たちに拘束され、連れていかれてしまった。

　わたしと霧切はＢ棟の入り口で彼らを見送る。

朝倉は去り際に、わたしたちに小声で話しかけてきた。

「お前ら二人なら、連中のゲームを終わらせることができるかもしれない。俺に代わって一矢報いてくれるというのなら、ヒントをやるぜ」

「ヒント？」

「連中は事件に投入する探偵について、探偵図書館のランクを参考にしている」

「余計なことを喋るな、乗れ」

　朝倉は警察官に小突かれながら、黒い車に乗せられ、雪道を下っていってしまった。雪はもうほとんどやんでいて、東の空がうっすらと明るくなっていた。

　わたしと霧切はお互いに顔を見合わせて、それぞれ考えていることを口にしないまま、一緒にA棟まで戻った。

　わたしたちはそこで異様な光景を目の当たりにすることになる。

　さっきまでいたはずの警察官たちが、一人もいなくなっていた。

「——やられたわ」

　霧切は悔しそうに云った。

「な、何が起きたの？」

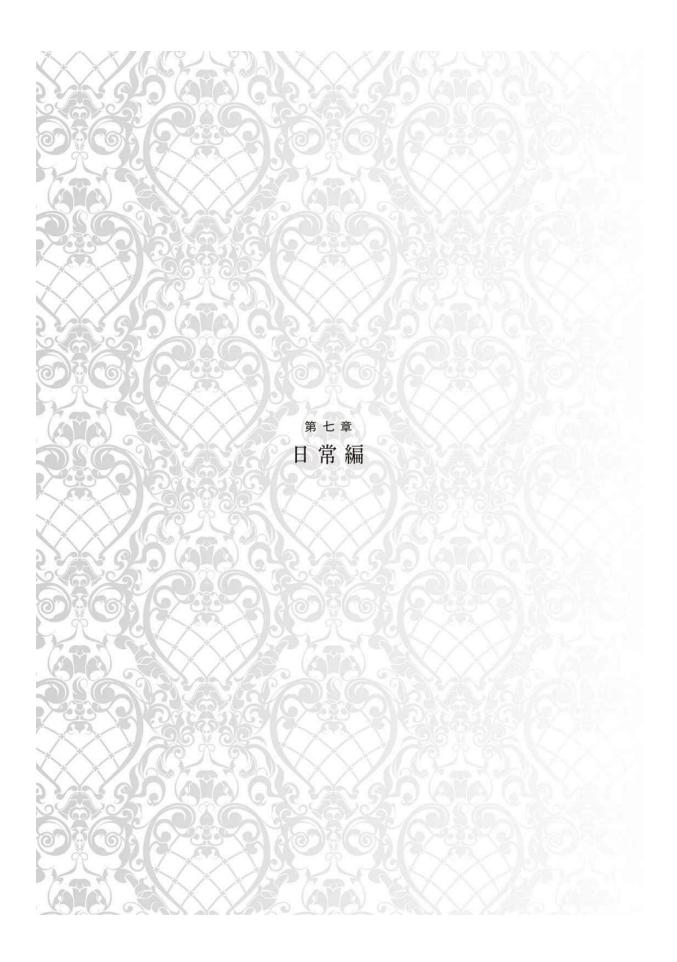
「さっきの警察官たち……きっと委員会の人間たちだわ」

「そんな！」

　それから一時間後、本物の警察がシリウス天文台にやってきた。わたしはかなり疑ってかかったが、彼らはどうやら本物のようだった。わたしと霧切は彼らのパトカーで下山し、ようやく事件の舞台から降りることができた。

　なお、その日、山道から転落している一台の黒い車が、通りがかった一般市民によって発見された。車中では両足が義足の男性が全身を強く打って死亡していた。警察は不慮の事故として、それ以上の捜査はしないことをマスコミを通じて発表した。死亡した男性の名は、朝倉忠と報じられた。

第七章

日常編

事件の後処理で三日間授業に出られなかった。けれどわたしの場合、帰る場所は学校の敷地内の寮なので、クラスメイトや寮仲間、それからリスみたいに小さな手芸部員の子なんかが、わざわざわたしを心配して声をかけに来てくれた。自分では仲のいい親友も、頼れる友だちもいないと思っていたけれど、そんなふうに心配してくれる人たちがいるだけでも充分幸せなことかもしれない。わたしはそんな日常をあらためて噛みしめていた。

霧切響子は、事件の翌日から普通に登校してきているらしかった。校内放送で、中等部の職員室に呼ばれている霧切響子の名を聞いた。彼女がこの学校にいるということが、わたしにはなんだか不思議な出来事のように思えてならなかった。例の事件はあまりにも非現実的すぎて、そこで出会った霧切もまた、非現実の存在であるかのような印象だった。けれど彼女は間違いなくこちら側の世界にいて、普通に中学に通う女の子だったのだ。

事件が終わってから五日目。昼休みに中等部の校舎を覗いてみた。霧切のいる教室は、担任の先生から聞いている。

中学一年生のまだ幼い顔が並ぶ教室に、霧切響子はいた。

彼女は窓辺の席で、頬杖をつきながら、外を眺めていた。彼女の周りには、机を寄せ合って弁当を食べる子たちや、小鳥のさえずりのようにお喋りしている子たちがいる。そんな中で、霧切響子の姿は孤立しているように見えたが、ある意味では影としてすっかりクラスに溶け込んでいるようでもあった。

教室を覗いているわたしに気づいて、クラスの子たちがざわざわし始める。そのざわざわはやがて霧切のところまで伝播し、ようやく彼女はわたしに気づいた。

目が合う。

しかし彼女は何事もなかったかのように、また外をぼんやりと眺めるのだった。

「ちょっと、なんで無視するの」

わたしは教室に入っていき、霧切の横に立った。両手を腰に当てて彼女を見下ろす。今や教室中が、わたしたちに注目している。お喋りしている子たちも、思わず黙ってしまうほどだった。

「ここだとなんだから、ちょっと外へ行こう」

わたしは霧切を半ば強引に連れ出す。きっとこのあと、教室ではわたしたちの噂で持ち切りになるだろう。

わたしは霧切と一緒に、ひと気の少ない昇降口まで移動した。下駄箱の立ち並ぶ暗がりに、わたしたちは隠れるように身を寄せ合う。

霧切は下駄箱に背を預けて、腕組みした。
「何か用？」
霧切はわたしを見上げて尋ねる。冷淡な云い方だけど、機嫌が悪いというわけではないのだろう。きっと彼女はいつもこんな感じなのだ。
「朝倉さんが死んだって、聞いた？　新聞にも載ってた。事故だって」
「委員会に連れ去られたと気づいた時点で、そうなることは予想できたわ。彼自身、わかっていたんじゃないかしら。自分の最期を」
霧切は視線を床に落として、ため息を零した。
「『黒の挑戦』の敗者は委員会に殺される運命なの？」
「どうかしら。トリックを購入したお金を払えない場合は、そうなるんでしょう」
「そんな……」
わたしは下駄箱に片手をつき、うなだれる。
わたしのすぐ目の前に、霧切の小さな頭がある。
ふと横を見ると、中等部の制服を着た子たちが、わたしたちのことを覗いていた。彼女たちはわたしの視線に気づいて、さっと姿を隠してしまった。
事件のせいで、わたしたちはすっかり有名になってしまったようだ。報道では、わたしたちは事件に巻き込まれた一般人ということになっている。探偵として事件に関わったことにはなっていない。
「ねえ、霧切ちゃん。これで終わりじゃないでしょう？」
「どういう意味？」
「犯罪被害者救済委員会――放っておくわけにはいかないでしょ！　朝倉さんの口ぶりでは、他にもたくさん同様のゲームが行なわれているみたいだった。もしもそれが本当なら、犯罪組織を野放しにすることになる」
「つくづく……英雄になりたい人なのね、結お姉さまって」
お姉さまという呼称がまだ続いていることに、わたしは嬉しくなった。事件現場を離れたことで、わたしと彼女の関係はリセットされてしまったのではないかとさえ思っていたのだが、そんなことはないようだ。
「英雄になろうとする人はまっさきに死ぬって、相場が決まっているわ」
「つまり命を懸けてるってことだよ」わたしは胸を張る。「わたしだって、探偵として命を張る覚悟は持っている。君だけの専売特許じゃないの」
「そう……」
霧切はわたしを見上げる。

すぐ目の前に彼女の瞳があった。
「どうしたの？　不安？」
「いいえ」霧切はすぐに首を横に振って、それから迷うように言葉を続けた。「私はあの日からずっと、犬塚という探偵のことを考えていたわ」
「自作自演探偵か。最悪だね」
「私にとって、探偵というのは……ゆるぎない確固とした真実の使徒だった。だから私は自分が探偵であることに誇りを持っていた。でもそれは……」
彼女はそこまで云って、喋りすぎた自分を戒めるかのように、急に口をつぐんでしまった。
「いいよ、話して」
わたしが云うと、彼女は視線をさまよわせてから、ようやく最後にわたしを見上げた。その不安そうな上目遣いは、今まで彼女が見せたどんな表情よりも、弱く儚げだった。
「探偵は絶対じゃない……そんな当たり前の事実に、自分はあまりにも無頓着だった。そのことに気づいて、ちょっと驚いただけ」
彼女はそう云ってから、顔を伏せた。
わたしたちを覗き見ている女の子たちが何か云いたそうにしているのを無視しながら、わたしは霧切の頭に手を置いた。
「わたしにとって、君はまさしく真実をもたらす天使だったよ。君がいたから、わたしは日常を取り戻すことができた」
「日常……」
霧切はまるで知らない単語をオウム返しするみたいに呟いて、黙ってしまった。
「今日の放課後、空いてる？　行きたいところがあるんだけど、君も一緒に行かない？」
「行きたいところ？」
「探偵図書館。もしかしたらそこに、犯罪被害者救済委員会の秘密を解く鍵があるかもしれない」
霧切は長い沈黙のあとで、肯いた。
「じゃあ放課後にここで」
わたしは彼女の了解を得る前に、その場を離れ、昇降口を出た。中等部の女の子たちがわたしを通すために道を開ける。
「デートだよ、デート」
わたしが女の子たちに告げると、きゃっきゃっと黄色い声が上がった。彼女たちの声を背後に聞きながら、わたしは自分の校舎に戻った。

放課後、昇降口に向かうと、霧切は階段の片隅に腰かけて本を読んでいた。

わたしはふと立ち止まって、彼女を観察した。霧切は熱心に字を目で追っている。その横顔はとても無邪気で、あの血なまぐさい殺人事件を解決した探偵には見えなかった。帰りを急ぐ生徒たちのなか、放課後に本を読む彼女の姿は、完成された絵画のようだった。

霧切はわたしの視線に気づいて、顔を上げ、こちらを向いた。

「見ていたの？」

「ああ、ごめん」わたしは彼女の傍に駆け寄る。「つい、かわいくて」

「意地悪ね」

「楽しそうに何を読んでいたの？　わかった、島田荘司（しまだそうじ）の新刊でしょ？」

「いいえ、手帳よ」

霧切は黒い表紙の手帳を見せた。ああ、そういえば前にその手帳を見たことがある。彼女は階段から立ち上がると、スカートの後ろの方をぽんぽんと払った。

「お祖父さまから教わった探偵のすべてがここに書かれているの」

「こんな時にも研究に余念がないんだね。恐れ入るよ」

「これが私の日常よ」

「そう、まあこれから行く場所を考えたら、気を引き締めるべきかもしれないね」

わたしたちは揃って昇降口を出ると、キャンパスを横切り、古めかしい校門をくぐった。特に話題もなく、黙ったまま並んで歩く。クリスマスソングの流れる商店街も、わたしたちにとってはまったく関係のない風景に過ぎなかった。

バス停でバスを待つ。

足元にはまだ少し雪が残っていて、それを蹴ると簡単に崩れた。バスを待つ間、そうして雪を蹴って遊んだ。霧切は最後までこの遊びに付き合わなかった。

バスが来る。わたしと霧切は並んで座った。他の乗客たちには、仲のいい中学生と高校生に見えただろうか。そうであってほしいと、わたしは思った。

「あれから何か変わったことはない？」

わたしは尋ねる。

「変わったこと？」

「わたしたちは朝倉さんから犯罪被害者救済委員会の秘密をいろいろ聞いてしまったわけじゃない。なんだかよくわからないけどさ、巨大な犯罪組織が秘密を知ったわたしたちの命を狙うなんてことも、あった

りするかな……なんて思ってたんだけど」
「身の回りで特に異変はないわね」
「君のお祖父さまはなんか云ってた？　お祖父さまの意見も聞いてみたいんだけど。君の師匠みたいなもんなんでしょ？」
「お祖父さまは今、ロサンゼルスにいるの。事件のことを電話で伝えたけど、あまり関心がなさそうだった。お祖父さまの興味をひくほどの事件ではなかったということね」
「ふうん……」
　いろいろとスケールのでかいお祖父さまだ。この小さな女の子もやがて、そんなふうに世界を股にかける名探偵となるのだろうか。
「ただ一つ、お祖父さまが気になることを云っていたわ」
「なあに？」
「お祖父さまは探偵図書館の設立に関わっていたらしいの」
「へえ……それって、相当すごいことじゃない？　君の家って、どれだけすごい探偵一家なの」
　あらためて彼女の出身に驚く。彼女の探偵としての矜持（きょうじ）が普通ではないことはすでに理解しているが、それはおそらく彼女の育った家で形成されていったものだろう。
　はたして霧切家とは、どんなところなのだろう。
「わたしなんか、なんの変哲（へんてつ）もない普通の家だからなあ」
「その割に、探偵として命を張れるなんて云うのね。その決意はどこからきているのかしら」
　霧切は訝（いぶか）しげな目でわたしを見る。
「疑うの？」
「いいえ、別に疑ってないわ」
　霧切は窓の外に視線を向ける。
「わたしがさんざん君を犯人扱いしたこと、まだ怒ってるんでしょ。それに関しては本当に悪かったと思ってる」
「別に怒ってない」
「そう、それならいいけどさ……」
　車窓の風景は、次第に閑静（かんせい）な高級住宅街になっていく。道路脇には等間隔に大きな木が植えられており、葉っぱのないつんつんとした枝を、灰色の空に伸ばしていた。不思議とひと気のない町並みだった。
『次は探偵図書館前──探偵図書館前──』

バスのアナウンスが告げる。
「霧切ちゃん、降車ボタン押させてあげるよ」
「別に押したいなんて云っていないわ」
「それならわたしが押すけどいいの？」
「どうぞ」
「……やっぱり一緒に押そう。せーので」
「いいから早くして」
「ふふ、冗談冗談」
　わたしは霧切の前に身を乗り出して、窓辺のスイッチを押した。
　まもなく、バスが止まる。
　降りると、静謐な冷たい風がわたしたちを包んだ。町の空気とは明らかに何かが違う。わたしたちの前には高々とした塀が連なり、その向こうにお化け屋敷のような古い建物が見えた。
　わたしたちは塀に沿って歩き、探偵図書館の門を目指す。
　やがて大仰な二本の柱に挟まれた鉄の門にたどり着いた。門は開きっ放しになっており、その先に西洋館風のエントランスポーチが窺える。わたしたちはまだ雪の残る石段をゆっくりと並んで上がった。
「ここに来たことは？」
　わたしは尋ねる。
「ないわ。初めて」
「登録する時は、ここには来なかったの？」
「おじいさまが全部やってくれたから」
「そっか、探偵図書館は君にとって修業の場みたいなものなのかな」
　霧切は肯く。
「最初、私にも登録する意味がよくわからなかったけれど、お姉さまの説明を聞いてなんとなくわかったわ」
「どういうこと？」
「探偵として認められるにはゼロクラスを目指すしかない」
　霧切の表情は硬い。
　わたしはようやく彼女のことがわかりかけてきた。
　彼女には本当に探偵しかないんだ。
　きっとその背景には、壮絶な家庭環境があるに違いない。探偵として認められることを彼女が強く願

うのも、何か理由があるのだろう。
「評価は自然とついてくるよ。君なら大丈夫。だからそんなに気負わなくてもいいんじゃない？」
　霧切はわたしの言葉には聞く耳を持たないといった様子で、わたしをちらりと横目に見るだけだった。
「ランクが上だからって、必ずしもいい探偵だとは限らないんだし。ほら、犬塚甲みたいな例もあったじゃない」
「でも探偵として自分を売り込むには、それなりの評価が必要よ」
「売り込む……か。何処かあてがあるみたいな云い方だね」
　わたしの言葉には反応せず、霧切は先に扉を開けて中へ入っていってしまった。
　わたしは慌てて彼女を追う。
　扉をくぐると、途端に古い木と本のにおいが鼻をついた。探偵図書館はまだ十五年の歴史しかないけれど、建物は、五十年以上前に建てられた図書館をそのまま利用しているという。
　霧切はもう一つ先の扉をくぐったところで立ち止まり、きょろきょろと辺りを見回していた。早速迷っているみたいだ。
「霧切ちゃん」わたしは彼女の背中に呼びかける。「カウンターに行って、カードの更新してみようよ。この前の事件を解決したことで、ランクが上がっているかもしれないよ」
「そうね」
　霧切は一人で歩きだして、ふと足を止め、わたしを待つ。案内はわたしに任せた方がいいと判断したのだろう。
　わたしは彼女を連れて、カウンターまで移動した。
　最近の図書館といえば、手続きも電子化され、カウンターも銀行やホテルみたいなおしゃれなところが多いけれど、探偵図書館は、いかにもアナログめいた古き良き図書館といった様相だ。カウンターの向こうにいる職員も、白シャツに黒い腕ぬきをつけた、古風な格好をしている。
「あの……カードの更新をお願いしたいんですけど……」
　わたしはカードを出しながら、カウンター越しに職員に話しかける。職員は五十代くらいのおじさんで、頬のこけた文学者みたいな印象だった。彼はたっぷりと時間をかけてわたしを眺めると、カードを受け取り、また時間をかけてそれを眺めた。
「ちょっとお待ちくださいね」
　職員は緩慢な動作で立ち上がると、カウンターの奥にあるパソコンのもとに向かった。見たところ、パソコンのモニタは全部で三つほどある。彼はその一つを見ながら、わたしのカードを手元のスリットに差し込んだ。

「……ふむ、更新がありますね。今、書き換えますからお待ちください。写真はそのままでいいですか？」
「はい。そのままで」
「了解しました」
「ついでに彼女のカードもお願いします」
　わたしは云って、霧切にカードを出すように促した。霧切は手帳からカードを抜いて、職員に差し出す。
「五分ほどお待ちくださいね」
　わたしたちは待っている間、取り留めもなく周囲を眺めた。カウンターのある部屋は前後にそれぞれ扉が設置されており、一つの部屋として独立している。この先の扉を進むと、探偵たちのファイルが並ぶ部屋に入ることができる。
　カウンターの奥には数名の職員がいて、何かの事務仕事をしている。無駄口ひとつ聞こえてこない、息が詰まるような環境だ。あらゆる組織といっさいの関わりを持たない中立の存在を謳（うた）う探偵図書館だが、はたして職員たちは何者なのだろうか。あらためて考えてみると、もくもくと機械のように仕事をこなす彼らが不気味に見えてきた。
「はい、できましたよ」
　カウンターのおじさんが二枚のカードを持って、わたしのところに戻ってくる。わたしたちはカードを受け取った。

　五月雨結　DSCナンバー『８８７』

「あ！　わたしのランク一つ上がってる！　やったーっ、すごいすごい！」
　わたしは思わずその場で飛び上がりながら云った。
「しーっ、館内ではお静かに」
　職員にたしなめられる。
「すみません！」
　わたしは小声で謝った。
「ランクが上がったのは霧切ちゃんのおかげだわ。だってわたしなんもしてないもん。霧切ちゃんのカードはどう？」
「私もランクが上がっていたわ」

霧切響子　DSCナンバー『９１７』

「すごい！　二つも上がってる！」
「お静かに！」
「すみません……」わたしは再び謝る。「中一でランク『7』って相当よ。たぶん探偵図書館始まって以来じゃないかしら。やっぱり君ってすごいんだねえ」
「この調子だと、ゼロクラスになるためには、シリウス天文台の事件と同等の事件をあと四つは解決しなければならないわね」
　霧切は相変わらず冷静だ。
「そ、そうだね……でもま、とりあえずはおめでとう。新人にランクで並ばれちゃったね。でも女子高生と女子中学生のランク『7』探偵コンビってすごくない？」
「コンビ？　そんなの結成した覚えないわ」
「ま、まあ、世間から見たらそういうキャッチコピーもありかな、って話」
　わたしはあたふたしながら云う。
　いずれにしろ、わたしも彼女もランクが上がってよかった。とくに霧切の才能が認められたことが、自分のことのように嬉しかった。
「君は嬉しくないの？」
「嬉しいわ」
「それならほら、笑って笑って。記念撮影しよっか？」
「感情はなるべく抑えた方がいいと教わっているの」霧切はカードを手帳に戻すと、ぷいっとそっぽを向いてしまった。「それより、一ついいアイディアを思いついたわ。犯罪被害者救済委員会に近づくためのアイディア」
「ええっ、この浮かれた状況でよく次のことを考えられるね、君は」
「浮かれているのは結お姉さまだけでしょう」
「そ、そうだけど……」
「探偵たちのファイルがある部屋へ案内して」
「はいはい、わかりましたよ、お嬢さん」
　わたしはカウンターの前を通過し、その先にある扉を開けた。
　視界が大きく開ける。
　そこは探偵たちの森だった。天井の高い部屋に、まるで樹木のように本棚が立ち並んでいる。鬱蒼（うっそう）と

茂るのは、緑の葉ではなく、探偵たちのプロファイルだ。およそ六万五千五百人の探偵が、窓から差し込む明かりさえ閉ざし、足元を暗くしていた。
　本棚にはDSCナンバーを記すプレートが貼られている。来館者はこれを参考に、目当ての探偵を探し出すことができる。わたしたちの他にも、数名の来館者がいた。離婚問題から犬捜し、殺人事件から国際問題、様々な難問を抱えた人たちが、ここに集う。
「で、アイディアって何？」
「ランクが上がったことで気づいたわ。どの程度の事件を解決すれば、どれくらいランクが上がるのか」
「うん……それで？」
「私たちが巻き込まれることになったシリウス天文台の事件は、一つの指標になる」
「うん」
「まだ気づかないのかしら、お姉さま」
「うーん……」
　わたしは腕組みして唸る。
「シリウス天文台の事件は、犯罪被害者救済委員会の用意したトリックによって行なわれた。これを退けたことにより、私のランクは二つも上がった。でもそれは運がよかったというか悪かったというか……たまたま『解決すればランクが上がる難易度の事件』に遭遇したから。逆に云えば、結お姉さまはそういう事件に今まで遭遇しなかったから、三年かけてもランクを一つしか上げられなかった」
「事件に遭遇することも名探偵の条件とはよく云われるけど……」
「そこで結論だけれど……ランクの高い探偵たちの中には、過去に『黒の挑戦』を受けた人もいるのではないかしら。特に登録してから日が浅くて、その割にランクの高い人」
「ああ、なるほど！」
「もしかしたら一度や二度ではなく、何度も『黒の挑戦』を退けてきた探偵がいるかもしれないわ」
「いるよ、絶対いる！　朝倉さんが云いたかったのは、そういうことなんじゃない？」
「目ぼしい探偵を探してみましょう」
　霧切はDSCナンバーのプレートを見上げながら棚を移動する。彼女が真っ先に向かったのは、『000』の棚。すなわち『総合・総合・ランクゼロ』のトリプルゼロクラスの棚だ。
　その棚は部屋の一番奥にあった。まるで玉座か、あるいは秘密の宝物棚のようなたたずまいで、小さな棚が置かれている。
　そこには三つのファイルが収められている。
「噂でしかないんだけど、トリプルゼロの探偵は過去に四人いたんだけど、一人は抹消されたんだって。

理由は誰も知らない」
　わたしはささやくように霧切に云った。
　霧切は無言のまま、ファイルの一つを手に取る。
　ファイルには高級そうな革張りのバインダーが使われている。背に探偵の名前とDSCナンバーが書かれている。

　龍造寺月下（りゅうぞうじげっか）　DSCナンバー『000』

　三つのゼロが輝かしい。
　ファイルを開くと、最初のページには探偵図書館フォーマットの履歴書があった。顔写真を見ると、想像していたより若い。そしてかっこいい。なよなよとした文学青年風ではなく、どちらかといえば髭（ひげ）やオールバックの似合う男くさい二枚目だ。生年月日から見て、現在は四十二歳らしい。
「ものすごい数の事件を解決しているわね」
　ファイルに閉じられているページ数は、トリプルゼロクラスの三人の中で一番多い。
「確かこの人は、『安楽椅子伯爵（はくしゃく）』の異名を持つ安楽椅子探偵だったと思う。現場への移動や調査に時間を割くことがないから、これだけの事件を机上で並列的に解決できるんだって」
「ふうん、のんきな探偵なのね」
「トリプルゼロの探偵になんてこと云うの」
　わたしは霧切をたしなめる。
「ごめんなさい」
　霧切は素直に謝った。
「そうそう、尊敬を忘れてはいけない」
「こっちはどうかしら」
　霧切は隣のファイルを手に取る。

　ジョニィ・アープ　DSCナンバー『000』

「この人は有名ね。アメリカ人よ」わたしは早速知っている知識をひけらかす。「この国で唯一、警察から銃の携帯を許可されている探偵。まあそのへんの事情は、FBIと警察との間で、いろいろ取り決めがあったということくらいしかわたしも知らないけど……一応、彼がこの国を訪れる際は、探偵ではなく『法

執行官』という肩書きになるらしいよ」
「私も彼を知っているわ」
「あ、そうなんだ」
「アメリカで彼から銃の撃ち方を習った」
「へえ……って、ええっ？　お知り合いですか？」
「向こうが私を覚えているかどうかはわからないけど」
「まさかトリプルゼロの知り合いがいるなんて……写真もブラッド・ピットみたいでかっこいいじゃない！　紹介してよ！」
「彼はニューヨーク在住よ。結お姉さま、英語はできるの？」
「あー……」
　わたしはそのまま黙り込むしかなかった。
「彼がトリプルゼロだったなんて、知らなかったわ」
　霧切はジョニィのファイルを置き、三つ目のファイルを取る。

　御鏡霊（みかがみれい）　DSCナンバー『０００』

　ファイルを開くと、履歴書に空白が目立つ。顔写真もない。性別も定かではなく、年齢も不詳（ふしょう）。解決した事件の数は少ないが、いずれも世界中の探偵やミステリマニアたちをとりこにした奇妙な犯罪ばかりを扱っている。たとえばイギリスの『ロード・ヒル・ハウス殺人事件』や、カナダとアメリカをまたぐ『五大湖連続バラバラ殺人事件』など、わたしでさえ耳にしたことのある事件だ。
「このファイルでは参考にならないわね」霧切はすぐにファイルを棚に戻してしまった。「連絡先も書いていないわ。ここの職員に云えば、電話を繋いでくれるかしら」
「ううん、それは無理。職員が直接探偵とクライアントの仲介をすることはないんだ。カウンターを通して、探偵に書き置きを残すことはできるけどね」
「仕方ないわね」霧切は不満そうな顔をして、自分の三つ編みに触れる。「でもトリプルクラスは別格すぎて、私たちの探している探偵とは違うと思う」
「じゃあダブルを探してみる？」
「そうね」
　わたしたちは適当な棚に移動する。
　ダブルゼロとは、二次区分がゼロで、さらにランクが最高位であるゼロの探偵を指す。一次区分がゼ

ロではないので、それぞれの分類棚で探さなければ見つからない。
　わたしたちは探偵の森をさまようように、無数のファイルを眺めながら移動する。
「ダブルゼロの探偵は二十人くらいいると聞いたことがある」
「けっこうたくさんいるのね」
「それでも三千人に一人の才能だよ？　そう考えると、本当にトリプルとかダブルの人たちって、雲の上の人だね」
　わたしは重たいため息を零していた。
　それからわたしたちは一時間ほどかけて、七名のダブルゼロクラスの探偵をピックアップした。特に登録してから日が浅い人を選んだ。
　はたしてこの探偵たちの中に、『黒の挑戦』を受けた者がいるだろうか。
　わたしたちは閲覧室に移動し、ファイルに綴じられている事件の概要を確認する。しかしそれらの事件が『黒の挑戦』なのかどうかは、もちろん記載されていない。それっぽいかどうかで判断するしかない。
「やっぱりダブルにも、直接の連絡先は記されていないみたいだね」
「どうすればいいの？」
　霧切は隣の席から身を乗り出して、ファイルを覗き込むように尋ねる。
「書き置きするしかない」
　探偵図書館はとてもアナログなのだ。電子メールの時代にも、書き置きは有効だ。
　わたしと霧切は顔を寄せ合いながら、ダブルの探偵たちに宛ててメモを書いた。文面はいたってシンプル。その方が探偵の興味をひくと考えたからだ。

『犯罪被害者救済委員会について知りたいことがあります。乞う連絡　五月雨結』

「これでよし、と」
　わたしはメモをカウンターに預け、探偵図書館をあとにすることにした。
「さあ、帰りましょ、霧切ちゃん」
　霧切は肯き、わたしのあとをついてきた。
　門を抜け、冬の風の吹く通りに出た。わたしたちは揃ってバス停まで歩き、バスを待つ。
「君は寮住まいじゃないよね。実家から通ってるの？」
「ええ。おじいさまが面倒みてくれているの」
「あれ？　お父さんとお母さんは？」

「どちらもいない」

　霧切は道路の先を見ながら云う。

「……ごめん、へんなこと聞いたね」

　そういえば前にも、父親に関して複雑な反応を示していたっけ。家に関する話題は、控えた方がいいのかもしれない。

　バスが来て、わたしたちは来た時と同じように、並んで座った。

　霧切は途中で降車ボタンを押した。

「次で降りた方が近いの」

「そう。ダブルクラスからの連絡があったら、すぐに君に伝えるよ」

　霧切は一つ肯いただけで、さよならも云わずにバスを降りていった。

　——難しい子だな。

　でもとても素直な子だと思う。探偵活動に対するひたむきさと真摯な態度は、単なる使命感だけでは説明できないだろう。

　彼女は純粋に、探偵という仕事を愛している。

　窓の外に見える風景は、すでに暗くなり始めていた。わたしは途中の商店街でバスを降りて、そこからは歩いて帰ることにした。

　商店街のあちこちにクリスマスツリーが飾られている。

　もうすぐクリスマスだ。

　その前に期末試験がある。

　それが終われば冬休み。

　今年のクリスマスもまた、一人でチョコレートケーキを食べることになるのだろうか。

　探偵図書館に残してきたメモになんの反応もないまま、日は過ぎていき、冬休みが訪れた。

　冬休みになると、寮は途端にひと気がなくなる。みんな実家に帰るからだ。特に冬休みは短いので、休みが始まると同時に帰る子が多い。

　わたしは実家に帰る気にはなれなかった。両親が共働きなので、帰ったところで団らんが待っているわけでもないし、あまり家には帰りたくない理由がある。

　今年のクリスマスも寮で過ごすのか——

　わたしはベッドに仰向けになって、いつもの天井を眺める。そうしているうちに頭に浮かんできたのは、霧切響子の顔だった。

彼女は今、何をしているのかな……

連絡先を聞いておけばよかった。携帯電話を持っているのかな。

わたしはふと思い当たる。

探偵図書館に行けば、彼女の連絡先を知ることができるのではないだろうか。特に新人であればあるほど、ファイルに連絡先を記載しておく傾向がある。その方が依頼を受けやすくなるからだ。

わたしは早速、探偵図書館に急いだ。

探偵図書館はいつものようにひっそりとしていたが、いつもより来館者が多かった。師走には問題事を抱えた人も増えるのだろう。

「わたし宛ての書き置きはありませんか？」

カウンターで尋ねてみたが、やはりメッセージは何もなかった。

それからわたしは霧切響子のファイルを確認した。事件記録には、早速シリウス天文台のことが記されている。

履歴書のページには電話番号が書かれていた。わたしはそれをメモして、探偵図書館をあとにする。

寮に帰ってから、電話をかけてみた。

受話口から聞こえてきたのは、男性の老人の声だった。

『はい……もしもし……』

「もしもし、わたしは響子さんと同じ学校に通っている五月雨結と申します。この前は響子さんにお世話になりまして……」

『ああ、探偵の五月雨さんか。こちらこそ孫が世話になったみたいだね』

「いえいえ、本当に響子さんには助けられました」

『そうだろう、そうだろう』

相手は嬉しそうに相槌（あいづち）を打つ。おそらくお祖父さんだろう。ロサンゼルスから実家に帰ってきているのだろうか。

「響子さんはいらっしゃいますか？」

『今代わるよ』

まもなくして受話口から響子の声がした。

『はい』

「あ、霧切ちゃん」

『結お姉さま？』

「うん、久しぶりだね！」
　数日ぶりに聞く彼女の声に、わたしは高揚（こうよう）していた。
『一週間も経っていないと思うけど』
「それより明後日（あさって）、学校に来られない？」
『行くことは可能よ』
「じゃあ夜の七時に、校門で会おう」
『その時間には、校門は閉まっているはずよ』
「ところが明後日は開いているんだ。さあ、何故でしょう。答えは来てのお楽しみ。必ず来てね！」
　わたしは彼女の返事を聞く前に電話を切った。
　今頃彼女は面食らっていることだろう。
　わたしはそんな彼女の表情を想像しながら、ベッドに入った。

　その日は朝からちらちらと雪が降ったりやんだりするような天気だった。灰色で重々しい空も、今日だけは許せるような気がする。
　わたしは校門の柱に背中を預けて、霧切が現れるのを待った。時間は約束の七時になろうとしていた。目の前の道路を駆け抜けるヘッドライトが、か細い雪の結晶を照らし出し、冷たい夜空に散らしていく。冷えた指先を温めようとして、吐き出した息はしばらく白く残った。
　やがて霧切響子が道の向こうから歩いてきた。
　いつもの制服にコートを羽織（はお）って、雪夜の薄闇から近づいてくる。
「こんな遅くに呼び出してごめんね」
　わたしは彼女が校門に着く前に、手を振って呼びかけた。
「答えは、クリスマスのミサがあるから」霧切はコートのポケットに両手を突っ込んだまま云う。「この前の電話のクイズの答え。云う前に切られちゃったから、それだけ云いに来たの。それじゃあ、私はこれで帰るわね」
　霧切は背を向けて、本当に道を引き返し始める。
「ちょっと待ってよ！」
「何？」
　霧切は振り返る。
　表情に変化はない。むしろいつもより無愛想に感じられる。
「今日だけは、君の日常のことは少し忘れて、わたしの日常に付き合ってくれない？」

「──どういうこと？」
「いいから、いいから」
　わたしは霧切の腕を掴んで、門内に引き入れた。
　正面に見える教会では、すでにミサが始まっているようだ。普段は消えている明かりが、今夜は明々と雪空を照らし出している。闇の中に教会だけがぼんやりと浮かび上がって見えて、とても幻想的だった。
「こっちだよ」
　わたしは手招きして霧切を誘う。
　校舎の昇降口は開いたままになっていた。いつもなら閉まっている時刻だが、クリスマスの夜は聖歌隊が準備のために教室を利用しているので、開け放されているのだ。
　ただし電気が消されているため、中は真っ暗だ。
「ここに入るの？」
　霧切はためらうように足を止めた。
「そうだよ。まさかおばけが怖いとか？」
「……ここにおばけがいるとは思えないわ」
「知らないの？　夜の校舎はよく出るっていうけど」
「……嘘よ、そんなのいるはずないもの。論理的じゃないわ」
　霧切は警戒するように周囲に視線を走らせる。身体も強張（こわば）っているようだ。
「大丈夫だよ、ほら」
　わたしは霧切の細い手首を掴んだまま、真っ暗な廊下を進む。ひと気のない夜の校舎は、聖夜といえども不気味だった。もし何かが現れるとしたら、七面鳥（しちめんちょう）のおばけとか、斧（おの）を持ったサンタクロースとか、そういうモンスターだろうか。
　わたしは霧切を連れて、校舎の階段を上る。
　最上階までたどり着いたところで、目の前にある扉を強引に押し開けた。
「鍵もないのに、どうやって開けたの？」
「実はちょっとしたこつがあってね。ノブを上下に揺すっていると、そのうち鍵が外れるんだ」
「──そう」
　わたしたちは屋上に出る。
　屋上にはうっすらと雪が積もっていた。当然ながら、人の気配はない。そこに足跡をつけるのは、少なくともこのクリスマスの夜において、わたしたちが初めてだった。

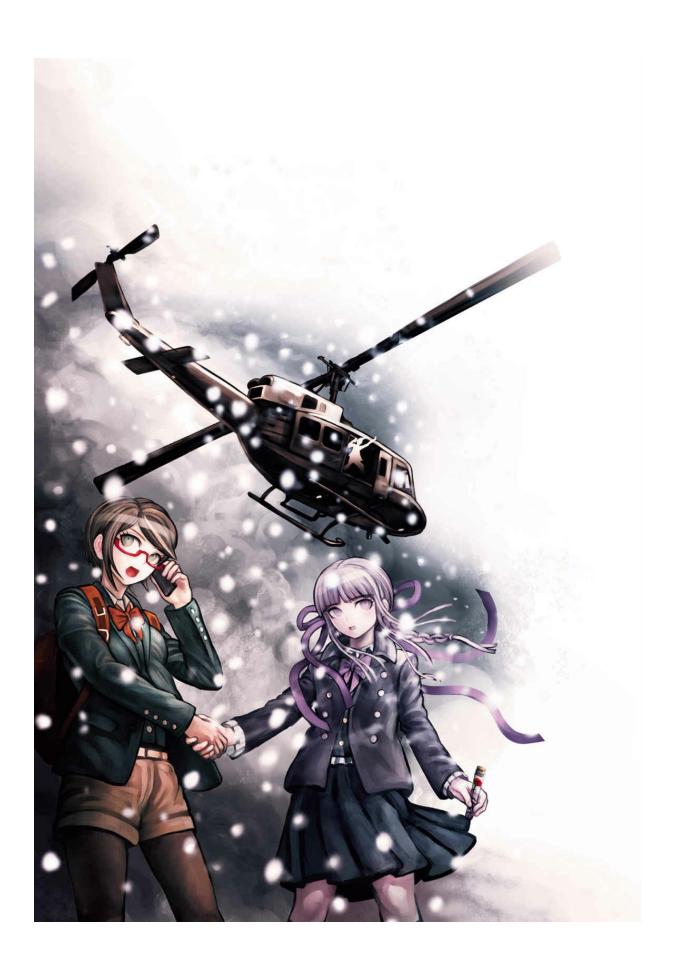
わたしたちは一緒にフェンスまで近づき、その向こうに見える教会を見下ろした。
　教会はまるでそれ自体がランプのように、周囲を明るく照らしていた。ミサに向かう人たちの姿が見える。制服を着た子や、親子連れ、男女のカップルの姿も見える。
「ほら、綺麗でしょ」
　わたしは感想を求めるように、霧切の横顔を盗み見た。けれど彼女はいつもと変わらない表情で、フェンスの向こうを見下ろしているだけだった。
「ねえ、霧切ちゃん。わたしはこれでも君にすごく感謝しているんだ」
　わたしが云うと、彼女はこちらを向いて首を傾げた。
「出会い方はとんでもなかったけど、その相手が君でよかったと思ってる。なんていうか……わたしは今まで探偵をしながら学校に通っていたけど、どうしてもやっぱり、自分の存在に違和感を覚えていたんだ。ぶっちゃけ、なんでわたし探偵なんかやってるんだろうって」
「そう」
「君にはその……今まで云えなかったけど、わたし、小さい頃に、妹を亡くしているんだ」
　霧切は無言でわたしを見返す。
「妹が誘拐されて、そのまま殺されちゃったの。事件は未解決のまま。そうよ、それこそわたしが探偵を目指した理由。妹を守れなかった自分が悔しくて、わたしは探偵を目指すようになったの。もしかしたら誘拐されていたのはわたしだったかもしれないんだ。妹とわたしはそっくりだったから。そう考えるとますます──」
　わたしはそこまで云って、それ以上言葉を続けられなくなった。
　フェンスに指をかけて、遠い雪降りの空を見つめる。
「時々、探偵を続ける理由を見失いそうになる。誰かの役に立ちたいとか、困っている人を助けたいとか、そういう気持ちはもちろんあるの。でもそれって、ただ自分をごまかしてるだけじゃないのかな……って思ったり。結局、自分の罪から救われたくて、探偵という行為でそれを紛らわしているだけじゃないのかって……」
「ふうん」
「でも君を見ていると、わたしの中途半端な気持ちなんて馬鹿馬鹿しく思えたよ。君が探偵である理由は──わたしにはわからないけどさ、探偵の君が、わたしにはとても眩しく見える。真っ直ぐな君のこと、見習いたいなって思った」
「私が探偵である理由……」
　霧切はそう呟いて、わたしと同じように雪を眺めた。

「考えたことはない？」
「ないわ」
　即答する。
「かっこいいよ。君は生まれながらの探偵なんだ。でもいつか……君もわたしと同じように、その理由に悩むかもしれないね。その時はどうか、清らかな君のままでいて。それだけは君に云っておきたい」
　教会の扉が開き、キャンドルを持った聖歌隊が外に並び始めた。ミサは終わったようだ。点々と灯るろうそくの明かりが、道しるべのように校門へと続く。
「そうそう、君に渡すものがある」
　わたしはコートのポケットから、小さな紙袋を取り出した。リボンのシールがついたそれを、霧切に手渡す。
「これは何？」
「クリスマス・プレゼント」
「……開けていい？」
「うん」
　霧切は紙袋を受け取ると、リボンのシールを外して中身を取り出した。
　それはわたしが商店街で見つけて買っておいたものだった。試験管の中に活けられた小さな美しい薔薇だ。なんとなく彼女のイメージが重なったから、プレゼントにちょうどいいと思った。
「イン・ビトロ・ローズっていうの。まるで君みたい……なんて云ったら怒る？」
　霧切は目を輝かせて首を振る。
「あの……ええと……ありがとう。とても綺麗……」
　彼女は少しだけ頬を染めて、じっと薔薇を見つめている。かなり気に入ってくれたみたいだ。試験管には雪が張りつき、さらにその結晶をきらめかせていた。
「ねえ……結お姉さま」
「なあに？」
「私は死んだ妹の代わり？」
　霧切は試験管の薔薇越しに、わたしを見上げる。
「そ、そんなことないよ！　断じてそんなことはない。君は君だよ。死んだ妹の代わりなんて、誰にもなれるはずがないんだから」
「そう、それならよかったわ」
「理解してくれる？」

「理解しているわ」霧切はそう云って、胸にイン・ビトロ・ローズを抱く。「ついでだから云うけど……私からも、結お姉さまにお礼を云わなければならないわ。あの事件のなかで、最後まで私を信じてくれてありがとう」
「そんな……わたしなんかお礼を云われるようなこと、なんもしてないし……」
　照れくさくなって、慌てて否定する。
　わたしはふと、あの夜のことを思い出した。
「そういえば！　まだあの時の約束を果たしてなかったね」
　わたしはそう云って、右手を差し出す。
「約束？」
「『本当の握手は、すべてが解決して、お互いに無事だった時にしよう』って。覚えてる？」
　霧切は肯くと、わたしに一歩近づいた。
　そうして小さな手を差し出す。
　わたしたちはお互いに冷え切った指先を、そっと繋ぎ合わせた。
「よろしくね、霧切響子ちゃん」
「――よろしく、結お姉さま」
　その時、わたしのコートのポケットの中で、携帯電話が震えた。
　確認すると、見知らぬ番号だった。
　わたしは霧切に目配せする。彼女は肯いた。わたしは通話ボタンを押す。
「もしもし……？」
　反応がない。
「もしもし？」
　再度呼びかけてから、受話口の音に耳を澄ます。
　すると回線の向こうから、勇（いさ）ましい音楽が聞こえてきた。
　次第に音量が大きくなっていく。
　この曲は――ワーグナーの『ワルキューレの騎行（きこう）』？
　音楽が大きくなるに従って、何処からともなく轟音（ごうおん）が響き渡る。その音は電話の向こうからではなく、雪の降る夜空の彼方（かなた）から聞こえてくるのだった。
　闇に点滅する赤と白の明かり。
　それは無遠慮な騒音と、圧倒的な速度でこちらに近づいてくる。
　ヘリコプターだ。

やがて灰色の滑らかな飛行体が、わたしたちの頭上まで降りてくる。ローターの回転による風圧が、わたしたちの髪をかき乱す。霧切はスカートを押さえながら、フェンスにしがみついた。
　よく見ると、開け放した乗降口に男が仁王立ちしている。細身のスーツの裾がばたばたとはためき、シックなネクタイが風に踊っていた。そしてきわめつけに、サンタ帽の白いぽんぽんが、彼の頭の上で跳ねまわっている。

『メリー・クリスマス！』

　わたしのケータイから、突然男の声が聞こえてくる。同時にヘリの男が、左手に持っているケータイをわたしに見えるように気障（きざ）っぽく掲げて見せた。
　これは一体――なんなの？
　ヘリコプターは、ホバリングしたまま校舎の屋上に接近してくる。どうやら『ワルキューレの騎行』は、ヘリコプターの中でかけられているＢＧＭだったようだ。しかも男がトランペットを右手に提げているところからみて、一部生演奏だったらしい。

あっけにとられて見上げていると、男はトランペットを持ったまま、へりから屋上に――飛び降りた！
　男はスーツの襟やネクタイの歪みを正しながら、ヘリコプターに合図した。するとヘリコプターはたちまち上空へと舞いあがり、飛び去っていった。
　男は悠然（ゆうぜん）と、わたしと霧切のところへ歩いてくる。
　この男は何者？
　まさか犯罪被害者救済委員会の送り込んだ刺客（しかく）だろうか。
　わたしと霧切は身を寄せ合うようにして身構える。
　あれ？
　でもこの男――何処かで見たことがあるような。三十代半ばくらいの野性味のある顔つきをした紳士――
「ごきげんよう！　麗（うるわ）しい少女探偵のお二人さん」
「もしかしてあなたは……」
「いかにも！　我こそは『激情にして最速（アレグロ・アジタート）』の異名をもつ名探偵、七村彗星（ななむらすいせい）だ」
　思い出した！
　探偵図書館でわたしたちがメモを送ったダブルゼロクラスの一人、七村彗星だ。DSCナンバー『９００』――『９』ナンバーのダブルは、かなりのレアだ。
「もしかして……『黒の挑戦』ですか？」
「いかにも」
　七村はスーツの内側から、あの黒い封筒を取り出した。
　目論見通りだ。わたしたちは犯罪被害者救済委員会に近づくチャンスを得ることができたのだ。
　それにしてもまさか、尊敬すべきダブルゼロクラスの探偵が、こんな急に……そしてこんな派手に現れるとは思ってもみなかったけれど……
「どうやら館が我々の到着を待ちわびているようだ」
　わたしは黒い封筒を受け取り、中の紙面を霧切と一緒に確認した。
　これは……
「ダブルのこの私が呼ばれるほどの事件だ。諸君らルーキーにとっては凄惨（せいさん）な体験になりかねないが――どうだ、私とともに行くかね？」
　わたしと霧切はお互いに顔を見合う。
　そして同時に肯いていた。
「もちろんです！」

——to be continued.

探偵に告ぐ
黒の叫び声を聞け

項目	内容	コスト
場所	ノーマンズ・ホテル	8000万
凶器	ナイフ	5000万
凶器	拳銃(リボルバー)	1500万
凶器	ハンマー	3000万
凶器	ロープ	3000万
凶器	自動車	1000万
トリック	密室	1億
トリック	消失	1億
その他	現金	10億
総コスト		13億1600万

以上のコストから、次の探偵を召喚する

七村彗星

探偵図書館
Detective Library
氏名 網野英吾
EIGO AMINO
DSC 367
探偵図書館
Detective Library
氏名 燕尾椎太
SHIITA ENBI
DSC 245
探偵図書館
Detective Library
氏名 犬塚甲
KOU INUZUKA
DSC 943

探偵図書館
Detective Library
氏名 霧切響子
KYOKO KIRIGIRI
DSC 919
探偵図書館
Detective Library
氏名 五月雨結
YUI SAMIDARE
DSC 888

星海社FICTIONS
キ1-01
ダンガンロンパ霧切
DANGANRONPA KIRIGIRI
1
北山猛邦
Kitayama Takekuni
星海社
『ようこそ　絶望のシリウス天文台へ』
謎の依頼を受け集結した五人の探偵たちを待ち受けていたのは
「犯罪被害者救済委員会」が企む
『黒の挑戦』を通じた連続探偵殺人事件の幕開けだった……！
原作ゲーム『ダンガンロンパ』の
シナリオライター・小高和剛からの直々の指名を受け、
「物理の北山」こと本格ミステリーの旗手・北山猛邦が描く
超高校級の霧切響子の過去——。
これぞ“本格×ダンガンロンパ”‼
DIVE INTO THE BOOKREVIEW &INFORMATION!
北山猛邦
Kitayama Takekuni
2002年、『「クロック」城殺人事件』（講談社ノベルス）で第24回メフィスト賞を受賞しデビューする。
代表作として、デビュー作に端を発する『「瑠璃城」殺人事件』（講談社ノベルス）などの〈城シリーズ〉や、
『踊るジョーカー』（東京創元社）などの〈名探偵音野順の事件簿シリーズ〉、
『猫柳十一弦の後悔』（講談社ノベルス）などの〈猫柳十一弦シリーズ〉がある。
小松崎類
Komatsuzaki Rui
デザイナー・イラストレーター。（株）スパイク・チュンソフト所属。
『ダンガンロンパ』シリーズのキャラクターデザインを担当。
艶にあふれた曲線と着彩で魅力的なキャラクターを描き出す気鋭のイラストレーター。

星海社FICTIONS
キ1-01
ダンガンロンパ霧切
1
北山猛邦
星海社
DIVE INTO THE BOOKREVIEW &INFORMATION!
北山猛邦
Kitayama Takekuni
2002年、『『クロック』城殺人事件』（講談社ノベルス）で第24回メフィスト賞を受賞しデビュー。
代表作として、デビュー作に端を発する『『瑠璃城』殺人事件』（講談社ノベルス）などの一連の
『踊るジョーカー』（東京創元社）などの〈名探偵音野順の事件簿シリーズ〉、
『猫柳十一弦の後悔』（講談社ノベルス）などの〈猫柳十一弦シリーズ〉がある。
小松崎類
Komatsuzaki Rui
デザイナー・イラストレーター。（株）スパイク・チュンソフト所属。
『ダンガンロンパ』シリーズのキャラクターデザインを担当。
艶にあふれた曲線と陰影で魅力的なキャラクターを描き出す気鋭のイラストレーター。
『ようこそ　絶望のシリウス天文台へ』
謎の依頼を受け集結した五人の探偵たちを待ち受けていたのは
「犯罪被害者救済委員会」が企む
「黒の挑戦」を通じた連続探偵殺人事件の幕開けだった……！
原作ゲーム『ダンガンロンパ』の
シナリオライター・小高和剛からの直々の指名を受け、
「物理の北山」こと本格ミステリーの旗手・北山猛邦が描く
超高校級の霧切響子の過去――。
これぞ“本格×ダンガンロンパ”!!
全ミステリファンを沸騰させた
傑作ゲーム『ダンガンロンパ』の
目眩く“前日譚”を、
担当シナリオライター
小高和剛が自ら小説化！
虚淵玄・奈須きのこ・
三田誠・成田良悟が熱賛！
キ1-01

「私にとって探偵であるということは、生きているということと同じなの」
ダンガンロンパ DANGANRONPA 霧切 KIRIGIRI 1
北山猛邦
小松崎類
☆星海社FICTIONS
星海社 FICTIONS キ1-01
ついに語られる
霧切響子の過去――。
これぞ
“本格×ダンガン”!!
「物理トリックの北山」の面目躍如、
これが本格ミステリーだ!
星海社

ダンガンロンパ霧切１

2020年10月1日発行（01）

者　北山猛邦

発行者　太田　史

発行所　　式会社星　社
112-0013
東　都文　区音羽1-17-14
音羽YKビル4
tt　s://www.seikais　a.co.

発売元　　式会社講談社
112-8001
東　都文　区音羽2-12-21
tt　s://www.kodans　a.co.